篤夫は恰度遠慮深く部屋にはいつて來た看護婦に、萬一を氣づかつて照子を呼んで來るやうに賴んだ。

すると、哲三は、その强烈な發作の中から、不思議な努力で、篤夫をみつめて呻き囁やいた。

「僕あ――君に――賴む――照子を森口に渡しちやならん――」

そして、瀕死のけもののやうな目で哀願するやうに付け足した。

「森口にやる位なら、君にやる――」

途端に、口角から、ダラ〳〵と血あぶくがあふれ流れて、白い枕をよごした。哲三は自分の吐いた血に咽せんで、一そう咳入つた。

照子と看護婦がはいつて來た。照子はガーゼで喀血を拭つた。

看護婦は注射器を取り出して、淺猿しく骨だつた胸に藥を注した。

――すべては事務的に行はれ、病人は昏睡に落ちた。

目のまはりは一そう黑ずみ、暗い冷たい影が顏面全體にこびりついた。

「森口先生にお電話をかけてまゐります。」

看護婦は落ついた聲でいつて出て行つた。

照子は病夫の耳元に口を寄せた。

「お寢んなさいね。ようく。」

すると、哲三は、突然凹んだ目を大きく見開いて、さも苦しげに兩手の指で掴み破るかと思ふばかりの力で薄い掛物を掴んだ。彼の目は、今や何を見分けることも出來ず、脣は何をいはうとすることも出來なかつた。むなしく目を見開き、脣で喘ぐだけだつた。

「お寢んなさるのですよ。ね、ようく。」

夫人のひとみは、いつものまゝの夢ましさと美くしさとを失はなかつた。彼女は白い、むつちりとした指で水にぬらしたガーゼをつまんで土氣いろに生氣を失ひ行きつゝある脣を時々しめしてゐた。

篤夫は沈默したまゝ突立つてゐた。彼は病人が、たつた先程自分に囁き殘した、あの猛惡な言葉を――穢らはしい遺言を思ひ浮かべてゐた。

――だが、この病人は、あの怖ろしい危惧をほんたうに抱いて死んで行くのだらうか？　永遠の闇の底に光つて蛆蟲に食はれながら現世に殘した美くしい妻をいつまでも眺めることが出來るといふ、あの怖ろしい信念をほんたうに抱いて死んで行くのだらうか？　篤夫は、ぽつてりと白く肥えた、限りなく軟柔な夫人の姿と、血死期の苦難に悶えて、骨そのものゝやうに瘦せとがつた指で薄い掛物をつかんでゐる哲三とを見比べるやうにした。

――あの人は靈魂の不滅を――いゝえ、靈魂なんて氣高いものでなくとも怨念の不滅を信じてゐる

のか？

さう考へて、一時ゾッとしたが、しかし若々しい脣をひき曲げてすぐに嘲笑した。

——馬鹿くさい。小説家なんて奴あ死にかけても夢を見てゐるんだ。結局人はこの五體の、僅少な體積の中に限られてゐるだけではないか。五體が亡びて何が殘るだらう！

彼は死に行くものゝ妄執をあざけつた。しかし、彼は、完全に哲三がいひ殘した言葉から解放されることが出來なかつた。

——森口にやる位なら君にやる——

その、皺枯た、聞えるか聞えぬかの呟きは、蝕み込んだやうに胸の底に殘つてゐた。彼はパッチリした若々しい、何の邪念もないやうな目を投げて、底光りのする綠いろの着物に包まれた大柄な彼女の後すがたをみつめた。

だが、篤夫は自分の欲求が、今や新らたに未亡人の寂寞な生涯に沈淪しようとするこの女性に、甚だしい速度で傾きはじめたのを感じた時、死者の森口醫師に對する呪ひが、自分の方へおのづと轉向して來るやうな氣がした。恐らく單なる疑惑からさへ森口をあのやうに呪詛する哲三が、萬一、自分とこの美しい女性と相抱くやうなことがあつたら、どうして例の永遠の闇の底から見のがすことが出來よう！

——フム。

と、彼はそんな妄念をうかべながらまたしても自ら嘲つた。

——僕の生活が、墓穴の中の骸骨の意志で傷つけられるやうなことがあり得るなら、僕はこの一吹きの息で、大空に輝く太陽を吹き落して見せる。

哲三は、しかし、あんなにまで憎悪し呪詛した森口醫師を、呼吸ある肉體と思考する心で迎へることをせずに濟んだ。醫師の自動車が着く二三分前に、彼は視力のつきた赤濁つた目で、ギョロ〳〵と空を見まはしたあとで、今は呟き入る力もなく、ゴクリと深い息に咽んでそのまゝになつたのだつた。

照子夫人は涙を見せなかつた。篤夫もそれを見ると哭いても見せられなかつた。

「隨分長い病氣だつたわ。」

と、夫人は獨言のやうにいつた。そして醫師と篤夫とをかへりみて、歎きも訴へも含まぬ、單に音樂的な調子でいひ足した。

「生きてゐるといふことも、木村には隨分つらさうでしたわ。この病氣が出てからといふものは——」

篤夫たちは默つて頭を下げた。

——あだかも前以つて心の準備がされてゐるかのやうに、照子夫人はすこしのためらひもなく、居合せた二人に後事について話すのだつた。

「お知らせしなければならないお友達も多いのですけど、もうかうなつて見れば醜い痩せ削けた顔を見ていたゞいたところで當人も嬉しくもないでせうし、身寄りといふものは當人もあたしもまるで持つてゐませんから、今日いそいで騒ぎ立てゝも仕方ないと思ふわ。それよりこれも何かの縁でせうから、御都合がよろしかつたら、あなた方お二人だけ今晩お泊り下さいましな——あたしも寂しい氣がしますから——」

醫者も、持つてゐる醫院の方は副院長に任せて來たので、居残るに何の差し支へもなかつた。篤夫とすれば、當然、恩人の遺骸の置かれてゐる家で一夜を送るべきが當然だつた。

内弟子分の書生だけは目を泣きはらしてゐた。遺骸は清められ、北枕に横たへられた。

たそがれは逸早く薄ねずみ色に落ちかけた。そしてさすがに高笑ひのつゞかぬ小洋館を夕闇で押しつゝむのであつた。

夜の床

月が水のやうに澄んだ夜ぞらを、高く、白く流れてゐた。星はひどく近々として、しめつぽい夜風が肌冷たく流れてゐた。

哲三の遺骸を安置した部屋の窓の下の卓を圍んで、三人の男女は坐つてゐた。何となく、めい〳〵、死顔をハツキリと眺めるのが厭はしかつたと見えて、誰の發議ともなく電燈に淡青い蔽ひがかけられたが、それがいかにも喪の色を思はせてふさはしい氣がされた。

しかし三人は遺骸の方は顧みずに、高ぞらを漂ふ月かげを、まともに浴びるやうな位置に身を置いて話してゐるのだつた。

篤夫は青ざめた月光を受けて、寧ろ石刻のやうな美くしさを見せてゐる青年醫師を、さきほどからぢつと觀察してゐた。彼は森口醫師については詳しい豫備知識を何も持たなかつた。彼がこの人に關して聞いたのは、木村哲三の呪詛の言葉だけだつた。

ふと、話が途絶えたあとで、夫人は醫者に話しかけるのだつた——

「このごろ奥さんはいかゞ？　いくらか御快方に向いて？」

醫者は香りの高い莨の煙を、輕く吐き散らして物憂げに答へた。

「二三日前、ちよいと見舞つてやりましたが、これももう追付けこの世のものではありますまい。」

「まあ、ねえ——」

と、夫人は吐息をした。

醫者はつゞけた。

「もし、僕に妻を癒す力があれば、こちらの木村君をも癒すことが出來たでせう。しかし、木村君がよくいはれた通り女性はすべて男性にくらべて活力があるものですなあ——うちの妻の方が半年は早いだらうと思つたが、惜まれる木村君はなくなつても、うちの方はなか〳〵生きつゞけるらしいです。」

「おくさんはどこがお惡いのです？」

と、篤夫はたづねた。

「やはり肺です——只今、實家の海岸の別莊へ保養にやつてありますが。」

と、醫者はしづかにいつた。

——ふと、篤夫は奇怪な想像に囚へられた。これは不思議な廻り合せではないか？　一人は肺にな

やむ良人を持ち、一人は肺になやむ妻を持つてゐたのだ。二人とも、到底根治しがたい難病を病む配偶者を抱いて、長いあひだ陰慘たる一日々々を送つてゐたのだ——して見れば、さうした同じやうな宿命を負ふ男女が、當然、ある種の同情を持ち合はぬとも限らない。

であるとすれば、この醫者は、やはり哲三の言葉の通りに、この美しい夫人と祕密な接近があり得たかも知れぬ——

だが、篤夫の目には、森口醫師は、聰明な美紳士ではあるらしかつたが、顏にも姿にも凛々しげな力に充ちたところは見られなかつた。どこか脾弱い、裏打の薄いやうなところが見えて世間の毀譽褒貶、良心の自己苛責を乘り越して、氣まゝな生活の享樂に急ぐほどの氣持は持つてゐないやうに見えるのだつた。

——この人は顏を見てもあまりにとゝのひ過ぎてゐる。小さな、細かな均整を保ちすぎてゐる。かういふ人はいつも因襲の重荷の下に惱みながらそれを刎ね返す氣力はないのだ。

「結婚は一種の運命です。さう簡單なものではない——細田さん、あなたはまだ御獨身だとしたら、隨分考へなければならん問題ですね。」

と、醫者がいつた。

「しかし——」

と、夫人は靜かな微笑を帶びた聲で口を挾んだ。

「あなたやあたしのやうな重苦しい結婚生活ばかりはありませんわ。細田さん、安心して、どなたとでも結婚なすつて大丈夫ですよ。」

「有難う。」

と、篤夫も笑ましげに答へた。

忠實な書生が、明朝發送すべき死亡通知の電報や、廣告原稿の文案をもたらした。夫人はその文案を、森口には示さずに篤夫に示した。

「これでよろしい？」

篤夫は書生から萬年筆を借て、事務家らしく一二の文句を訂正した。

そして彼は、自分が哲三が死んだあとのこの木村家に――換言すれば照子夫人に、いつの間にか一種有用な人間となつたことが感じた、彼は敵愾心といふほどの强さを持たぬ、いはゞからかひ心地で心の中に森口に話かけた。

「森口さん、病人がなくなればお醫者はもう不用になるのが常ですよ。」

しかし、森口は、まるで空想家のやうな目つきで、窓の外を高く輝き流れる十六夜月をみつめてゐた。

「われ〳〵は死といふ現象を見すぎてゐます。平生は平氣だが、木村君のやうに近しい人がなくなつた場合には妙な氣持になりますね。肉體はそこに横たはつてゐるが、魂だけは高い空に上つて行かれてゐるやうな氣がする――」

「木村先生も靈魂の不滅について先程おなくなりになる前話しておいでした。」

と、篤夫は苦味を帶びた調子でいつた。

「まあ、あなたにそんなことをいつて？」

と、新しい未亡人は、何のわだかまりもなく、しづかに微笑してゐた――

「あたしなんかには、木村ほど靈魂なんか無視した生き方をしたものはないやうに見えたけど――」

――夫人は――夫人自身も、何度も木村哲三の口から、あの恐ろしい呪詛を聞いてゐたに相違ある まい。それなのに、何といふ素直さと靜かさとでこんなことがいへるのだらう――

「しかし、あなたは靈魂の不滅を信じますか？」

と、篤夫はいつた。

「あたし？」

と、照子は月光を正面から浴びて笑つた。

「あたし、そんな問題は考へたこともないわ。あたしはまだ若いつもりでゐますもの――それに、こ

んなに達者ですもの――必要のないことを考へたりしたりするのは面倒ですわ。必要なことでも仕たくない方の女ですから――」

――いつまで起きてゐても仕方がない、明日からは葬送その他でいそがしい日が來るから、今夜はゆつくり寢て置きたいと、夫人はやがていひ出した。死者の部屋には夫人と看護婦とが寢ることにな

つて、森口醫師と篤夫とは、籐細工のベッドが二つ並んだ一間に案内された。水、ウイスキー、果物、菓子なぞが夫人の心いれで準備されてゐた。

二人はしばらくの間、窓を開けひらいたまゝにして置いた。庭に漲ぎる水のやうな月光は、白いベッドをいふにいはれぬ寂しさで照らした。

二人はめい〳〵のベッドに腰を下したまゝ、水を割つたウイスキーのグラスを手にしてゐた。

――女だけになつて、照子夫人は泣いてゐるだらうか？

どうしたわけか、そんなことをぼんやり考へたあとで篤夫はいかにも醫者を相手の會話らしい問題を口にした。

「肺病は、結局不治でせうか？」

醫者は力のない瞳で篤夫を見返したまゝよそごとを考へてゐるやうに答へなかつた。

「現代の醫術は肺病をなほすことは出來ないのですか？」

と、篤夫が重ねてたづねた。

醫者は脣からグラスを離した。

「病氣をなほすのは醫術ぢやありません。」

と、彼は答へた。

「僕達はたゞ患者を見てゐるだけです。患者を亡ぼす力と生きる力との消長を見てゐるだけです。それ以外に、現代の醫學は何等の權威を主張することも出來ないのです。もつとも、それは醫術には限らない。あらゆる宗教も學術も、人類から不幸を取り去ることは出來ずに、たゞ人類の惱みを見てゐるだけぢやありませんか。」

「しかし、あなたは――。」

と、篤夫がいひかけると、醫者は悲しげに微笑して遮つた。

「それにも拘らず、僕が醫者をしてゐるのはなぜか？――と質問なさるのでせう？　さうした無力な職業にどうして從事してゐるかとなると、僕は人間はどんな方角をあゆんだとて、遂に結果には到達しがたいことを知つてゐるからです。しかし、その無限の道には、過程には、いつも何等かの意味がある。意味があると考へなければ、われ〳〵は自殺した方がよつぽど樂でせう。僕なぞは只かう考へてゐる。醫者も現在ではたゞ患者の病苦をながめてゐるだけだ。しかし折角この世に醫術といふもの

が出現したのだから、此術を相傳して行くうちには、結局いつかもう少し進歩した、もう少し強力な術となるだらう。そして人類を病氣から救ひつくすことが出來るかも知れない――」

「あなたは理想家ですか？」

と、篤夫がいつた。

醫者は奇妙な目で見返して微笑した。

「僕は肺病專門の醫者のくせに、妻の肺病をさへ治し兼ねてゐるのです。僕は大變妻を愛してゐたのです――結婚して二年目にあの病に取りつかれた。それを良人として醫者でありながら癒すことが出來なかつたのですからね――僕だつて恥もし歎きもしました。だが、どうにもならないのです。人間は、あんまり失望が重なると、却て一種の希望家になる――希望の成就を千年もの先きに置いて滿足するやうになる。」

と、いひかけて、彼はまた妙な微笑をうかべた。

「でネ、をかしいのですよ。この家の死んだ主人は、僕が彼の病氣についてあまりに構はないといふので、イライラいらついて、君は僕の女房に戀してゐるんだ――だから僕を一生懸命になつて癒してくれようとはしないんだ――なんテ。無理もない妄想だけど、僕にすれば、いくらか想像力もあらうといふ小說家を相手に、さも治療に自信のある神醫のやうなお芝居も出來ないぢやないですか。」

遂に森口醫師は一個の紳士であるに相違なかつた。

篤夫は醫者が急に寡婦になつた美夫人に、何等情的な野望をいだかぬ性格だと知ると、すつかり興味を失つてしまつた。

彼は三杯目のグラスを干して、ソロ〳〵横にならうと考へた。

すると、森口醫師がいひ出した。庭に漲る月光に見入りながら、獨ごとのやうにいひ出した――

「だが、妙なものだネ。僕は木村から僕が死んだら、君は妻を盜むだらうといはれたことがあるが、今、ふとそれを思ひ出すと、海岸で寢てゐる病氣の妻のことを頭に上せる前に、今かうしてゐても、木村の細君、あの若さでこれからどうするだらうなあ――なぞと考へはじめてしまふ――僕が漁色家だつたら、ちよいと色彩のある興味を照子さんに對して持つかも知れぬ。暗示の偉力について、僕はゆうべ外國醫者の報告を讀んだが、暗示といふものはやつぱり恐ろしい効果を持つものだなあ。だが、どんな精神療法家の報告を讀んでも書いてある通り、要するに、被術者の心的狀態、または素質いかんによつて、その効果に多大の逕庭あり――だ。だから、僕は照子さんの幸福な再婚を望むだけなのだ。」

――醫者先生！　馬脚をあらはしたぞ。

と、篤夫は寢卷になつて横たはりながら心に呟いた。

――照子さんに全然興味がないならなぜ「幸福な再婚」なんぞ望むんだ。君だつて僕と少しも變らない漁色家さ。たゞ君は臆病なんだよ――人類は畢竟強いか臆病かの二つに區別される。君は臆病なんだ。その外の何でもありはしない。

「月の光を見てゐると、波を見てゐるやうな氣がする。」

と、青年醫師はまた呟いた。

――さうだ。波を見て、海岸の肺病の細君のことでも考へてゐた方が、君には無事だ。臆病者！

篤夫は目をつぶつて答へなかつた。

しかし、目を閉ぢた篤夫は、もう死者や、美しい寡婦や、弱つたらしい醫者については考へてはゐなかつた。彼は彼のやうな若冠の一祕書の分際で考へるにはあまりに大きい、現在の政局の變化を、新聞で讀んだり、社長の談片で聽いたりした材料から、綿密丁寧に考量して見てゐた。大きな世界の變化は、だが、彼のやうに微小なものにも何等かの影響を及ぼすであらう。機會はどんなものでも見のがしてはならぬ。社長が今度の政權の移動と一緒に官界に乘り出したら、その緣故にすがつて自分ももつと廣大な世界に一歩を踏み出さねばならぬ。篤夫は貧賤に成長したので、すべて權力的なものに病的な執着を持たずにはゐられなかつた。やがて、未來の想像に滿足して彼は眠つた。醫者はいつまでも窓外の月を眺めてゐるのだつた。

過去物語

それから二日目の午後、夭折した小說家木村哲三の遺骸は、大森山手のある古刹の墓地に埋葬された。哲三の故郷は九州のはてで、そこにも遠い親戚があるだけなので、わざ〳〵來弔するものはなかつたし、照子は照子で、これもみよりが死に絕えてゐたから、集まつて來た會葬者は知人とか職業上の關係者とかいふものにすぎなかつた。その上、變癖な性分の哲三には、死後のことまで見てやらうといふほどの親友もなかつたし、一方からいへば、進んで立入つたことまで口入するには、未亡人があまりに美しすぎるといふ點もあつて、痛くない腹を探られるのを怖れて、だれ一人として特別な深切をこの場合見せるものはないのだつた。

で、必然、死者の目下に當たる篤夫だけが、葬儀の萬事萬端を取りはからふ必要が出來、それが無事に果てゝからも、殘務の整理を見てやらねばならぬ始末になつた。

陰暗たる雨もよひの夕方を、墓地から照子と乘ものを同じうして歸ると、篤夫は書生を相手に挨拶

狀の名宛を書くやうな事務まで取つた。

しかし、不思議なことには、天氣こそ薄暗い曇り空で、夕方がめつきり早く來るやうな日だつたが、書生をのぞいては一家の人々に陰氣な影はまつはつてゐなかつた。部屋部屋には早目に灯りがつき、隅々まで明るく輝やいて、この家からつい先程死者の棺が送り出されたやうな氣配は殆ど感じられなかつた。

正直にいへば、夫人から小間使、下働きの女中にいたるまで、病氣持の主人の癇癖强い生活態度には、ホト〳〵弱り拔いてゐたので、その人を送り出して、やつとホツとしたといふやうなものが感じられた。

篤夫にしても、哲三は自分を新らしい世界に引き出してくれた恩人ではあつたが、ごく最近の親近者にすぎなかつたので、その人がこの世から消えてしまつたことは別に寂寞の程ではなかつた、哲三は彼にはもうこの上必要がある先輩ではあり得ない――寧ろ、今後實社會にどし〳〵突き進まうとする實際家の彼に取つては、奇癖的な哲三は、邪魔になればとて賴りにはならぬといふやうにさへ感じられることもあつたのである。で、彼は、鼻歌すら出さうな暢氣な氣持で、會葬者名簿を繰りながらハガキの名宛をかきつゞけた。

夜が來て、一日の忙がしさに疲勞しつくした家人たちは、みんな早目に床にはいつた。篤夫も東京

へ歸らうかとは思つたが、夫人に引止められて見れば、もう一晩位喪の家に宿直するのが禮儀のやうにも思はれて踏み止まつた。

美くしい新寡婦は、自分を慰めるために泊つてくれた青年を、なるべく寂しがらせまいとするやうに、壁もカーテンもすべて淡藤いろを使つた自分の居間に導いて、手づからコーヒをいれてくれたり、故人が買ひ溜て置いた上等の紙卷の函を開けてくれたりした。

篤夫は湯上りの生々した肌に、うつすり化粧つた夫人をながめて、ちつとも看病疲れさへ見えないのをいぶかしみながら、しかし口ではこんな風に同情した。

「この秋は、あなたもさぞお寂しいでせうねえ――」

照子は上瞼のやゝ重さうな、それでゐて切れ長な、東洋風なかゞやきを持つた目をあけて篤夫を見た。そして微笑した。

「ありがたう。でも、そんなに寂しいとも思はないかも知れませんわ。あの人が生きてゐる間でも、私は別に樂しくも思はなかつたから――」

篤夫は見返した。

夫人は何氣ない微笑をつゞけて、

「さういふと、妙な冷たいことをいふ女だとお思ひかも知れないけど、木村は私をよく知らうとしな

かつたし、私は木村を戀人として愛してはゐなかつたのですもの――しかし、あの人は、ある時期の私をたしかに慰めてはくれましたの。家事を取る必要のない寂しい家婦に、腕白な子供が――たとへ繼子にしろ一種の遊び相手であるやうに――」

「しかし、先生はあんなにあなたを愛してゐました。」

と、篤夫はいつた。

「さうよ。」

と、夫人は圓まつちい顎でうなづいて、

「あの人は私を愛してくれましたわ。うるさい位に――でも、私を知つてはくれなかつたのよ。あの人の考へでは、自分が相手を激しく愛する場合には、相手も自分を十分に愛さなければならない――そんな風に信じてゐたらしいの。でも、私は愛すにはあまりに深くあの人を知つてしまつたから、どうしてもあの人の要求通りにするわけにはいかなかつたの――」

「僕にはあなたの氣持がはつきりわかりません。」

篤夫はカフェ碗にさじを入れながら呟いた。

「あなた、木村から私たちの過去を聞いたことがあつて？　どういふ事情で結婚したか――といふやうなことを。」

「いゝえ。」

「私達の結婚は、少し妙な事情からそんなことになつたのよ――でも、そんな昔ばなしは、あなたを退屈させるだけだわねえ。」

と、未亡人はつけたばかりの紙卷を灰皿に揉みにじりながらいひ止めた。

「いゝえ、話して下さい。あなたのやうにお美くしい方と、木村先生のやうな天才との結婚だから、きつとすばらしくロマンチツクな物語りがあるのでせう。」

篤夫はそゝつた。新しい寡婦は苦つぽく微笑した。

「ところが、まるでその反對なの。それはあの人の方は、あんなに感情家だから隨分情熱的な目で私を眺めたかも知れなかつたわ。しかし私の方はあの場合はだれでもよかつたのよ。若い人でありさへすれば――」

「若い人でありさへすれば――」

と、篤夫は不思議さうに口の中で呟いた――これほどの美女が、若い人でありさへすればといふやうな自棄な氣持で、結婚について考へる必要がどこにあらう――

「ええ、あの頃私は、今度の結婚こそ、若い人でありさへすれば――と、たえずさう考へてくらしてゐましたわ。」

と、夫人は他人ごとを話すやうに、平らかな調子でつづけた――

「だつて、私はそれまでに、二度結婚生活を送りましたの――いゝえ、正直にいへば、ほんたうの結婚生活といふより半結婚――ひらたくいふと、おめかけ見たいな境遇でしたけど、二人主人に死に別れたんですの。二人とも六十すぎた紳士でしたわ。」

さうしたことを語るに當たつて、照子は少しも恥も歎きも感じないやうに見えた。彼女は孤兒だつた。叔父に育てられて女子大學の英文科を、もう一年で卒業といふところまでやつたが、その春、保護者である叔父が、瀆職事件で引上げられて、莫大な追徵金を差し出した上、長い間の牢獄生活をせねばならなくなつたので、彼女はその後自活の必要が生じたばかりではなく、あべこべに、病身の叔母と、まだ中學や女學校にゐる甥姪の學費を捕充してやる義務さへ出來たのだつた。

必然、彼女は職業を求めた。最初は一日に五軒の家を家庭教師として巡訪した。すると、ある大實業家が、自分の家にこのごろ子供を教へに來る妙齢の處女の美貌に氣がつくと、巧妙に手をまはしてさうした忙しい、しかし收入の少い仕事であたら青春を消すよりも、著名な銀行家である自分の第二夫人として、豐な生活を送り、その上叔母一家にも十分な扶助をあたへた方がはるかに得策なことを、さる老女の口から說かせたのだつた。照子は、その時、事實すつかり疲れてゐた。何しろ、午後三時から夜九時までの間に、少い時は三軒、多いときは五軒の家を巡つて、いたづら盛りな子供たちに數

學や國語を教へねばならなかつたが、その報酬はどれ程はいるかといふと、一ケ月六十圓に充たなかつた。それでは叔母一家を助けて立つて行くはずがないので、朝から晝までを、ある宣教師の許で口述筆記をつとめた。一日、休むひまがないので、その當時かぼそかつた彼女は、日毎に糸のやうに細まつて行くのが目に見えて自分にもわかる氣がして悲しかつた。

そのやうな場合に、さる老女からの以上のやうな話は、十分に魅惑的であつた。彼女はぐつたりと疲れたからだを寢床によこたへて、過勞にしびれた頭でひと晩考へた末、翌日すぐに承諾の旨を申し入れたのである。

實業家福邊老人は、おきまりの脂肪ぶとりではあつたが、さまで見苦しい老衰はまだ見せてゐなかつた。禿頭のみがきもよく、髯も毎朝當たつて、チョツキのぼたんにはダイヤを飾つてゐた。身綺麗で、さつぱりした氣性で、物惜みはしなかつた。彼女は高輪の一角の、品川の海を一目に見はらすやうな好い位置にある小體な、氣持のいゝ別宅にすまはせられた。毎夕、會社巡りをしたあとで老人は必ずたづねて來たが、ほんの一二時間相手をすれば本宅へ歸つて行つた――もつとも本宅ばかりではないやうで、ソレ者上りが住んでゐる箱崎町の方へもちよいと廻らねばならぬ義務があるやうに見えはしたが――

高輪の別宅生活は、照子をさまで苦しめなかつた。それどころか、稚ない時から叔父の家のかゝり

うどになつて他人の叔母や子供たちの間にはさまつて育つた身には、これまでにはないゆとりと和らぎとが感じられた。

「それで、そのころから、私、めき〳〵と肥り出したのよ。ある月なぞは、ひと月でたつぷり八百目も肥つたわ。だん〳〵ぶよ〳〵に肥つて、しまひにはどうなるだらうつて、ばあやと笑つたことがありましたわ——ようくおぼえてゐてよ。あの婆や、いゝ氣性だつたけど、地震で死んでしまつたといふ話だわ。」

照子はこんなことをいつて微笑して見せた。

「——で、福邊のおぢいさんは、私を四年間世話をして、私が二十五の秋、七十一で死んだの。私が受けた手當ては、福邊家から三萬圓だつたわ。」

彼女は、しかし、自由のからだになつて、すぐに結婚する氣もなかつた。當分の生活費に差し支へがないので、ブラ〳〵遊んでゐると、半年ばかりすると、保養に行つた箱根で、福邊老人の碁がたきだつた、南宗畫の大家の折山といふをぢさんとめぐり合つた。高い畫料をコツ〳〵と蓄めて來た老畫家は、大ていの商人は三舍を避ける富を積んでゐた。その老人が、今度は、代り合つて彼女の白い手を求めたのである。

しかし、この老人は、たつた一年半彼女を酷愛したあとで、腦卒中でみまかつた。老人の遺言によつて、彼女が新たに受けた手當ては五萬圓だつた。

「私はかなりなお金もちに、そんなわけでなつたのよ。その上、その頃はもう叔父も出獄して、民間の會社にはいつて、その方へ仕送りをする必要がなくなつてゐたので、女の私には使ひ切れるお金ではなかつたから、今度はこれをもとでに、ほんたうの結婚といふものをして見ようと思ひ立つたの。どうして木村のやうな男を選んだか、といふと、前にもいつた通り、私はもう深切ぶかい年寄にすつかり飽きてゐたから毎日々々のこの眠たさを、癇癪の強い若い男の手でゆりさまして貰ひたかつたのだわね。つまりいつの間にか、泰平無事な生活の中で、すつかりぐうたらべいになつてしまつた心でも、まだどこか若々しかつたから、あの人の、あの惡魔らしい作物を讀んで、妙に刺戟を求めて近づいて行つたといつてもいゝのよ。しかし、私はすぐにわかつてしまつたの——木村が欲しがつたのは、私のからだと、お金だけだつたんだわ。私は、あの人が私に附屬する物質だけしか愛してくれないのを知つたので、たゞそれだけを任せて置いたの——私は後悔もしなかつたかはりに、いつも〳〵、どこか遠くにほんたうの私の戀人がゐて、それがすばらしい美少年で、やさしい〳〵氣性のひとで、いつか私のこのハツキリ目のさめない心を、荒々しく呼びさましてくれる時があるといふやうな空想を捨はしなかつたわ。その氣持が木村にわかつたので、あの人はあんなにやき餅やきになつたのだわ。」

彼女は長々しい昔がたりを語りをはつて、ゆつたりとつけ足した。

「私といふ女も、自分でもをかしな女だと思つてゐるのよ。今かうしてゐても、いそがずに待てば、きつと私が持つてゐるやうな事が來るといふ氣持を忘れないのよ。つまり、おぢいさん達と一緒にゐる時、あんまり長生きをせずに死んでくれゝばいゝと思ふと、間もなく死んでくれたし、木村の癇癪と長病らひに困つて、もう大ていに私を困らせたらいゝと思ふと、これも間もなく死んでくれたし、大ていの望みはしづかに待つてゐれば遂げられるものだといふことを、天然自然に運命から教へられたセイかも知れないわね。」

——では、今、君はどんなことを望んでゐるのか？　あのヘボ醫者が說破したやうに幸福な再婚をか？

と、篤夫は心にいつた。

夫人は笑かたむけた——例の不斷の微笑で篤夫をみつめた。

「だれかゞいつてゐたけれど、いつでも現在に滿足して不平のない生活を送つてゐるから、私はこんなに肥つてゐるのだつて——滿足なんかしてゐやしないけど、今まではこの人のためなら現在の生活を壞してもいゝと思ふほどの人に出あはなかつたわ。でも、これからを保證は出來ないことよ——それは自分でも知つてゐるわ。私だつて、まだこのまゝ老い朽るには若すぎますもの。」

篤夫は、照子の前にゐる時ほどのいら立たしさを、これまでどんな女性の前にゐても感じたことはなかつた。照子のねばつこい、ゆつたりとした口調や、だらしがないやうに思はれる位に始終笑つてゐる目や、さも退屈さうに、だらりと膝や卓の上に置かれてゐるむつちりと肥えた白い手や、彼女の全體は、甘たるい倦怠をあたりにまき散らして、だしぬけに狂暴に飛び突いて行くか、それともこちらがまづあくびをして見せるか、二つに一つの道をすぐに選ばなくてはならぬやうな焦燥を覺えさせるのだつた。

「そのやうな境涯を經ておいでになつたのに、身の上ばなしをあなたからお聞きすると、少しも悲慘さや苦痛さを感じないでゐられるのは不思議ですね。」

と、篤夫はいつた。

「私がだらしがないからかも知れないわ。私はぐうたら女ですものねえ。」

相變らず、ねば〳〵しい、しかしのんびりした口調で彼女は答へた。

篤夫はこの女だけは得體が解らぬ氣がした。彼もまた、妙にダルな氣持になつて、重たさを全身に感じながら、寢部屋に定めてくれた部屋に引取つた。

あらゆる環境を自分の役に立てることを忘れてはならぬといふ彼の信條は、彼をして呟かしめた——あの女だつて、いつかは何かの役割をつとめてくれるだらう——少くとも金持の寡婦である以上は、僕のために小さな金融機關になつてくれる位の義務はある筈だ。

奇怪な取引

翌日は濕れそぼちた、陰氣な天候だつた。寢すごして、晝近くやつとベツドを離れた篤夫は、午食後、夫人のお伴をして大森の墓地に詣つた。そしてステーションで彼女に別れて、夕方近く東京にはいつた。

もう社に立ち寄るにも遲すぎる時間なので眞つ直に小ホテルに歸ると、留守中に思ひがけない人間が訪問して來たのを、一葉の名刺によつて知ることが出來た。

卓の上に載つてゐた名刺は、古川春彌のそれだつた。添ひ書きがしてある——

×

小生としては緊密な用事でおたづねしました。御歸宅次第、お電話を下さればすぐ再訪いたします。お電話をお願ひします。

×

——あの氣違ひが、どんな用向きを持つて來たのだらう？

レストオランで、あのやうな別れ方をした後、ふぢ子の家の門前で、皮肉な態度で行きすがつたまま になつてゐる彼が、何の積りでわざ〳〵出向いて來たのか、まるで篤夫には見當もつかなかつた。

彼は春彌を好いてはゐなかつたが、しかし、あの變妙な性格については多少の好奇心を持つてゐた。名刺の文句は興味を唆つた。彼は着更へもすまさぬうちに、室内電話を外線に繋がせた。

春彌は家にゐ合せたと見えて、やがて出て來た。不在を詫びると、ひどく恐縮した風で相手は答へるのだつた——

「どうも、木村君はとんだことでしたね。いろ〳〵御疲勞のあとをまことにすみません。しかし、どうしてもお耳に入れたいことがあるのですから、どうぞ今晩御在宅下さい。ええ、すぐにこれから伺ひます。」

——一時間ばかりして、秋雨の夕闇が鬱陶しく蔽ひかかつて來た頃、春彌は篤夫の部屋をたづねて來た。

憂鬱な音樂家は、相變らずキチンとした黑背廣に、ひよろ長いからだを包んで、篤夫を認めると、ちよいとテレたやうに無器用にぼゝゐんで手を伸した。

篤夫は隔意なく手を握つて、

「御用があれば、お呼び立て願へばいつでもこちらから出向きましたのに、――さあ、どうぞ――」

と、椅子を進める。

「いや、用といふよりも――」

と、春彌は口籠つて、

「用といふよりも、お願ひなのですから、僕が伺ふのが順當なのです。」

彼は椅子に坐つた。そして、膝の上に載せた帽子のつばをいぢりながら、

「お邪魔ぢやないですか？　いや、お邪魔にはちがひない。しかし、君にあふまではどうしてもぢつとしてゐられないので。」

篤夫は春彌の目が、ソハ〳〵と落つかないのを感じた。けれども、まだ全く來訪の理由がわからなかつた。

――眞人間が抱く希望や意志なら、大てい見當がつくが、相手がこんな氣違ひではまるで豫想もつかない――一たい、この人はどんな「お願ひ」をしたいのだらう？

「で、御用向はどんな事です？」

篤夫は堪へ切れなくなつて、好奇心に充たされて相手をみつめながら尋ねた。

「用向ではない、お願ひなのです。」

と、春彌は相手の言葉を訂正して、

「實はネ、僕はもう二日ばかり不眠症にかゝつてゐるのです――隨分顏いろが惡いでせう？」

成程、まるで煤けたやうな顏いろだ。しかし、そんなことはどうでもいゝ――

「いや、なか〳〵血色がよろしいですよ。だが、おからだは大事になさらないと――僕なぞは、もう半年あまり不眠の苦痛は忘れました。このごろはぐつすりと眠れます。」

「羨ましいです。それといふのも、君は現在めぐまれておいでだから――」

眞實春彌は羨ましげにいつて、しげ〳〵と相手を眺めた。そしてかくしから莫入れを取り出して紙卷に火をつけ、味もなさゝうにふかしはじめた。

ちよいと言葉が途絕えた。

沈默が苦痛なやうに、春彌はまた呟きはじめる――

「だが、僕は腦はさまで疲れてはゐないのです。人間は、たとへ十日眠らずとも、眠りを必要としない時はそれでいゝらしいですな――尤も、生理的には、四日間の不眠が人類に取つて最大限度だといふけれども――」

「しかし、何があなたをそんなに眠らせないのです？」

と、突然、篤夫が訊ねた。

春彌は、ヘドモドした。

「僕はネ、祕密主義の人間です。僕は人間は苦痛にしろ、快樂にしろ、自分自身の衷に藏して現すべきものではないと思ふ――が――」

と、いひしぶつて、やつと乘り切つて、

「が、君の前では不思議に内心を暴露してしまふ。いつかのレストオランでもさうでした。そして今夜も、僕は君に何もかもいはなければならなくなつた――」

篤夫は默つたまゝ紙卷の煙を吐いた。

春彌は力の鈍い目で、しかし、まじ〳〵と眺めて、

「なぜといつて、僕の氣持を十分に了解して貰はないと、僕の願ひも肯かれないだらう――實は、僕は、あの小さい娘がどうしても諦められないのですよ――」

モゾリといつて、顏をみつめたまゝである。

篤夫は苦笑した。彼はうなづいて見せでもする外はなかつた。

「はあ？」

「どうしても諦められない――侮蔑されゝばされるほど、遠ざかれば遠ざかるほど、僕のパッションが熱烈になるばかりだ――これは不合理ですね。それは僕も知つてゐる。一たい、あんな小娘が、僕を侮蔑する權利はない。僕から遠ざかる權利もない。ところがあの子は、僕と一緒に遠乘をすることを拒んだばかりか、今度、僕からピアノを習ふことさへ拒絶したのです――親類同志で教へを受けても、わがまゝが出て覺えられないからといふ口實で――なあに、僕にだつて、どんなつもりで僕から習ふことを拒絶したかはわかつてゐる。あの子は、僕の愛情が明らかに暴露されさうになつたのに氣がついて、一生懸命逃げたのだ――生意氣至極です。ねえ、さうぢやないですか？」

「ふぢ子さん、そんなお積りではないでせうが――」

春彌はくびを振つた。

「いや、さういふ量見に違ひないのです。しかし、僕としては、相手がそんな風に出ると、ます〳〵妙な熱情に捉へられて來て、どうにも自分で自分が始末出來ません。で、お願ひといふのはそこなのです――」

また、彼は口籠つた。

篤夫は安らかな微笑で、話しつゞけるやうに促した。

「で、お願ひといふのはそこなのです。」

と、春彌は繰り返へして、

「この場にのぞんで、あの我儘娘の心を轉向させることの出來るのは君一人だ――君にお願ひして、

あの子にちよいと忠告して貰へば、あの子はまた僕からピアノも習ふだらうし、もつと親密にもしてくれるでせう。」

「そのやうなことなら――」

と、篤夫は明らさまに笑つた。

「そのやうなことなら、何もわざ〳〵おいで下さらずとも、電話でおつしやつてもふぢ子さんにうまくお話したでせうに――もつとも僕の言葉が、あの方にそれ程有効かどうかはわかりませんが――いづれにせよ、ふぢ子さんも、それではあんまりわがまゝすぎますから――」

「いや、早速御承諾でありがたい。いや、君がちよいと忠告してくれさへすれば、萬事たゞちにうまく行きますとも――。」

と、春彌は眼をかゞやかして、よろこばしげに叫んだ。

「現在のところ、古川家では、君がすばらしい勢力を持つてゐるのですからネ。ところで、君の言葉添ひで、僕がふぢ子の側にもう一度行かれるやうになつたら、その時には、今一歩進んだお願ひをしたいのです。そのお願ひをも、今からお聞き入れを得て置きたいのですが――」

「はてね？」

と、篤夫はまた怪訝にとらへられて相手をながめた。

「今一歩進んだ要求といふのは、一たいどんなことなのです？」

「つまり、その場合に、君から完全にふぢ子を頂戴したいのです――君にあの子を見捨て貰ひたいのです。」

篤夫は、相手がほんたうに發狂してしまつたのではないかと、さすがにゾツとした。

「しかし、ふぢ子さんは僕の所有物といふわけではなし――」

と、辛うじて彼は答へた。

春彌は痴かしい熱心さで頭を振つた。

「いゝえ、全然君の所有物ですよ。だから君は、あの子を捨ることも出來る。正直にいふと、君に捨られたあとのあの子が、たとへ全然僕のものにならないとしても、君から離れるのを目擊するだけでいゝのだ――僕はあの子が、君の物になつてしまつてゐるのを見てはゐられない――僕はさう考へただけでも氣が違ひさうになる。」

――いや、もうとうに君は氣が違つてしまつてゐるのだ！

「そんな馬鹿なことが！」

「いゝえ、僕は本氣でいふのです――しかし、君にしろ、ふぢ子を嫌つてはゐない。嫌つてゐないものを捨て下さいといふからには、僕の方からも、十分それに報いなければならんのは當然だ――で、

その報酬について、僕は昨夜も一昨夜も寝ずに考へたのだが、結局あんまりいゝ智惠もうかばないので――。」

春彌は、寧ろ詫びるやうにいつて、

「甚だ平凡なことだが、ふぢ子の代りに僕は君に、一人の相當身分のある令嬢と、御要求の金錢とを捧げようと考へるのです。金錢はかなり多額でよろしい。ね、甚だ失禮な申分だが、君は立身して行かれるには、まだなか〳〵黄金の力を要すると思ふ――」

篤夫は自分みづからを、人間以上もしくは以外の獸として生き拔かうと決心したことがあつた。が、春彌の言葉を聞いてゐるうちに、この音樂者が、獸なぞといふものよりもつと下賤な、もつと穢らはしく、醜くい蜘蛛かなぞのやうに感じられて、一種の戰慄を禁じることが出來なくなつた。

「君は、僕の申しいでを、君を侮蔑するものと考へてはいけません。これはすこぶる自然な取引であると信じます。身分ある令嬢と今いひましたが、僕は決して無責任なことはいはん――それは僕の妹なのです――妹はふぢ子とは全然氣性が合はぬので、あの子を訪問しないから、君はまだ御存知ないでせうが兄の僕が見てもなか〳〵美人ですよ。ぐつと寂しい顏立だが、なか〳〵美人ですよ。決して、ふぢ子に遜色がありません。隨分、妹に戀着した貴公子もあつたのですが、内氣ものですからまだ戀を經驗する勇氣がないのです――しかし、僕は兄ですから、僕はあの子に君を戀愛せしめる權利があります――また、萬一、彼女が君の要求に應じないとしたら君は彼女を穢してもよろしい。君の自由にまかせます。」

たしかに春彌は狂氣してゐるに相違なかつた。

篤夫は突然意地の惡い微笑をうかべた。

「僕はこれまであなたと人間同志のつもりでおつき合ひしてゐましたが――」

「僕が鬼だとでもいふのですか？」

と、春彌は白い齒を剝き出すやうにして、ニヤリと笑つた。

「鬼でもよろしい――君からけだものと呼ばれても――爬蟲と呼ばれてもよろしい。君にあの子から遠ざかつて貰へばそれでいいのです――」

「もし、僕が御要求に應じなかつたら？」

と、篤夫は調子を高めずに尋ねた。

「その時には――」と、いひかけて、春彌は頭を振動かして、

「いや、君はきつと承知してくれるだらうと信じますよ、決して不利な取引ではないですからな。」

狂痴

奇怪を極めた春彌の申しいでは、さすがに篤夫をもたゞ嗤はせては置かなかつた。一種無氣味な、氣違ひじみた目つきでぢつと瞶めながら、くど〳〵と鈍いひゞきの聲音で呟く、この闖入者に、彼は嫌悪と好奇との入りまじつた感情を抱かずにはゐられなかつた——

「君は僕の言葉を冗談だと思つてゐますかね？　それなら大違ひだ。」

と、春彌はテーブルの隅を摑むやうにして、身を乘り出させながらいふのだつた。

「僕は眞面目なのだ。これより眞面目なことは一生なかつた位に眞面目なのだ。君が僕の言葉をテンから信じることは出來ないのはよく知つてゐる——僕は隨分非常識な申しいでをしてゐるのだからね。しかし、寧ろ生死さへ賭けてゐるといつてもいゝ位に思ひ詰めてゐるのです。で、君はどこまでも不承知だと仰有るのですか？　あの娘と——あのふぢ子と離れることを——」

篤夫は相手を押し靜めようとして、出來るだけ表情を動かさず答へた。

「あなたは繰返していひますが思ひ違ひをしてゐらつしやるのですよ。僕は別にふぢ子さんとあなたが仰有るやうな仲ではないのです。ほんの遊び相手に選ばれてゐるだけなので——」

「いゝえ、辯解せずともよろしい。」

と、春彌は遮つた——

「僕は何も君があの娘に戀してゐるとはいはない——どうして君のやうに立派な青年があんな小娘に戀々として誘惑などするものですか！　しかし、あの娘の方では君に戀してゐるのです。いや、それはもうハツキリ分つてゐることだ。あの娘が君を見る時の目を見たゞけでも分る。君に話しかける時の聲を聞いただけでも分る。」

篤夫は苦笑した。

「しかしですねえ。若——かりに、あの方が僕に戀してゐるとしたら、僕が仰有るやうに古川家から遠ざかつたところが、あなたの思ひが叶ふわけにも行きますまい。なぜといつて、戀する娘は、遠ざかれば遠ざかるほど戀に燃える筈ですもの——」

「君は僕をどこまで苦しめようとするのですね！」

と、春彌は嚙みつくやうな白目で睨むやうにして、

「そんな理窟は、僕だつてとうから知つてゐる。戀する者を引離せば、燃え立つばかりだ。そんなこ

とは、どんな三文小説家だつて書いてゐる。だが、僕にはふぢ子が君に對してどんなに戀焦れようと、それは別問題なのだ。ただ、君によつてあの子を專有されなければそれでいゝのだ。君さへあの子の側を離れてくれゝば――」

そして、媚びるやうな目になつて、

「先刻からいふ通り、僕は何も無條件で要求するのではない。僕は妹も上げようといふのだ――美くしい、たつた一人の妹さへ上げようといふのだ――そして、それでも不足なら金をつける。まとまつたお金を差し上げる。かなりまとまつたお金を――妹はふぢ子に較べて醜くいとはいはれない。決して醜くゝはない。むしろ美くしい位だ――それに、その上お金も――」

篤夫は憎惡と侮蔑とをあからさまにあらはして、冷たく笑つた。

「ハ、ハ、ハ。あなたはよつぽどどうかしておいでですよ。御令妹は品ものぢやありません。また、僕のふぢ子さんに對する友情が金で換算出來るものでもない。もつと紳士らしく口をお利きになつたらいゝでせう。」

「ウム、君のおこるのは尤もです。君の言葉は一から十まで尤もです。」

と、春彌はうなづいて、

「しかし、妹については心配しないで下さい。僕は妹が君を一目見たらすぐに戀してしまふのを知つてゐる。僕は十分に君に關するよい豫備智識を妹にあたへて置いた――君をひどく心の中で憎めば憎むほど妹の前で讃めて置いた。僕のこの計畫は昨日今日のものではないのです。妹は君を一目も見ぬ間から、古城に幽囚された貴處女が、遠くからやがて來ようとする美くしい、仁俠な騎士を焦れるやうに見ぬ戀にあこがれてゐるのです。だから、僕は妹の君への溺沒を、前以て君に證言することが出來るのだ。それから金については、君の言葉は餘りに尤もすぎる。そんなことはまるでうはべの觀察だ。金といふものは、君、君がいふやうにそんなに穢らはしいものでもなければ、單純なものでもない。もつと深刻な、恐るべき奴なのだ――僕は割に富裕な家に生れたが、海外をあるきまはつてゐる間に、この金のために隨分恐怖すべき事件が起こつたのを數多く見た。それは零落した王女の貞操を買ふことも出來るし、二人とない天才青年を自殺させることも出來るものだ。君だつて、今目の前に二萬圓とまとまつた金を見たら、多少の魅力を感じるかも知れない――」

さういふなり、春彌はかくしの中に手を入れて、無造作にムキダシのまゝの小切手帳を取り出すと、小型の銀いろの萬年筆で、今いつたゞけの金額を記入した。そして萬年筆のキヤツプの先にほつた認印を捺した。

「さあ、この二萬圓を見給へ。これを巧に使ふと、君は隨分立派な利得を獲ることが出來るでせう。それとも、これんばかりでは役に立たんといひますかね？」

ギョロリとした目で、春彌はみつめつゞけた。

篤夫は、机の上に置かれた一葉の小切手をジッとみつめた。

たしかに讃むべき額であつた。空想では彼は千萬圓をふところにしたこともあつたが、現實では一生の間にこれだけのものを自分のものにすることが出來るかどうかも危まれるのであつた。まるで飢ゑ切つたものがうまさうな食ものを目の前に見た程の情熱が全身をかすかに戰慄させた。

――ふぢ子との友情が、これ程の値打で取り引するに足りるだらうか？

彼はさう考へて、寧ろびつくりした。

「君は不足だといふのかね？　何なら數字を多少訂正してもよろしい。」

春彌は一か八かの大賭博をうちつゝあるものゝやうな表情で、飛び出すやうな目で篤夫を注視しつづけてゐた。

だが、篤夫は自分の心に湧いた氣持を、われとかなぐり捨るやうに頭を振つた。

――馬鹿！　そんなケチ臭い了見を出してどうなる！　二萬や三萬の金が何だらう！　もし、それが欲しいなら何もこんなコケ猿の珍妙な要求の代償として手に入れずとも、あの美くしい、白い手からいつでも貰へるのだ――照子夫人の、あの美くしい新らしい寡婦の手から――あのひとは、僕がさういひさへすれば、いつだつてそれんばかりのものは出してくれるだらう！　しかももつと特別な景

品つきで――

彼は照子夫人の、あの豐滿な胸が、どんな望みをも受け容れたがつてゐるのを感じてゐた――今日はまだハツキリさうした欲望が生れてゐずとも、こちらの出方ひとつて、明日はあのひとは自分をあの豐な胸に搔きいだくであらう――

「まあさういふものは引込めて下さい。」

と、篤夫は瞳から意識的に輝やきを消して、興味もなげにいつた。

「お金はおつしやる通り大切なものです。貴重なものです――さう輕々しく取扱はない方がいいでせう。」

春彌は案外な顏をしたが、さも失望したやうに、

「ぢやあ、君は金なんか不用だといふのかね？」

篤夫は明るく滿足げにうなづいた。

「僕は自分流儀の遣ロでいつかお金を作りませう。それまで待たうと思ふのです。」

「フム、君は實に不思議な人ですね。」

と、春彌はテーブルの上の小切手を瘦た指でまさぐりながら、

「君はたしかにさう不自由のない暮しをしてゐられるとは思はれんが――十分にかういふものが必要

だと思はれるが――」
「だからいつてゐませう？　僕は貧乏です。雜誌社の一祕書です。必然的に金を欲してはゐますが、しかしどんな場合にもそれを自分流儀で作りたいのです。强制されるのは、僕はどんなことでも御免です。僕は自由でありたいですから――」
「それでは、僕の交換條件は全部入れてくれないのですね？　僕のために古川家への出入りを廢めてはくれないのですね？」
と、春彌は全然無氣力になつて、別に憤りや呪ひをあらはすでもなく呟いた。そして吐息をした。
篤夫は、若々しく無邪氣さうな笑顏を突然見せた――それはたつた今までの大人びた、鋭烈な表情とは全く打つて變つたものであつた。
「いゝえ、まあさう惡く取らないで下さい――僕は決してあなたを苦しめたくはないのです。大ていあなたに御滿足があたへられませう――あなたのお考へになつた方法とは全く違つたやり方で――ハ、ハ、只今申したやうに僕の自分流儀で――僕は社長の令嬢と戀愛するやうな野心はまだ持つてはゐないのです――それに、若ふぢ子さんがあなたがおつしやるやうに僕を信愛してゐられるものとしたら、あなたに對するあの方の觀念を、これまでとは異なつたものに、僕の力で出來るかも知れません。僕をかなり信じて下すつてもいゝと思ひます。」

「では、君は、僕をうまくあの人に取り持つてくれるといふのですか？」
キラ〳〵と春彌の目が輝いた。
――何といふいやしい言葉だ。この男の口から「取り持つ」なぞといふ表現を聞かうとは！　人間といふ奴はナンテ淺猿しいものなんだらう！　どんづまりに來れば、うれしいにつけ哀しいにつけ、教養や虛飾から解放されて野性になるのだ！
「ええ、出來るだけあなたのために働きませう。」
「ほう！」春彌はだしぬけに立ち上つた。そして痩せ枯れた、骨々しい手を差し伸べた。
よんどころなく、篤夫はバサ〳〵に乾いたその手を握つた。
「ぢやあ、お願ひしますよ。ぢやあ明日はあの子を訪ねてやつて下さい。そして一日も早く僕のために盡力して下さい。」
「たつた今、あなたは今後あの方を訪問しないでくれといはれた――」
と、篤夫は笑つた。
「しかし、事態が一變しました。」
春彌は篤夫の手を振つた。
「では、失禮しませう。お疲れのところ、お邪魔しました。」

春彌はまるで憑かれたもの〻やうにソロ〳〵と出て行かうとするうしろから、篤夫は例の小切手をサモむさいものをでも掴むやうにテーブルから摘み上げて、

「どうぞこれはお待ち歸りを――」

春彌は長い指でべり〳〵と小切手を裂いて、

「ではどうぞ。」もう一度ぢつと篤夫を見た。そして立ち去つた。

――篤夫はドア口に立つたまゝ、階下に見送らうともせずに後姿を眺めた。

春彌の足音が階下に消え亡せると、彼は突然カラ〳〵と笑ひ出した。

「何といふ奴だ！　氣違ひ！」

と、口に出して呟いた。

「だが、音樂家なんて奴は妙なものだたあ。どうしてあんな小娘のことなんぞ、あんなに突きつめて思へるのだらう！　コケの一心といふ奴だな。」

しかし、彼はもう春彌のことなぞは長く考へてゐなかつた。たゞ、自分の周圍にやたらに事件が湧いて來るのが愉快でならなかつた。

彼は疲れてはゐた。木村家の通夜や葬式のあとのからだは、さすがにダルかつた。いつぞやはつ子から送られた高價な洋酒を一パイぐいのみして、そして長椅子の上にそのまゝ倒れた。

闖入者

四五日して、篤夫ははつ子からの電話を受けた。彼女はいつぞやのやうに、母親と小女とを芝居に今夜出してやるから、い〻時刻を見計らつて訪ねて來てほしいといふのだつた。

篤夫に取つては現在のところ、彼女のみが全體的の所有物だつた。彼も又彼女に逢ふことを心のどこかで求めてゐたので、その夕刻、雜誌社が退けると、すぐに牛込加賀町をさしていそいだ。

ほんのりと化粧つて、紺地へ荒くかすりを抜いたお召を着たはつ子は、どこか面痩がしてゐた。彼女は小さな玄關に出迎へると、彼がぬぎすてた赤靴を、下駄ばこに入れた。

「だれもお客はあるまいけど、女のお友達でも來るとウルサイから――女たちはお互にそれは口やかましいのよ。」

一ばん奥の、簞笥や鏡臺が置いてある部屋の火鉢の前に、はつ子は篤夫を招じた。

「あたしの部屋は、繪を描きかけてゐるので一めん散らばつてゐるのよ。こゝはお茶の間――もう、

こんなところでも失禮だつておこりはしないでしよ。」
篤夫は坐りながら、はつ子の白い細い指を握つて、
「お茶なんかあとでようございますよ。僕は君の顏をようく見なければ——」
「なぜ？」
と、はつ子は、べつたりと篤夫の側に坐つて、なまめかしく輝く目でながめた。
「なぜあたしの顏をごらんになるの？」
篤夫はまるで何ものか吟味するやうに、ぢつと、生眞面目さうにみつめて、
「あれからほかの人に逢つたかどうか——男の目で見られた女の顏には、きつとアリアリと痕が殘るものです。」
「まあ、あなたはあの人のことをいつてゐるのね。」
はつ子は訴へるやうに答へた。
「そんなことを疑つては、あなたはあんまりひどいわ。わたしがどんな風にくらしてゐるか——どんな氣持で暮してゐるかおわかりにならないあなたでもあるまいのに。」
「わかりませんよ、君の胸の中までは——」
「いゝわ。そんなことを仰しやるならあたし、ごらんに入れるものがあるのよ。顏なんぞより、もつ

とたしかな證據を。」
プイと、振拂ふやうにして立ち上つたはつ子は、荒つぽく部屋を出て、やがて二三通の手紙を持つて歸つて來た。そして、それを突きつけて——
「これをごらんになつたら、あなたはあたしにあやまつて下さるわよ。きつと。」
篤夫はわざと薄氣味わるげに手紙を眺めた。
「おや！　これは近藤さんからのおたよりぢやありませんか。こんなものを僕に見せて、嫉妬で黑こげになつて死なせたら面白からうとでもいふのですか。」
「憎らしい。まあ讀んで下さいな——御生だから——」
「よしませう。自分の戀人のところへ來た他の人の戀文なんか——」
「よんで頂戴よ。お願ひですわ。あたしの氣持はよくわかるわ。」
と、はつ子は膝をゆさぶるやうにして强ひた。
「ぢやあ、仕方がない。拜見しませう。」
わざ〳〵、キチンと坐りなほすやうにして篤夫は取りあえず一通を拔き取つた。
手紙は白いレタアペエパアに克明な文字でキチン〳〵と行を正して書いてあつた。しかし內容は少からず恨みを帶びた調子で、この頃たえて出向いても來ねば、たよりさへ打絕えてゐることを責めた

ものであつた。
「ね、どう？　あたしの心の中がよくわかるでせう？　もつと讀んでごらんなさいな。今朝來たのなんか、隨分おこつてゐるわ。」
「もう澤山」
と、篤夫は捨られた古い戀人のことなどには、最初から興味があつたわけではなかつたので、殘りの手紙は下に置いて、
「もう澤山――近藤さんの手紙なんか僕にはどのみちいい感じのするものではない。しかし、みんなわかりました。僕が惡かつた。」
「と、わかつたら――」
と、はつ子は篤夫の方へ身をもたせかけるやうにした。
「と、わかつたら――」
と、篤夫は微笑した。
「僕は約束通りかうしてあやまります。」
――彼は彼女の手を取つた。
はつ子は、うつとりと夢ましげに、男の胸に身を寄せつづけてゐた。

「あたしはあたしで、あなたがあんまり御無沙汰だから心配でならなかつたのよ。かうして逢つてゐると、平生の涙や疑ひが愚しくなるのだけど、離れてゐるといろんなことを考へて――何度もいふやうだけど、あたしにはどういふものか、あなたといふ人が何だか信じられないんですもの――女といふ女の前ではほゝゑんで見せる方のやうな氣がして――」
「ひどく蔑すまれたわけですね。」
と、篤夫は目をしかめるやうにして苦笑した。
「それでは僕といふ人間がまるで男娼のやうに取れる。」
「でも、色魔といふものは上品なものだつて――男で苦勞といふ苦勞をして來たお友だちがいつたわよ。活動寫眞や小說に出て來る色魔は、教養のある考へ深い女性を到底あざむくことが出來ないやうにテンから見えるけど、實際の色魔はあんな下品なものではないつて――だからほんたうの色魔の手にかゝると、どんな女性でも溺ぼれてしまふんだつて――それでなければほんたうの色魔とはいはれないとその方はいつてゐたわ。」
と、はつ子は胸にもたれたまゝ、上目で青年を見上げてゐた。
「ハ、ハ、色魔といふものも、そんなに上品で魅惑的な存在だとすれば、僕なぞも一生に一度はなつて見たいものですね。そして君のやうな美くしい柔しく人の胸を、すつかり嚙みあらしてしまつて上

げたい。僕みたいに、あべこべに心の髓まで嚙み荒されてしまふやうでは心細い。」

「いゝえ。」

と、はつ子は心底から懸念さうにいふのであつた。

「あなたは、あたしとどんなに親くしてゐる瞬間でも、何だか外の、遠いことを考へてゐるやうな顏をなさる時があるのよ。さういふ瞬間を感じると、あたしはゾツと身震ひが出ますの——だれかほかの方のことを思ひうかべてゐなさるのではあるまいかと思つて——」

「君は鋭い感じを持つてゐる人だ。だけど、僕の場合は全く邪推ですよ。君は僕のことをもう少し深く知つてゐてくれるはずだと思ふが——」

と、さうはいつたが、篤夫は男を戀する女性の胸にひらめく、鋭敏な直覺力に打たれざるを得なかつた。しかしどんなに相手の直覺や想像が鋭いにもせよ、それは鋭いだけで、鋭ければ鋭い程、却て尖端が鈍りやすいものでもあるのを、先天的に篤夫は知つてゐた。

「あたし、あんまり愛しすぎてゐるからいろんな妄想を起こすのかも知れないわ。かんにんしてネ。」

案の定、はつ子の直覺のとがりは鈍つた。

——二人は熱い茶を樂しく飲んだ。

——そして、門へは錠を下して程近い神樂坂のレストオランへでも食事に行かうかなぞといつてゐるところへ、思ひがけなく、フト、入口で音なふ男のこゑがした。

そのこゑを耳にすると、ハツとはつ子の顏いろが變つた。

「困つたわ。」

と、彼女はつぶやいた。

篤夫はすつかり讀み取つた。そして彼もまた刹那の困惑にとらへられるのだつた。

「あの人？」

「ええ、さうらしいわ。」

きこゑるかきこゑないかの聲で、彼女は答へた。

門口の音なひは繰返された。

「あなた、こゝにぢつとしてゐらしつてネ。すぐに歸すわ。あたしの氣持を今夜こそはつきりお知りになることが出來るわ。」

はつ子は、さうセカ〳〵と囁やくと、小刻みに出で去つた。

すぐに篤夫の心の混亂は去つた。

——フム、面白い場面だ。

まるで喜悲劇の登場人物の一人でもあるやうなゆとりが、彼の心に生じた。彼は門口の方へ耳を傾

けた。

「まあ、どうしてだしぬけにいらしつたの。」

と、にべもない調子でいふはつ子の聲がきこゑた。

「お邪魔だつたかね？　しかし、あんまりたよりがないので病氣でもしてゐてはと思つて――上つてもいいかね！」

沈んだ、いくらか皺枯れた語韻だつた。

篤夫はこないだ森ケ崎で隣の遊園からその人の遠い姿を、はつ子と一緒に眺めた晩のことを思ひ出した。そして冷たく微笑した。

「えゝどうぞ――散らかつてゐてよ。」

と、はつ子が答へて。

狹い家で、はつ子の畫家を兼た居間と、この茶の間へは、間に八疊がひと間あるだけだつた。話は筒抜けにひゞいて來た。

「いそがしいのよ、ごらんなさい、あたしだつて、こんなに勉强してゐるのよ。」と、はつ子がいつた。

「成程。」と、間を置いて、

「しかし――」

「あなたは何かおこつてでもゐらつしやるの――折角たづねて下さるにしては隨分不思議な顏をなすつてゐらつしやるわ。」

「しかし――」

「しかし――何だと仰有るの？」

「はつ子さん、君はこのごろまるで人が變つたね。」

すべての感情を押つぶして、努めて靜かにならうと努力してゐるやうな調子で近藤はいつてゐた。

「君の眼付を見ると、まるでかたきか闖入者をでも眺めるやうだ――」

「ほ、ほ、闖入者を眺めるやうだ――つて、闖入者には違ひないぢやないこと？　だしぬけにいらつしやるのだもの今夜これからお芝居へ行かうと思つてゐたのよ。お母さまや女中はもう先に出してやつたの。」

「芝居に？」と、鈍くもつれて、

「芝居に行く程なら、さういそがしくもないわけだが――」

「あんまり仕事に疲れたんですもの。」

間。

「はつ子さん。」

皺枯た聲が呼びかけた――

「僕は迂濶な男だ。君から注意されないと髯を剃るのも忘れる位に迂濶な男だ。しかしその位迂濶な僕に、何か疑惑がましいことをいはせるのは、君の遣口がさうしたのだよ、君は何か僕に祕してゐるね？　え！　はつ子さん――何か祕してゐることがあるだらう？」

「あたしがあなたに何か祕してゐやしないかと仰有るの？　どうしてそんな風にお考へなさるのか知れないけど、でも、もしあたしが何か祕してゐるとしたら、そんな風にお聞きになつたつて駄目だわ。聞かれていふやうなことなら最初から祕すはずがないのだもの――ほ、ほ、ほ、御自分でいふ通り、あなたはそんなところは隨分迂濶かも知れないわねえ――ほ、ほ、ほ。」

はつ子はひどく早口にひどく能辯であつた。寧ろ小面が憎いまでにひゞいた。

「ウム、僕は實際迂濶ものだ。定めて君の目からは嗤ふべきものに見えるだらう。しかし、今までは君はそんな口を利きはしなかつたね？」

「さうでしたか知ら？」

「はつ子さん、君は何か僕に敵意を抱く理由を持つのかネ？」

「いゝえ、敵意なんかちつとも持つてはゐないわ。あなたが奇妙な顏をして探偵のやうな口をお利きになるから、あたしの方でも妙な返事をする外はないのよ。」

また重苦しい間が來た。

はつ子は、突然大さう明るくいつた。

「まあ、あたしはまだお茶も上げなかつたのね。それこそかたきの家へ來ても口だけは濕せといふことがあるわ。お茶を入れて來ますわ。」

と、いつたかと思ふと、いはゞ蓮葉に障子をあけ立てして、トン〳〵と廊下を輕く踏んで、やがて茶の間に姿を現した。

はつ子は篤夫と顏を見合せると、ちよいと首をすくめるやうにして、白い指を口に當てた。篤夫は脣を曲げるやうにして答へた。

二人の心は、同時にある惡魔的な快感で震蕩されるのだつた。

はつ子は長火鉢の猫板に、細い指さきで書いた。

――オ、キ、ニ、メ、シ、テ

とその指先の動きを辿ることが來た。

篤夫は默笑した。冷やかに默笑した。

はつ子は茶を注ぐと茶托を捧げたまゝ篤夫の側に寄つた。篤夫はしかし接吻はあたへなかつた。

彼女はやさしく睨んでそして再び近藤の待つ部屋の方へ行つた。

篤夫は一切が滿足だつた。彼がこの部屋にゐることが暴露したとしても恐れることはないと思つた。人間はどんな場合でも敗者の位置にさへ立たねばいゝのだ。彼は近藤を戀愛では征服してゐる。この上、腕力ででも何でも爭はう。Aの狀態において勝つ者はBの狀態においても勝利を占めるであらう。

——お馬鹿さん、この上、まだ何をコボさうとするのだ？

と、彼は意地惡くなほも耳を傾けるのであつた。

惡魔哄笑

——篤夫ははつ子の家の、狹い茶の間の長火鉢に、さも氣樂げに肱をもたせて、紙卷をスパリ〳〵ふかしながら、二間はなれた部屋での、たど〳〵しげな、探り合ひの會話に苦笑をうかべながら耳を傾けてゐた。

「僕だつて、もう長く日本にゐるわけにも行かないのだ。置みやげに殘して行くつもりの著述もあらまし書き上るばかりになつてゐるのだが、つい最後の結論へ來て、君が僕の心に蒔いた疑惑や不安のために、ちつともペンが進まなくなつてしまつた——僕はもうとうからある變化が君の心に來てゐるやうな感じは持つてゐたのだ。だが、いくら何でもわれ〳〵の長い間の間柄を考へると、そんなことは信じたくなかつたのだが——」

審美學者の近藤は、ポツリ〳〵とした、不器用な口調でいつて、モゾリと默り込むのだつた。

蓮葉にひゞくはつ子の聲が答へた。

「あたしは又、あなたがあんなに勉强してゐらつしやるからお邪魔になつてはと思つて遠慮してお訪ねしなかつたのよ。」

「それがすでに以前の君の口からは聞けなかつた言葉だよ。」

と、近藤は力なく、

「君は以前は僕がどんなに忙しい時でも平氣で僕の邪魔をしたものだ。僕はその邪魔をよろこんで歡迎した。君がひと晩僕の側で暮したために、あとの二晩を徹夜しなければならないやうな時でも――」

「だから、さういふことを平氣でした自分が、このごろになつて濟まないことに思はれて來たんですわ。後悔してゐるんですわ。あなたの側にあたしといふものがゐなくなれば、あなたの勉强は倍の速度で進むわけですもの――そして――」

と、はつ子は突然嘲けるやうな口調になつて、

「そして、あなたに取つてはいつも仰有るやうに、戀や女性といふものが生活の全部ではないんですから――あなたには專攻の學問があつて、その學問にひとつの新らしい意義をつけ加へることが、あなたの一生の事業なんですもの――あたし、いろ〳〵な點から考へて、あたし程あなたに取つて邪魔なものはないやうに思はれて來ましたのよ。」

――しばしの間。

近藤の鈍い聲が沈鬱に繰返した。

「はつ子さん、それが君の本音なのだ。ね、君の本音なのだね？」

「ええ、さうよ、正直な氣持よ。」

と、はつ子は少しもためらはずに、

「あたしだつて、いつまでも世間知らずの娘のやうに、何も考へずにはゐられませんもの――あなたは、あたしのやうな女はただお荷物だといふことを悟つて見れば、多少思案しなければならないと思つてゐますの。」

そして、ゆつたりとつけ足した。

「あたし、どうもあなたのやうな、沈靜な學者と一生一緒に生きるには不向きな女のやうにこの頃は思はれはじめたのよ。きつとこのまゝヅル〳〵ベツタリに結婚でもしたら、あなたの生涯の不幸になりはしまいかと――それで、實は明日にも御相談に上らうかと思つてゐたんですわ。」

「ウム、やつぱし僕が想像した通りだつたのだ。」

と、近藤は重苦しく呟いた。

「それにずつと以前、ある友達が僕にいつたこともある――はつ子さんといふひとは、靜かに藝術を樂んで行ける人ではないんだ。繪なぞといふ靜的な美に沈潛して行くだけで滿足出來るひとではない

んだ――その點を考慮に入れ給へ――と、さういつてくれた男があつた。ぢやあ君は、今更何か新しい刺戟に生きようとしはじめたのだね？」

「まあさういへばさうかも知れないわ。」

はつ子はひとりごとのやうにいつた。

「あたしにもまだはつきりと自分の心がわからないのよ。何を求めて悶えてゐるのだか？　でも、ただこれだけはいへるの――あたしはそのお友達が考へたあたしと、さまで違つた性格ではないかも知れないわ。あたしはあなた方のやうな高い心の生活といふやうなものだけに痲醉して行くことが出來ない女のひとなのよ。それに、あたしだつてもうかれこれ三十のこゑを聽かうとしてゐるんですもの――これまで經て來た世界があんまり寂しすぎたと考へても無理はないと思ふわ。」

「僕は美くしくもないし、若くもないし、僕の生きてゐる世界はヂミな世界だ。」

と、近藤は歎息した。

「だが、君といふ人は、そのヂミな僕の生活をかざるたつた一輪の大きな美くしい花だつたのだがなあ――」

「あたしはそんな靜かな花なんかではないのよ。」

と、はつ子の語調には微笑がまじつてゐた。

「あたしはやつぱしあたしの生活をかざる美くしい花を見つけてゐるさびしい女なのよ。」

――下らない比喩だ！

と、篤夫は紙卷の煙を電燈の方へ吐きつけながら心に呟やいた。

――もつと、單的に、きつぱりと問答をしたらいゝぢやあないか。

「で、結局、君は僕と遠ざかりたいといふのかね？」

と、近藤は、到底戀を語るにはふさはしくない、韻きの鈍い調子でいつた。

「遠ざかるとか別れるとかいふ問題は二の次ぎだわよ。」

と、はつ子は寧ろ教へるやうにいつた。

「あたしはもう自分のことで一ぱいなの――自分の氣持にふさはしい生活をどうしたらはじめられるかと思つて――今もいふとほり、あたしは三十に手が屆きさうになつてゐるのですもの――そしてこれまでは何一つ華やかな夢を見ずに生きて來たんですもの。」

學者は怒らずに吐息をした。

――不思議な心理だ。

と、篤夫は苦々しく微笑した。

――あの男は馬鹿か、腑拔けか、でなければ聖人だ。しかし、聖人が女を求めるだらうか？　ハ、

ハ、つまりは馬鹿で腑抜けなんだ。
「あたし、もう劇場へ行かなければならないのよ。母が待つてゐるでせうから――」
と、突然はつ子がいつた。
「また、そのうちにお目にかゝるわ。そして、ゆつくりお話するわ。これからお化粧をして、着更へをしますから――」
「さうかね？　ぢやあ、その時君の氣持をもう少しくはしく説明して貰ひたいな。」
と、近藤はさういつたが、急に、今までとはまるで違つた、思ひもかけず激しい調子になつて、
「はつ子さん、僕は激することが、君がよく知つてゐる通り嫌ひなんだ。僕は君を殺す前に、君と僕の仕事とどつちが大事だか考へないぢやあゐられないんだ。それを僕も考へて見ようと思ふ。」
「まあ、今更そんなことをお考へになるにも及びますまいねえ――」
と、はつ子は恐れ氣もなく輕く受た。
「いや、もう少し考へて見る必要がある。」
近藤の聲は再び激しさを失つた。
――彼は氣の抜けた亡靈のやうに歸り去つた。
篤夫は、最後の近藤の言葉に多少の興味を持つた。彼は微笑まずにその言葉を玩味した。

――馬鹿で、腑抜けな上に、あいつは氣違ひだ。春彌にしろ、近藤にしろ、世間には何といふ半氣違ひが多いのだらう！
はつ子が、門口に錠をさして、いそ〳〵と戻つて來た。
「不思議な對話をお聞きになつたでせう？」
「お芝居にも小説にもならないけど、でもたしかにあの人の言葉は妙な味がありますね。」
と、篤夫は笑つた。
「何だか不氣味なところがあつて面白かつた。」
「あの人はあたしを殺すかも知れないわ。」
と、はつ子は怪しいあでやかさで微笑した。
「あの人は自分の仕事がどんなにツマラないものだか、いくら馬鹿でもすぐに氣がつくでせうから――又、あたしにしたつて、あの人の仕事と一緒に値踏みをされてはたまらないもの――」
「僕のはつ子さんをね――」
と、篤夫は唆るやうに含笑ふのであつた。
――しかし、二人はもう陰氣な闖入者のことには長くかゝづらつてはゐなかつた。そして先刻の計畫通り、程近い神樂坂のレストオランに、晩餐を取るために出かけたのである。

美くしい戀人たちが、肩をすりよせるやうにして、もつれ合ふ黑い影を澄んだ月光の下に街路に落しながら、繁華な町にいそぐとき、十間ばかり後から、ヒヨロ長い一人の男が、トボ〳〵と跟いてゆくのを注意するものはなかつた。その男は二人がはいつたレストオランの二階の、二間つゞいた貸切室のひとつにはいつた。次ぎの一間にははつ子と篤夫とがまづテーブルを占めてゐたのだつた。

——この男が近藤だつたとしたら、今度はあべこべに彼がはつ子と篤夫との會話を十分に盜みぎきする機會を得たわけである。

失戀者

——翌晩、篤夫はもうソロ〳〵寢床に横にならうとしてゐた。

變り易い秋ぞらで、大分夜が更けてから、いつかハラ〳〵と時雨が玻璃窓の外を渡つてゐた。十二時にも近いだらう。小ホテルはシインと靜まり返つてゐた。

フト、電話のベルが鳴つた。階下の受付が彼に呼びかけてゐた。

「御面會がありますが——」

篤夫は眉をひそめた——が、何となく胸に豫感が來た。はつ子かも知れない——近藤との間に何か面倒が起きて相談にでも來たのか——

「どんな客です？」

「文學士の近藤定一さんといふ御名刺ですが——」

篤夫はさすがに驚かされた。近藤定一といへば、昨日はつ子の家で聲だけ聽いた、あの不幸な戀人

だつた。
「近藤？」
と、彼は呟き返しながら、どうして當の失戀者が――自分のために戀を奪はれた男がやつて來たのか、その徑路を考へて見ようとした。一たい、自分とはつ子との關係を、誰から彼は耳にしたのか？はつ子からか？　はつ子が何のために？　しかし、自分とはつ子との關係を知らない以上、彼が出向いて來るはずはないのだつた。出向いて來るとすれば何のつもりで――
「どういたしませう――ちよいとでも、是非お逢ひしたいと仰有いますが――」
篤夫の若々しい胸は、いつも好奇に燃えつゞけてゐるのだつた。どの道、何か奇怪な場面が開かれるに違ひない。ピストル？　短劍？　涙？　怨言？　何でもよろしい――
「とにかく、お通しして下さい。」
邪惡な微笑が、篤夫の美くしい脣を斜に歪ませた。彼は寢卷のセルの單衣の上に、薩摩がすりの羽織だけをひつかけて、上つて來る珍客を待つた。
ドアが、コツ〳〵と鳴つた。
「おはいり下さい。」
――篤夫はドアが靜かに引開けられた時、黑い兩前背廣を着た、不思議な面相の、痩せがれた、ヒ

ヨロ長い三十男を見出した。髪はモジヤ〳〵に額に蔽ひかゝり、目は高い額の下にペコリと凹んで、そのまはりには死人のそれのやうな薄黑い環がはいつてゐた。瞳は洞のやうに暗く、脣は紫いろに引ねぢれて、尖つた頤の疎らな鬚は氣まゝにちぢれてゐる――が、その風貌の醜くい歪みは、決して先天的のものではなく、何か激しい打擊を體にか心にか受けたために起つた急性な變化に相違なかつた。
「突然遲くお邪魔をいたします。」
と、その男は掠れた聲でいつた。そしてトボ〳〵とあゆみ近づくと、小脇にかゝへた四角な紙包みをテーブルの隅に置いて、
「僕は近藤と申します。たしか、お心當たりがあると存じますが――」
篤夫はそれには答へなかつた。
「どんな御用向ですか？　まあお掛下さい。」
近藤は光のまるで無い目で、ぼんやりと篤夫をみつめたまゝ、椅子についた。
「世の中は妙なものですな――」
と、昨日、はつ子の家で耳にした、あの響きの鈍いこゑで、近藤ははじめた。
「僕が自分の一身上の大きな祕密を、突然あなたのところへ持ち込んで來るといふやうなことを、これまであなたも思ひがけなかつたらうし、僕だつて思つても見はしなかつた。ところが、僕とあなた

といふものゝ間に、運命が太い綱で連絡をつけた。二人は逢はずにゐることは出來なくなつた。あなたは不思議さうに僕をごらんだが、無理はありません。」

痩せがれた、蒼黒い指でテーブルの端を摑むやうにして、珍奇な來客はつゞけた。

「僕はしかし、昨夜、突然あなたと機緣を生じたのです。あなたはあの時何も御承知にならなかつた——お氣づきにならなかつた——しかし、僕の方ではあなたの顏も、姿も、ちやんと見てゐるのです。聲もすつかり聞いてゐるのです——僕はネ、昨夕はつ子さんを訪ねて、芝居へ出がけだからと追ひ出されたのですが、まだ話し殘したことがあるやうな氣がしたので、途中から引返したのです。すると、あの人の外には誰もゐないはずのあの家から、あの人とあなたとがどこかへ出かけるのを見た。で、誘はれるやうにあとを跟けたのです——僕は殆ど無意識でした。あなた方の後を僕が跟けたとしても、あなたは僕とあの女との間柄をちやんと御承知なのだから怪しみはなさるまい——いえ、あなたが、僕について十分な智識があることは、神樂坂のレストオランのあなた方の會話をお聞きして知つてゐます——さういふ僕ですから、はつ子さんが、僕にあゝいふ態度を見せたあとで、若い紳士とどこかへ出かけるのを見のがすわけには行きませんからね——で、何もかも知つてしまつたのです——あなた方は、いつぞや森ケ崎の僕のホテルの隣の遊園から、僕が書ものをしてゐる姿を見ながらキツスをなすつたさうですな。さういふ興味は道德的に不純ではあるが、僕にもうなづけないことはない。良心を怖れなければ、この世に何一つ怖れるものはありませんからね。あなた方の性格が、良心なぞといふものを輕蔑することが出來るとすればそれでよろしい。人間同士裁く力がない以上、たれにもそれを批難することは出來ない——さて、それからあなた方は、レストオランで、僕に對するあなた方の奇警な觀察を話題に時をすごした後、タキシーを駈つてこのホテルに來ました。はつ子はホテルに一時間半とゞまつてゐたあとで、あなたに送られてこゝを出ましたが、あの自動車で彼女の家に歸つたのでしたらう——で、僕も、はつきりと了解することが出來たのです。」

一瞬も篤夫から目を放さず、掠れた調子で、ボキ〳〵とこんな風に近藤は語つた。

篤夫は自分にも理由がわからない退屈を感じて來た。當の戀敵からこんな不氣味な言葉を聞かされてゐながら、恐らく相手の表情にも語調にも、感動といふものがまるで感じられぬためもあつたらう、腹立たしいまでに倦怠をおぼえるのだつた。

しかし、彼は何とも防げなかつた。無言で紙卷をふかしつゞけてゐた。

「さて、僕はこゝで目を開けべきだと思つたのです。なるほど、女性の欲望といふものが、一切の皮相なものにひどく惹かされるものとすれば、僕はあなたにあのひとを引渡すべきですからな。」

と、闖入者は相變らず抑揚のない語調で倦まずに語るのだつた。

「あなたは若いし、美くしいし、それに深いことは知りませんが、大さう悧發げでゐらつしやる。女

性は恐らくあなたのやうな方を好むものだと見えます。はつ子さんのやうに、僕とはかなり長い間の關係で、隨分昔から人間に取つて尊いものは、表面的、外形的、物質的以外にも存在するといふことを僕からつぎこまれてゐるはずのひとでさへ、あなたをそんなに一目で好いたとすれば、大ていの女性はあなたを好くでせう。それはひとつの幸福であります——少くとも女性といふものを中心として考へればネ。で、事實、ある場合には女性といふものが、われ〳〵に取つて限りなく價値あるものになつて來る——現在の僕がその境地にあるのですが——實は僕ははつ子さんを失つた現在に至るまで、女性といふものが、こんなにわれ〳〵に力を持つものとは思はなかつた。ことさら學問藝術に專心するわれ〳〵は、女性なぞといふ世界以外に生活の欲望をつなぐべきであると信じてゐたのですが、すべて理義といふものが、いつも最後に感情に負かされてしまふのは今にはじまつたわけではないけれども、僕はあの人を失つて、生きてゐる中心が同時に失はれたやうに感じはじめたのです。それで、ことによれば、死んでしまはなければならないかとも思つてゐるものゝまだそこまでは考へてゐないのです——だか——」

と、いひかけて、彼は考へ込むやうに頭を振つて、片手で額を叩いた。

「だが、何のつもりで僕はあなたの部屋へ來たのだつたらう？　さうだ——僕は默つてゐることが出來なくなつたのです。はつ子さんがどんなに僕に取つて大事な存在だつたかといふことを誰にも語らずにすまして置くといふわけに行かなくなつたのです。それでそれを話すに最もふさはしい人とあなたを認めたので、わざ〳〵お邪魔した次第でした。お眠いですか？」

「ええ——ですが、何でもお話下さい。承ります。」

篤夫はよそ事のやうにいつて、また退屈を感じた。

「いや、しかし、こちらへ伺ふまでは、何だか申し上げたいことが胸一ぱいにつまつてゐるやうでしたが、かうしてお目にかゝつて見ると、何をお話しすればよいのか迷ふのです——が、あのはつ子といふ人は、たしかに僕の心を心底から捉へたたつた一人の女性だつたのです。僕は實にあの人の髪の毛のひとすぢひとすぢまで愛したですからなあ。僕はあの人の、あの蒼みを帶びた目が好きでした。痩せぎすだが、腕の肉はふはりと柔らかで、音樂的な聲を持つてゐる。理解力が豐富で、感情は熱烈でした——僕はあの人の裏にある病氣を感じた——何かかう不純な夢が絶えず動いてゐるのを感じた。それはあの人の藝術のために、またわれ〳〵の愛の生活のために穢れと濁りとをあたへると考へたので、どうにかして陶冶しようと考へたのでしたが——しかし、それは僕の空想でした。あの人はたうとう僕の腕の中にゐる時、あなたといふ人のことを考へるやうになつてしまつた。あなたはあの人の藝術や魂には恐らく輝きをあたへる方ではない。あなたはしかし、あの人の平凡な女性としての欲望をば十分に滿足させなさるでせう——」

まじ〳〵と、篤夫をみつめてさういつたが、近藤はふと思ひ出したやうに、テーブルの上に置いた四角な紙包みを引寄せた。

「ところで、こゝに荷厄介なものがあるのです。これはネ――」

と、いひながら、ガサ〳〵と不器用な音を立てゝ、紙包みを開いて、大凡千五百枚もあらうと思はれる一束の原稿を取り出した。そしてそれを篤夫の方へ突き出して、

「これは僕が洋行前に書き上げて、あの人への置みやげに――當分の別れの記念に献本するはずになつてゐた審美學上の著作なのです。僕は、美學上でたしかに一家の見をこの著述で述べ得たと信じてゐました。ある新らしい意義を美學的に創出したと信じてゐました。ところがね、君。」

と、はじめて近藤は、「君」といふ親みの言葉を使つて、

「ところがね、君、不思議なものですよ。最後に綜合を施して偉大な結論を書かうとする時になつて、あの人が僕の心を不安や疑惑で攪きみだしはじめると、どうでせう――君は信じますか？　數年間を費して編み出した僕の美學の體系が――僕の美學に對する僕自身の信念がグラつき出したのです。まるで無意味な、妄想的なものに思はれて來たのです。であるとすれば、僕はこの長の年月を、何を生きて來たのでせう？　僕の生活はこの研學一途にあたつたのに――」

近藤は、激しさをまじへぬ調子で、呟くやうにいつて考へ込んでしまつた。

「ねえ君、僕は長の年月を、何を生きて來たのでせう？」

涙も、笑ひもなく彼は繰返した。

篤夫は肩をすくめた。そして靜かな微笑で、なだめるやうに口をはさんだ。

「あなたは夢を見てゐられたのですよ。だれでも夢を見て生きる時もあるものです。」

近藤は素直にうなづいた。

「ああ、さうですか？　君は僕の生活を夢だつたといふのですね？　成る程。」

と、また考へて、

「いや、大きにさうかも知れない。では、僕は夢を見てゐたのだ。」

さう呟くと、近藤は蒼黑い、細長い指で原稿を摑んだが、だしぬけに、しかし悠長に十枚程づつめくつては、ペリ〳〵と引裂きはじめた。

篤夫は驚かなかつた。驚かなかつたから制止もしなかつた。默つて紙卷をふかしつづけながらみつめてゐた。

――發狂したとしても、これなら申分ないぢやあないか？　靜かで、上品で、はなはだ結構な狂人だ。

そんな風に心の中でいつて見て、みつめつづけてゐた。

「では、夢だつたのですなあ――たしかに夢だつたのですなあ――」
大部な原稿だつた。それを十分に裂きをはるまでにはかなりの時間を要するであらう。
篤夫は眠氣を催して、小さなあくびをした。
「いかゞでせう。破り捨るのも燒き捨るのも同じでせうが、こゝでそんなことをなさらずに、お宅へお持ち歸りになつて始末をなすつたら。」
と、彼は冷たくいつた。
「成程。」
と、近藤は驚くばかり從順だつた。彼は裂きかけをまとめて不恰好な紙包にまとめ上げた。
「大分遲いやうですが――」
「いや、失禮しました。ではおいとましませう。」
極端な心力の浪費のあとで、極端な感情の打擊をうけて、精神の平衡を失つた不幸な學者は、みじめな靴音を立てゝ階段を下りて行つた。
――あんな奴等を見てゐると、こつちまで變な氣持になつて來る。
篤夫は簡單にさう獨言ちて、ベッドへ行つた。そして氣晴らしに小說本でも讀まうと、スタンドが枕邊に近づけた。

たはむれ

篤夫は、翌朝ベッドで目をさますとふツと昨夜の奇妙な訪問客のことを思ひ出して、クツ〳〵と獨り笑ひ出した。
――世の中はどうしてこんな氣違ひばかりに充たされてゐるんだらう？　あの大部な、恐らくあの男としては心血を注いだに相違ない原稿をペリ〳〵とやぶき出した時には、さすがにびつくりしたよ。戀愛と仕事とをあんなにゴツチヤに考へて、戀愛を失ふと同時に仕事に自信を失ふなんていふ馬鹿げた氣性で、美學上の著述もすさまじい。あんな奴が、えてして、失戀自殺なんぞをやり兼ねないんだ――はつ子さんも、思へば妙な先生と戀仲になつてゐたものだ。僕がいくら青二才の貧乏人だつて、あいつに比べればニグロと小王國の王子位のちがひはあるだらう。あの女が夢中になつてゐるのも無理はないよ。あの先生と、春彌先生とを比べて、さてどつちが賢いかとなるとこれも考へものだな。多分、陽氣が惡いんだらうよ――どつちを見ても氣違ひばかりだ――

曉方に雨がすつかり霽れて、洗ひ出したやうな秋ばれの朝の空は、彼の心を明るく輕くするばかりだつた。他人の愚しさと不幸とを考へると、若い、無遠慮な彼の胸は一ぱい幸福感に充たされた。

――まあ、あの連中が、死なうと生きようと、僕の知つたことではないんだ。いつそ、あんな連中は出來るだけ早くこの世から亡びてしまつた方がお互の幸福かも知れん。人生は癲狂院とは違ふんだから、馬鹿ものゝ跋扈は一種の恐怖だからなあ。

篤夫は優越を感じて得意だつた。彼は何の氣恥かしさも反省もなく、目上の人達や女性たちに取り入つて一度も不成功を見なかつた彼自身の手腕を祝福するのだつた。

たとへば雜誌社の仕事にしても、すべてが思ひがけなく順調に進んで行つた。つい、こなひだのことだが、ぜひ彼が關係してゐる雜誌として會見記事を載せねばならぬ外國の政治家が來朝した時、名代の氣六かしやな上に煩雜な任務を帶びてゐるので、社から先輩の名うての訪問記者が、三度も足を運んでしりぞけられてゐたところを、彼がふと出向いて見ると、その時相手が多少ひまだつたのか、それとも政府からつけられてゐる接伴員が、同じ雜誌社の名刺があまり何度も拒絶されるのを氣の毒に思つてあはせてくれたのかたつた一回の訪問で、大政治家の面貌に接した上、殆ど三十分にわたる長廣舌を筆記にすることが出來たのだつた。かうした偶然の成功までが、彼に箸をつけて行つた。

「あの七面倒くさいドクトル・ホプチンスキイをよく捉へたね。君の記事はあの男との會見ニュースとして、あらゆる新聞雜誌を拔いてゐるよ。萬歲だ。」

虛心坦懷な先輩記者は、彼の文章のゲラ刷に目を通したあとで、彼の肩を輕く叩いてさう讃めてくれたのである。

このホプチンスキイの談話は、ソヴイエト政府の東方經濟政策に多少觸れてゐるので、雜誌が市場に出れば、ある刺戟を二三の方面に與へることは確實だつた。それも、何も篤夫に經濟的な智識や考察があつて釣り出した談話ではなく、相手の言葉が通譯されるのを克明に聞いて、その語脈からある直覺を得て、やゝ突込んだ記述を試みたにすぎないのだつたが、社のその道の顧問の位置にある河島博士などにいはせると、ホ氏は年若い一記者の前で、幾分機密に觸れたことを喋べつたのを後悔するであらうといふことであつた。――つまり、彼の記事はそれ程の意味を持つことが出來たのであつた。

――そんなわけで、彼は毎日の會社づとめにも何等の倦怠をも感じなかつた。一日一日何か新らしい喜びを待ちかまへてゐる氣がされた。今日も、彼は輕快な氣持で出社して、明るく働き終つた。歸り支度をしてゐると、多野といふ中年記者が側へ來た。

「どうです？　いい夕方ぢやあないか。君　大分飲けるといふ話だが、一緒に夕飯でも食べないかね？」

多野がどういふわけで、ことさら彼にいつも好意を見せるか、篤夫にはよく解つてゐた。新興社で

は編輯主事が缺員になつてゐたので、早晩だれかゞその椅子に來るべきであつたが、山名といふ若い腕利が、學歴と手腕では多野を凌駕してゐた。しかし、多野のデリケートな觀察では、若い社員の大ぜいは、自分とさまで年の違はぬ山名に支配されることは好まぬに相違ない――で、衆望は彼の方へ向いてゐるのであるが、とはいへ、社長の眼鏡と氣持ちひとつでどんなことになるかわからない――そして、この問題は、早晩社長のお側はなれずの篤夫に對して、こんな風に諮問されるにきまつてゐた――

「細田君、君はどう思ふネ？　少くとも社内の形勢から、多野と山名では、どつちが人望があるだらうね？」

さういふ風な社長の問ひに對する、篤夫の返事はかなり意味があるものとならねばならぬ。で、多野は、篤夫がふぢ子と劇場火災に際してロマンチツクな交渉を持ち從つて社長の一家内にある關係が出來たのを知ると、目に見えて彼に接近して來たのであつた。

「ねえ、いゝ夕方ぢやあないか――イムペリアルへカクテルでも飲みに行きませんか？」

篤夫は愛想よく斷わつた。

「ぜひお供したいのですが今晩は社長の屋敷へ行く用がありますから――」

「ああ、さう。それは殘念だが――しかし社長の用があるのでは仕方がない。」

二人は肩をならべて階段を下りて、間近かな停留場の方へ、落葉しかけたプラタヌの並木の下を歩いた。

「社長夫人はこのごろお達者かね？　あの方はこれまで始終お弱いやうだつたが――」

「ええ。只今でも神經痛や頭痛になやんでゐらつしやるやうです。」

「多野がよろしく申し上げたといつてくれ給へ――久しく御無沙汰してゐるが――雜誌社が創まる前から、僕は古川家へは出入りをしてゐたのさ。社長は同鄕の先輩だからね――ねえ、君、夫人によろしくといつてくれ給へよ。いづれ伺ひますからと。」

「畏まりました。」

篤夫は後輩の自分の前で、へり下つて夫人への傳言をたのむ多野を輕蔑した。

――何といふヘタ糞な世渡りだらう？　僕のやうな青二才の前で、はらわたのへどろを出して見せるなんテ。僕はだから君たちを尊敬しようと思つても出來なくなるのだ。ケチな雜誌社の椅子なんかが、そんなに有難いかなア。

しかし、彼はそれを顏へは出さずに、丁寧に繰返した。

「畏まりました。申し上げませう。」

「時に君、山名君たちは社長の屋敷へ時々顏を出すかね？」

と、伏目にジロリと眺めて多野はいつた。
二人は停留場に來てゐた。
「いゝえ、お見えにならんやうです。」
「さうかね？　僕は始終伺はうと思ふのだが、社長もいそがしい方だし、お宅の方々もお客でいそがしいことだらうと思ふので御遠慮してゐるのさ。」
篤夫の乘る電車が先づ來た。
「失禮します。」
「おお、失禮。ではおくさんによろしく。」
——馬鹿メ。
と、篤夫は走り去りながら心に呟いた。
——いかに「新興」がつまらない三文雜誌にしろ、君見たいな卑屈な奴を主事にして出版界で闘へるかい！　君が坐れる椅子なら、第一僕が遠慮しやしないよ。
——古川家へ着くと、この頃大分無沙汰になつてゐたので、ふぢ子はプリ〳〵してゐた。彼女は二人になつてもすぐには口を利かなかつた。
「どうしたんです？　どこか氣持でも悪いのですか？」

と、篤夫はわざと心配さうに尋ねた。
ふぢ子は、あけひらいた玻璃窓から高く遠く溢れてゐる薔薇いろの夕ぐもを眺めながら、緋いろの肱椅子に坐つたまま、まだ答へなかつた。
「ねえ、どうしたんです？　僕は心配だ。」
と、篤夫は彼女のうしろに佇ずんで、肱椅子の背を輕く指先で叩きながらいつた。
それでもふぢ子はもとのままだつた。荒い大島の袷の襟奥に、深く〳〵眞赤な肌着の襟が覗かれたが、それが眞黑な髪の毛の下に眞白なくび筋と微妙な魅惑を形づくつてゐた。
篤夫はその紅い肌衣の襟をのぞき込むやうにして繰返した。
「どうしたんです？　僕を心配させて何が面白いのです。それとも、僕が來たのがお邪魔でしたらすぐにもお暇しますよ。」
ふぢ子は怨みつぽく振返つた。
「何も、そんなにおどかさなくつたつていゝわ。でも、私が腹を立てたつてちつとも無理はないと思ふわ。」
「どうしてゞせう？」
「どうしてつて！」

と、ふぢ子はいつの間にかぐるりと肱椅子を向けかへて、篤夫を覗き上げながら、

「あなたは大事な先輩が危篤だからつて、私達があんなに樂みにしてゐた郊外遠乘をも打壞はしてしまつたでせう。そして木村先生のお葬式が濟んで、もう幾日にもなるのに、その後一ぺんだつて顏出しもしてくれないぢやあないこと？　あなたには、それはいろ〳〵な世界があるわ。ちつともおさみしかないでせうけど、私はその間、毎日〳〵かうしてこの肱椅子に腰をかけてあなたを待つてゐたんですもの――」

ともすれば、美くしい、黑瞳がちな目が、濕みさうになるのであつた。

「私、寂しかつたわ。」

篤夫は思はず微笑した。

「あなた方にも寂しいといふことがありますかねえ？」

「何ですつて！」

と、娘は美くしい目尻を上げるやうにした。

「私に寂しさを感じる力もないとおつしやるの？」

子供あつかひにされて、この娘はおこつたのだ――と、さう思つて、篤夫はいそいで微笑を消した。

「いゝえ、そんな積りではないのですよ。たゞ、君は寂寞を感じるにはあまりに幸福だといつたまで

です。」

と、いつて、

「しかし、僕の方は、木村家の後始末も手傳はなければならないし、社の方もいそがしかつたものだから――」

ふぢ子は、意味ありげに見上げた。

「木村先生のおくさま、お美しくつてゐらつしやるわねえ――新聞の寫眞で拜見したけど――」

篤夫は素直らしく答へた。

「えゝ、大變美くしい方です。」

「男の方はいろ〳〵好みがあるのでしよ？　同じ美しさでも、いろ〳〵にネ？　あなた、あゝいふ美くしさがお好きらしいわね？」

ふぢ子は熱心に聞いた。その熱心さが妙に彼女を子供らしく見せるのだつた。

篤夫は考へる眞似をして、

「さあ？　さういふ問題は、ちよいと卽答に困りますね。一たい、男が美くしい女性が目にふれたところで、一々自分の好みに當はめて見る餘裕がありますか知ら？　他人の奧さんなんかまるで無關係な世界だもの。」

「でも、あの方はもうおくさまではないわ――未亡人でゐらつしやるわ。」
篤夫が今度は答へなかつた。
「ねえ、どうだか聽かして頂戴な。あゝいふ性質の美くしさを、あなたお氣に召す？」
篤夫は答へなかつた。彼は遠くの夕ばえを默つて眺めた。
「どうして默つてゐらつしやるの？」
「ふぢ子さん。」
と、彼は眉を寄せるやうにして見せて言つた。
「君の言葉は僕に不愉快を感じさせますよ。」
ふぢ子は眺め返した。
「僕はそんな風に訊かれるのは好きません。」
ふぢ子は篤夫の手にソツと觸れた。
「おこつたの？　だつて、私、心配なんですもの。」
篤夫は微笑した。
「馬鹿な子だね。」
と、額に脣を當てようとしたが、急に顏を退いて、

「さう〳〵――僕はぜひ話さなければならないことがあるのだつた。」
と、さう呟くと、彼は椅子をふぢ子の側に引き寄せて腰を下した。
――彼はたはむれに、春彌を舌で弄ばうと思ひついたのだつた。

篤夫は椅子に坐ると、かくしを探つて、匂ひの強い紙巻を取り出して煙を吐いた。そして、意味ありさうにふぢ子を眺めて、脣に薄笑ひをうかべてゐた。

「お話つて、どんな？」

と、相手は青年の膝に白い指を觸れた。

「ときに、春彌さんのお妹さんといふのは美人？」

と、突然、篤夫がたづねた。

「春彌さんの妹さん？　雪子さんね？　あの方ならそんなに美人ぢやないわ。」

と、ふぢ子は答へて、いぶかしさうに、

「でも、どうしてそんなことをお聞きになるの？」

「いゝえ、何でもないけど――實はネ。」

と、篤夫はぢつとふぢ子をみつめて、

「實はネ、僕、ある人から君との間の調停者に――いゝえ、といふよりもお仲人にたのまれて來たのですよ。」

「何ですつて！」

と、ふぢ子は叫んだ。

「お仲人にですつて！　まあ！　何を詰らないことをいひ出したの。」

篤夫はいかつげに、

「ちつとも詰らないことではありません。重大な、眞面目な問題なのです。ある人が、君から拒まれれば、自殺するとまでいつてゐるのですよ。殆ど正氣を失つて君に焦がれてゐるのです。」

「まあ。そんな冗談をおつしやつて――ほ、ほ、いくら私が馬鹿だつて、そんなことを本氣にするものですか。」

「ところが事實なのです。一たい、大の男が、自分に戀して、生死を賭けてゐるといふのに、君のやうにそんなに笑つてしまふのは慘酷だ。」

「だつて、そんなことある筈がないわ。」

「でも、あるのです。その相手を誰だと思ひますね？　大てい解るでせう？」

ふぢ子は考へ込むやうに可愛らしく小首を傾げて、
「解らないわ。だつて、そんなこと、ある筈がないのだもの。」
篤夫は微笑みもせずに、
「なる程、君が今までそれほど無頓着だとすればあの人は可哀さうです――その事で、四五日前、春彌さんがわざ〳〵僕の宿まで訪ねて來たのですよ。」
「まあ！」
呆れたといふやうに、ふぢ子は目をみはつた。
「ぢやあ、私に死ぬ程こがれてゐるのが、春彌さんだとおつしやるの？　まあをかしい。ほ、ほ、ほ。」
ふぢ子は、急にさもをかしげに笑ひ出した。その笑ひはいつまでも止らなかつた。彼女は、目から涙さへ出しさうに笑ひくづれた。
しかし、篤夫はわざとらしく六かしげな顏をしつづけてゐた。
「そんなに笑つてはいけませんよ。一たい君は慘酷すぎる。君のやうな美くしい人を誰が戀したとてちつとも不思議はないのです。」
「だつて――ほ、ほ、ほ――春彌さんが――あの春彌さんですもの――あの方、私の從兄ぢやないこと？」

「從兄だつて戀する權利はありますよ。あの人はネ、わざ〳〵僕の宿へ見えて、君があの人をあんまりヨソ〳〵しくするから、僕からあの人の衷情をよく君に話して貰ひたいといはれたのです――僕と君があまりに親すぎる點も、あの人は快よく思はれないと告白されました。で、僕に君との間を今少し遠慮深くして貰ひたいといふやうな要求もありましたよ。」
ふぢ子はおこりつぽく、
「まあ、ほんたうにそんなことをいひまして？　いつたとしたら生意氣至極だわ。私たちの間に、あの人が何を差し出る權利があるでせう？。」
「君はさういつて下さる。」
と、篤夫は吐息をした。
「しかし、平靜になつて考へると、あの人がそんなことを僕に要求するのも無理もない點がありますからね――もちろん、僕だつて最初は腹立たしい氣がしました。だが、よく思案するとあの人が君に戀してゐないとしても、從兄といふ位置から、僕に君から遠ざかれと要求したとしても無理ではありません。」
「なぜでせう？　どうしてでせう？」

と、ふぢ子はみつめた。

篤夫は力なげに、

「考へてごらんなさい。もし、僕が外部から君と僕との交はりを眺めたとしたら、あまりに近すぎる氣がするかも知れません。それはこちらの御兩親は、僕を多少愛してゐて下さるから大目にも見て下さるでせう。しかし、そのほかの人の目から見たら、隨分親密すぎるやうに見えるでせう。そして君とあまりに親密すぎる青年が、僕でないとしたら頗る自然です。たとへば、爵位のある青年とか、富豪の息子とか――さういふたぐひの紳士なら――ところが、僕では不自然です。僕は君と――いはば君、僕でおつき合ひする資格さへない人間なのだから、春彌さんたちが不安に思ふのも無理はありますまい。そこで今日はお願ひがあるのですが――」

と、篤夫はしんみりと、

「第一、春彌さんの解釋によると、僕がこのお家へ出はいりするやうになつてから、君があの人を袖にしはじめた――ヨソ〳〵しくしはじめたといふのですが、さうなると、僕は全く申しわけない氣がするのです。君たちは僕なぞに比べものにならない高い生れの方だ。で、君たち同志で親くされることには何等の不條理もない――たとへば君と春彌さんとが結婚なさるとしても世間で目をみはるものはないのです。だから、あの人からさういはれて見ると、僕が身をひいて、お二人の交情が元にかへ

るのを祈るのが僕の義務であるやうな氣がされて來たのです――第一、僕としても恥ねばならんのです。君は社長の令嬢だ――君の力で社長に取入るやうに思はれるのも男としては心外ですし――」

ぢつと〳〵、篤夫を見上げてゐたふぢ子は、急にうつむいたと思ふと、振の長い兩の袂で顏をおさへて、テーブルにうつふしてしまつた。

娘らしく肉づいてゐる肩がせぐくり泣きと一緒に震へわな〻いた。

「どうしたのです？　お泣きになる要はない――僕は眞面目にお願ひするのですが、今後僕が、お宅へ御無沙汰するやうになつても、僕としては忍びがたい事情があるからだと許して頂きたいのです。」

篤夫は冷たげな口調でいふのだつた。

ふぢ子は泣きつゞけた。

篤夫は若々しい肩を釣るやうにして微笑した。ふぢ子の涙は、彼に取つてどんな酒よりも甘かつた。

ふぢ子は溫しい手が肩に觸れて慰めてくれるのを待つてゐたに相違なかつた。しかし、それは無駄なのぞみだつた。

「あんまりだわ――あんまりだわ。」

かすかな呟きが、咽び泣きのひまから聞えはじめた。

「あんまりだわ――あんたは、今更そんなことがどうしていへるんでせう！」

「今更といつて――」
と、篤夫は靜かにいつた。二人は接吻を交しはしたけれども――
「私。もう、あなたのためなら、どうなつてもいゝと思つてゐるのに――」
ふぢ子の哭きごゑは、だん〳〵高くなつた。波のやうに高低しながら高くなつた。
篤夫は、あまりに哭かせすぎて、母親の耳にはいるのを恐れた。
やつとのことで、彼は手を伸べてわなゝく肩にさはつた。
「泣かないでもわかりますよ。ね、泣かないでも――」
ひとしきり、ふぢ子は咽び入つたが、しかし男の輕い指先のひと觸れで、荒らいだ胸は靜められた。
だん〳〵、すゝりなきは淺くなつて行つた。
「私、もう、心もからだも、いつでもあなたに投げ出してゐるのに――」
と、彼女は繰返した。
その聲にはほんたうに〳〵、肉も魂も、今にも委ねてしまひたいといふ熱望が含められてゐた。どんな男性でもこの言葉を聞いたなら、相許す喜悅に全身の戰慄を禁じ得ないと思はれる程熱烈なさゝやきだつた。
篤夫はその言葉を、樂げな笑で受けた。

「君の氣持は、勿論僕だつて知つてゐますよ――ね、泣かずに、僕に顏を見せて下さい。」
と、やさしくいつて、
「たゞ、僕は感情に負けたくないと思つて、無理に理性的なことをいつて見たのです――無理にネ。しかし。君がそれ程までにいつてくれるのを、どうしてそれでもといへるでせう――」
ふぢ子は、やつとのことで兩の袂を顏から放した。
まぶたは擦り紅められ、頰は濕れてゐた。まぶしげに彼女は彼を見た。
「でも、あんまりひどいおつしやりやうだわ。」
「僕は、たゞ君の幸福を考へたのですよ。」
と、彼はいつた。
「私の幸福は、あなたと一緒にゐる時のほかにはないわ。」
ふぢ子は篤夫の膝にうつ伏した。
「泣かせたのはどの道僕が惡かつた。」
「いゝえ――泣いたりして濟まなかつたわ。でも、私、ほんたうにいつでもすつかりすつかりあなたに捧げたいと思つてゐるのよ。私――」
篤夫は突然、自制しがたい、ある狂暴な欲望にからまれた。

彼は囁やいた――

「明日夕方出られる？」

「ええ。」

と、ふぢ子は膝の上に顔を押つけたまゝうなづいた。

「お宅へ内しよで？」

「えゝ。何とかするわ。」

「ぢやあ、東京驛まで來て下さい、午後五時きつかり。」

ふぢ子はうなづいた。

握り合した娘の手はべつとりと汗ばんでゐた。

戀と愛

――ふぢ子と出逢ひを約束した日は、もうぢききびしい冬が襲つて來ようとする今日この頃、これが今年の最後の良日だらうと思はれるやうな、美くしくのびやかな陽氣だつた。兎に角いそがしい一日を雜誌社ですごした篤夫は、恰度新調の冬服が服屋から屆くはずになつてゐたので、初々しい戀人の一人とのはつの媾曳きを飾るために着更へをしようと、ひとまづホテルへ歸つた。

すると、机の上に一通の厚ぼつたい手紙が置いてあるのが目にはいつたが、たつた今屆いたばかりらしいその封書は、一目見ただけではつ子からのたよりであることは上書きの手蹟でわかつた。

彼はテーブルに、好みの盃を見出したものゝやうな目付をした。樂しげな、舌なめずりをするものやうな微笑が、紅い脣を少し歪めさせた。

――二日三日逢はないと、すぐにこんな厚い手紙だ。女といふものはなぜ戀なんぞのためにこんなに一ぱいに心を充たすことが出來るのだらう！　しかも、たつた一つの戀のために――

篤夫は粗葉刻をパイプに詰ながら獨言ちた。そして、そのパイプを吸ひつけると、強い、刺すやうな匂ひの煙を吐き出しながら封を切つた。

しかし、その厚い封書は、はつ子からのたよりばかりではなかつた——

彼女は書いてゐた。今朝、あまりに面白い手紙をある人から受け取つたから封入する。多分その文意はあなたを滿足させると思ふ。滿足なすつたら、今夕、森ケ崎の例の家に來て貰ひたい。褒美の接吻はどんなに甘からう——

——今夕だつて！

と、彼は呟いた。

——僕は先約があるんだ。あのあどけないお孃さんと。だが、それもシナによつては——

篤夫は同封されたこまかいペン文字の書簡をひろげた。

かう書き出してある——

かつて戀人と呼びたりしはつ子よ。

——は、は、近藤の手紙だな。面白い。

篤夫は讀んだ。

× × × × ×

かつて戀人と呼びたりしはつ子よ。

昨日まであんなに近かつた君の心は今や私からどんなに遠いのであるか！

あゝ、私たちの愛が毀たれ傷られてしまつた今、荒たち騷ぐ胸を押へて靜かに考へて見ると、現在それがどのやうに荒凉たる廢墟となりをはりしにもせよ、過去においてはどんなに清く氣高く、高いよろこびにのみ充たされてゐたことだらう。私が君の心に全く死んでしまつたのに、このやうなことを並べ立てたとて、それは墓場の草のそよぎ程の刺激をも君にはあたへまい。とはいへ、今一度、手短に過去をたどることを許せ。二人の愛がきずついてしまつた後で思ひ出して見ると、私は今更のやうに私の愛があまりに戀と呼ぶには清らかすぎたのを感じる。私は三年前の秋、はじめて君と君の作品とをR畫廊で見て、そして君の才分があまりに豐すぎ、迷ひがあまりに多すぎるのを知つた。私は君を敎へようとした——智慧によつて君の才能が正しい發展を見るのを望んだのである。だがいつの間にか、單に君をよき美術家であらしめようとした私の望みは——熱望は、別の形を取つて來た。

私は戀しはじめた。

今考へると、私はもつと荒々しく、もつと智慧を殺して君を戀すべきであつたかも知れぬ。しかし私は粗暴と無知とが、君と私との人間としての氣高さをこぼつのを恐れた。で、私は出來るだけ靜かに愛した——ほんたうに、戀人たりしはつ子よ。私は君に「戀」といふ言葉さへあまり使はないやう

にしてゐたのを記憶されるだらう。なぜなら、日本語では、「戀」といふ言葉は卑近で、肉體的な感じを多分に感じさせる。「愛」といふ言葉は、より精神的な高いものを思はしめる。それゆゑ、私は君を戀するとはなるべくいはずに、君を愛するとのみ、語り且書いた。

しかし、恐らくこのやうな愛の氣持は、官能の刹那の喜びに溺れ易い女性が理解するにはかなり困難であつたらしい。靜かな、正しい愛は永續性を持つが――それは永久を思はせるが、肉體的な感覺的なものはすべて短命であるといふことを思ひ知るには、彼女等はあまりに智慧から遠い。で、なるべく無謀な、いはゆるなるべくロマンチックな欲望に陷るのを好む。君も、やはり女性の一人だつた。

君も普通の官能萬能主義の女性にすぎぬのではあるまいかといふ疑ひと不安とは、すでにとうから私の胸に萠してゐた。しかし、私は君を私にふさはしいものに教養することが出來ると信じた。だが、今はすべて夢だ。

君は今や、あの敏捷な、美貌と才能とにのみ生きる青年を「戀」してゐる。私はその點についても う確信を持つ。そして女性は同時に二人を愛することが出來ないとしたら、私はもう君から無關係な世界に追はれたのだ。さうハツキリ知りながら、ああ、過去の戀人よ。私は君を蔑すむことも笑ふことも出來ない。あの美と才能との權化のやうな青年を戀する君を嘲ることが出來ない。そして、悲しい哉、私は君が遠ざかり去ると一緒に、私自身の衷にあつた、あらゆる情熱も信仰も野心もすべてど

こへか消え亡びてしまふのを感じる。

思ふに、君への愛が私にとつては全部であつたのであらう。私の學問も研究もすべて君への愛の變形にすぎなかつたのであらう。私の生活全部さへもが――それゆゑ、私は私の考へ方に對して、大きな疑惑に落ちた。なぜ私は君への愛し方について自分に註文なぞをつけたか？　それ程愛してゐた君をひたすら滿足させるために肉と夢とを滿足させるために、專心しなかつたか？　そして女性に取つては最も役に立たぬ、精神的なものや智慧に充ちたものだけを授けようとしたか？　私のやり方は全く間違つてゐたのだ。

そして、私は今……

× × × ×

こゝまで讀んで來て、篤夫はパイプを口から落して、聲を出して哄笑した。

「はゝはゝは。どうも驚いたな！　實にオカしな人間も生きてゐるのだな！　女に惚れて置いて、惚方を考へる奴もないものぢやあないか。さうだ。君のいふ通り君はあらゆる意味で『全く間違つてゐたのだ』よ。君のいふところの『精神的なもの』とか『智慧に充ちたもの』とかいふやつは、結局影なんだ、それこそ夢にすぎないんだ。われ〳〵は五官で感じる世界以外に何に持つだらう。そしてその外には快樂を欲する感情があるだけなのだ。智慧といふのは、人間が下らない夢を見るものではな

いといふことを知ることさ。で君のやうな奴を馬鹿者といふのだ。は、は、は――で、これから君はどうするのか？」

彼は二三枚の書簡箋を飛ばして、最後を讀んだ。

× × × × ×

さらば、はつ子よ。かつて私のみはつ子と呼ぶことを許された女性よ。私はしばらく靜かに眠りたい。故山の靜寂は私を抱擁するであらう。では、永久にさらば。

× × × × ×

「は、は、は。君たちは人生に打たれるとすぐに無感覺な山や水が戀しくなる。そして石ころや水のつめたさに觸れて、倍もけがらはしい慾情に燃えるのだ。とにかく、古風な文句で『永久に、さらば』と結んだのは上出來だ。」

篤夫は近藤の手紙をたゞ馬鹿らしいものに感じる外はなかつた。彼は戀が人間を白痴にし、獸にし、時々神にさへもする神祕については少しも考へなかつた。戀とは何だらう？　甘たるい接吻と、抱擁と、明日の活動力を鼓舞する刺戟的な慾情の煽揚と、それだけではないか？　女性とは何だらう？　以上のやうな戀を男にあたへる生きものにすぎない。そして、利口な男だけは官能と感情との世界に包まれてゐる戀の價値を、より廣い物質世界にまで擴張する。戀によつて――つまり女性によつて

富貴と權勢とに近づいた賢い男が、決してこの世にとぼしくはないではないか？

――それが、篤夫の戀愛觀で、同時に女性觀だつた。

――哀れな奴だ！　戀なんぞのために自己まで捨るとは！

彼は、さも思ひやり深げにさうつぶやいたが、しかしすぐに近藤のことなぞは心から追ひ出してしまつた。彼はこまかいペン文字で幾枚かしるしつゞけた哀れな失戀者の書簡を、引裂きもせずそのまま紙屑かごに叩き込みながらつぶやいた。

「で、一たい、僕はどうしたらいいのだ？　はつ子が森ケ崎で待つてゐるといふのだ。それなのにふぢ子との出逢ひを約束してしまつてある。どつちをえらんだらいゝのだ？」

ああ、もし、あの二人が友人で、二人とも僕と一しよにゐて、はばかりもなく二人の戀を僕に味はせてくれたらどんなに暢氣だらう！

彼はこんなことを、別に穢らはしさをも感ぜずに考へた。

だが、結局、何とかきめねばならぬ。よい今宵をすごすためには、どちらかをえらんで他を捨ねばならぬ。

彼はいろ〳〵に考量して見た。

で、さしづめ、どちらが今宵一夜をより樂く、より充實したよろこびで醉はせてくれるだらう？

彼はそも〳〵今夜こそふぢ子を完全に自分のものにしようと計畫してゐたのだつた。彼女のあどけなげな、生々しい瞳の注視と彼のためにはじめて接吻を知つた脣とは、いたづらに彼の目の前にちらついて、いつもイラ〳〵しい思ひをさせるのだつた。それといふのも彼女が兎に角處女であるといふ意識が、一ぱい彼をいら立たせるに違ひなかつたので、さうした意味からもうまだるツこしい境を乘り越してしまはうと決心したのだつた。だが、はつ子からかういはれて見ると、また別な誘惑にひかされないわけには行かなかつた。彼女に對する甘い思ひ出は、いはゞ肉體的に激しいものに思はれた。彼女に對しては、どこまでも無遠慮であつてよかつた。はゞかるところなく求め、はゞかるところなく與へることが出來るのであつた。その上、ふぢ子との逢瀬は、また恐らくあわたゞしいものであらう。ソツと忍び出して來た彼女は、ごく短い時間を二人ですごしたあとでは、とりいそいで歸宅せねばならぬであらう——

彼ははつ子を取ることに決心した。

——ふぢ子はちよいと哭くだらう。しかしあとでどうにも慰さめてやることが出來る。戀の六かしさを知ると、よろこびも一倍になるのだ。

篤夫は居いてゐた新調の冬服を函から取り出した。黑地に赤糸を織込んだ地は、派手で上品だつた。彼は小鏡を覗き込んで滿足した。

タキシーが東京驛についたのは五時二十分であつた。ふぢ子との出逢ひの時刻は正五時といふことになつてゐた。彼は果して彼女が指定した場所にゐるかどうかを見きはめることに興味を感じた。それで乘物から下りると、帽子のつばを引きおろし、外套の襟を高く立てゝ、待合室の方へ人目を忍ぶやうにして近づいた。幸、四人ばかりの大男の一團が歩いてゆくので、そのあとにピツタリついた。婦人待合室のドアのかげに立つて、ソツと中をのぞき込むと、すばやい目はすぐにふぢ子の後姿を捉へた。

彼女は全く美くしくよそほつてゐた。綠地に朱いろを交ぜたコオトがよく似合つて、眞珠をかざつた黑い帽子も美くしかつた。すんなりした、綠のくつたびにつゝまれた脛を見た時、彼はふと、はつ子に逢ふのはやめにして、この娘と外が歩きたい氣がしたが、しかしその欲望を辛うじて押し伏せた。

——この花はまだ蕾がふくらんだばかりだ。はつ子はさうぢやあない——

彼はあゆみ去つた。そして大森までの切符を買ふと、人ごみにまぎれて改札をすまして、すつかり氣樂になつて元氣よくプラツトフオームの人となつた。

——ふぢ子はいつまでも〳〵待つてゐた。婦人待合室の窓際に、背を見せて立つたまゝ、今にも肩を叩いて聲をかけてくれるかと待ちつゞけてゐた。

しかし、待ち兼てゐるやさしい手はいつまで經つても肩に觸れてはくれなかつた。窓玻璃ごしに見える廣場の闇は深みまさり、街燈やビルデイングの窓々の灯の輝やきは强さを增した。スチームの熱はだん〳〵彼女を上氣させた。彼女はコオトを脱いで腕にかけた。人に顏を見られるのを厭つて、ほんの時々振返つて室内を眺め、通路の方をのぞいたが、篤夫らしい影はひとつも認められなかつた。

何度となく、プラチナの八角形の腕時計をながめ、自分のと壁時計とを見比べても見た。

五時半、五時四十分、六時、六時二十分、六時半——

足が棒のやうになつたので、ソフアに腰を下した。ソフアに埋つてしまつて、もし相手の目から遮ぎられてはと用心して、せめて後すがたを見せてと立つてゐたのだが、もう到底立ちつづけることが

出來なくなつた、腰を下して吐息をした。そして哀しくなつた。

——どうなすつたのだらう？　もし何か御用が出來て來られないとしたら時間がちやんと打ち合せてあるのだから電話でもかけて下さりさうなものだのに——

——黑いうはつ張りを來た、意地の惡さうな掃除女が、時々意味ありげな目で蔑すむやうに顏をのぞいて行くのに氣がつくと、彼女はたまらない侮辱を感じた。

——お嬢さん、そんなに男が戀しいかね？　ほ、ほ、ほ。

と、嘲笑しかけてゐるやうな氣がされた。

——しかし、そんなことは厭つてはゐられなかつた。彼女は坐りつづけながら、考へ込む。

——それとも、いざお出かけにならうとする間際に御用が出來てしまつたのかしらん？　まさか突發的な病氣にでもおかゝりになつたのでは？

不安が、彼女のスチームの熱に熱し切つた全身を不快な戰慄でわなゝかせた。彼女は、電話をかけてホテルの方へ問ひ合せようと思つた。しかし、そこには小さな危惧があつた。もし、電話室へ行つてゐるうちに彼が來て、指定の場所に自分がゐないのを發見したら、どんなに氣持を惡くして歸つてしまふことであらう。

いつまでも〳〵、待望と不安とに苦しめられて坐つてゐる間に、あまりに强すぎる室内の溫度に、

とうとう輕いめまひをさへ感じて來た。嘔氣すら覺えて、手袋を脱いた白い手で額に觸つて見ると、燃えるやうに熱してゐた。

時計はもう七時を知らせてゐた。

——どうしても、もういらつしやらないわ——約束よりも二時間も經つてゐるのだもの——でも、私をわざとあざむくやうな方ではなし、きつと御病氣に相違ない——

さう思ひはじめると、今度はその杞憂でゐても立つてゐられなくなつて來た。

彼女はやゝしばらくして、とうとう決心した。

——どうせお友達のところへ行くといつてうちを出て、銀座で自動車も歸してしまつたんだわ。だれも私がこゝにゐるのは知りはしない。九時や十時までなら、お友だちの家にゐるとお母さまも安心してゐらつしやるわ。これから篤夫さんのホテルへ行つて見ませう。きつと、時候がこんなだから風邪でもお引になつて、急に動けなくなつたに違ひないわ。

矢もたてもたまらず、彼女はステーションを出ると、自動車の溜りの方へいそいだ。高溫な室内から、突然、肌冷たい晩秋の夜氣の中に出たので、いひ知らぬ惡寒が身うちを走つて、頭は割れるやうにいたみはじめた。だが、そんなことにかまつてはゐられなかつた。

彼女は小さな、みすぼらしい自動車に搖りとばされながら、篤夫の宿の方へいそいだ。

——たとひ、どんな病氣にしろ、私はあの方を責めて上げる權利があるわ。だれに賴んでも電話ぐらゐかけられるはずですもの——でも、もし、ひどく急に惡い發作でも來たのだと心配だわ。

彼女はコオトの襟を立てゝ、身ぶるひを押へながら心に呟きつゞけた。

——あゝ何て、戀といふものは苦しいでせう！

とはいへ、いざホテルに着いて、受付の老人から次ぎのやうな言葉を聞いた時には、疑惑と失望とのあまり、彼女はその場に昏倒してしまひさうにさへなつた。

「細田さんですか？　多分五時少し過ぎでしたらう。どこへかお出ましになりましたよ。多分今夜は歸ないだらうからといつてネ。」

——まあ！　どうしたわけなのだらう？　自分があそこに立つてゐたのを見落したのだらうか？

いゝえ、そんなことはあるはずがない。それならどうしてあそこへ來てくれなかつたのだらう！

なぜ？　どうして？

「あの方は氣まぐれな方ですからなあ。時々二三日もホテルへお歸りになりませんよ。あんなにお若いのだから、まあ、どんなに自由にしてゐても、だれもとがめることは出來ませんや。」

老人は問はずがたりに、そんなことまでしやべるのだつた。

——なぜ私のところへ來てくれなかつたのだらう？　どんなに急に社の用事が出來たとしても、あ

そこまでせめてことわりに來てくれさうなものなのに！　私にはわからない、わからない！　時々二三日もお歸りにならない――まあ、どうしてだらう！　あの方にかぎつてまさか！　ああ、でも、どうしてあそこへいらつしやらなかつたのだらう！

「置き手紙でもなさるなら、紙とペンを差し上げませうか？」

と、老人は深切にいつてくれた。

しかし、彼女は手紙を書き殘す氣力もなかつた。

「いゝえ、有難う、いゝえ――」

――彼女はガク〳〵と、その場に崩れてしまひさうな膝がしらを、强ひて踏みしめるやうにして外へ出た。そして、待たせて置いた自動車にぼんやりした氣持で、しかし、今は涙を押へかねて乘らうとした時だつた。彼女は思ひもかけず、自分を呼び止める男の聲を耳にした。

「やあ！　ふぢ子さんぢやあないか？」

ハツとして彼女は棒立ちになつた。びつくりして睜いた目が、薄闇の中にみとめたのは、思ひがけなや春彌の立すがただつた。

「ふぢ子さんですね？　思ひがけないところでお目にかかつた――」

つい、鼻の先きまで歩み近づいて、春彌は鈍い調子でいひかけてゐた。

「今晩は――でも、私、いそぎますから――」

やつと、さう呟いて、ふぢ子は自動車のステツプに足をかけようとした。

彼女はまだはつきりと前後の狀態を意識することが出來なかつた。彼女はたゞ、夢魔のやうに、通り魔のやうに闇の中にあらはれた從兄から一刻も早くのがれたかつたのである。

しかし、相手は肘のあたりを輕く押へた。

「いゝえ。まあ、待つて下さい。で、細田君はゐましたか？　ゐるのですね？　それなら、三人でぜひ話したいこともあるのですよ。」

「いゝえ、細田さんは留守よ。」

と、彼女は肘に觸れてゐる手を拂ひ落さうとしながら答へた。

「ふむ。細田君が留守だつて？」

「えゝ、篤夫さん、ゐやしないわ。だから歸してネ。」

春彌はまだ放さなかつた。

「細田君がゐないにしても、僕は君に用があるのだ――少し歩きませう。」

「だつて――」

「いゝえ、少し歩いて下さい。」

いつもの春彌ではなかつた。絶望的な力が不思議にも鈍重な語調にまつはつてゐた。
ふぢ子はゾッとした。彼女の方はいつものやうに快活で向う見ずではなかつた。平生輕蔑しつけてゐる春彌にさへある恐れを感じた。
「僕、少し話があるのです。」
彼はさういふと、ズボンのかくしをさぐつて、幾片かの銀貨を運轉手に渡した。
「足りますか？　足りたら歸つてよろしい。」
運轉手はどちらでもいゝといふやうに、申わけだけにふぢ子を眺めた。ふぢ子が默つてゐるので、自動車はそのまゝ走り出した。
「實際、篤夫君はゐないのかね？」
と、まゝうたがひ深く春彌は呟く。
「聞いて御覽なさい。」
「では仕方がない。今夜ぜひあの人にたづねたいことがあつたのだが——」
と、春彌はあゆみ出して、
「しかし、君にあへば、結局同じことなのだ。」
ふぢ子は弱まつた心で、仕方なしに春彌と肩を並べるやうにしてあるき出した。

「君はめつきり元氣がないですね。何だか聲が震へてゐるやうぢやありませんか？　熱があるのではないかな？　ちよいと手をお出し——」
と、春彌がさも懸念さうにいつた。
「いゝえ、大丈夫よ。熱なんかありはしないわ。」
ふぢ子は言葉を強めて答へた。
「どこへ行くの？　早く明るい通りへ出ませう。」
彼女は陰氣な山の手町の裏通りが陰氣でならなかつた。
「あゝ、さうしませう。」
春彌は、默り込んだまゝしばしあるいた。
そして、自分に呟くやうにいひ出した。
「しかし、全く妙なものだ——僕はやつぱし靈性を信じよう。人間の精神力の他の心に對する影響を信じよう。僕は君のことばかりもうずつと考へてゐるのだ。すると、こんな思ひがけないところで——しかも細田君のホテルの前で君に出逢つたのだ——僕の精神力が、君をこゝまで導いて來たのだ。」
ふぢ子は虛脫した、哀しい心で苦笑した。
「いゝえ、そんな六かしいことでお目にかゝつたのぢやないことよ。私、篤夫さんをおたづねしなけ

ればならないことがあつて急に出て來たまでだわ。」
「いゝえ、君にはまだ何にもわからない。君は苦しまない——苦しむとだん〳〵僕の心がわかるだらう。」
冷たい、月のない夜だつた。二人は裏徑を歩きつゞけた。明るい通りへは中々出なかつた。ふぢ子は何度も身ぶるひをした。
「僕は君に話があるのだ。」
と、春彌は幾度となく呟やくのだつた。

闇に呻くもの

黑い、月のない晩だつた。青ざめた星はひどく近々ときらめいてゐた。
二人は暗い、人通りの殆どない裏町を默り込んで歩きつづけた。春彌もふぢ子も、めい〳〵外套の襟を立て、めい〳〵かくしに兩手を深く突込んでゐた。吐く息がいつかもうう白く見えるのだつた。
ふぢ子はよんどころなく、春彌の歩む方へ歩みながら、ます〳〵明るい通りから遠ざかつてしまふやうな氣がした。花やかな街頭の輝やきを赤く映してゐる空は左手だつた。だが、春彌はかまはず右手の方へ行くのだつた。
「どこへ行くの？　灯も何もない眞暗なところをいつまであるくの？」
と、ふぢ子は呟いた。
春彌は答へなかつた。
「ねえ、どこへ行くの？　私、もうちへ歸る時間なのに——」

「僕はなるだけ暗いところが好きなのだ。それに君は、細田君が宿にゐたら、まだ今頃はあすこにゐるはずぢやあないか？」

モゾリと、春彌はいつて、そのまゝあゆみつづけた。

長い〳〵屋敷の土塀――片側はすつかり窓といふ窓が盲しひた小學校の建物。

ふぢ子は春彌の變人ぶりには馴れてゐた。それに彼がどこまでも遠慮を捨ることの出來ない氣性なのも知つてゐたから、暗い夜道を連立つて歩くことに何の不安も感じなかつた。しかし、たゞ、退屈で、馬鹿らしくてならなかつた。

「でも、仕方がないぢやあないの？　こんなところを歩いてゐたつて――篤夫さんがゐらつしやらないときまれば、私、うちへ歸つて寢てしまひたいわ。すつかりくたびれちやつたわ。」

事實、彼女は疲れ切つてゐた。惡寒や頭痛は大分よくなつたが、生あくびが、まるで血の道が起こつた年增女でもあるやうに、處女の美くしい口から洩れるのだつた。

「僕は、君のことで細田君をたづねたのですよ。その揚句、彼にあはずに君にあへたのだ――で、僕は直接おきゝしたいことがあるのでネ。」

春彌は、相手の容子には無頓着に呟いて、

「それで、たつた二人で、かうしてゐられるのが實に好都合なのだ。」

崖際へ出るとそこに小公園風の空地があつた。鐵鎖を張つた低い石柵のそばに、醜くいベンチが置いてある。

春彌はその方へあるいて、しつとりと露に濕めつた、冷やつこいベンチにまづ腰を下した。

「お掛けなさい。」

クタ〳〵に疲れてゐたので、よんどころなくふぢ子も坐つた。

目の下に谷間町があつた。そこには幾らか明るい灯が見えて、佗びしい美くしさで秋の夜霧の底にうるんでゐた。

春彌は吐息をして、かくしを探つて紙卷に火をつけた。

ふぢ子は夜寒に身震ひをした。彼女は小さく坐つて、心の底で篤夫のことを考へてゐた。何のために、彼は今夜のやうなことをしたのだらう――一言のことわりもなく行衛さへいひ置かずに姿を消したのだらう――今夜の出あひは、彼の方からいひ出したことではないか――

美くしい、うら若い處女は、まだ生れてから嫉妬や疑惑の眞つ黑な渦の底に身を悶えさせたことがなかつた。が、今夜はじめて、暗黑な心の闇の中に、鋭い懊惱の獸の爪で魂を裂きむしられるのであつた。

――あの方は、あんまりどなたの前でも愛想がよすぎるわ。微笑みすぎるわ。あの方のあの微笑み

の前にはどんな娘だつて心を酔はせずにはゐられないわ。
彼女は友だちといふ範圍だけで考へても、あらゆる娘といふ娘が、親友の星子をはじめ、さも羨ましげな、妬ましげな目つきで自分と篤夫との姿をいつも眺めてゐるのを思ひ出した。
――こんな、私なんぞよりも、もつと〳〵美くしい女たちが、どんなに大勢であの人をみつめてゐるか知れやしない。私は、何にも經驗もなく、智識もなく、つまらない〳〵(令孃)にすぎないんだもの。あの方はきつと、私のことなんか心の中では馬鹿にして相手になさらないのかも知れないわ。お父さまの娘だから、仕方なしに遊び相手になつてゐてくれるのかも知れないわ。私には男の人をどうしたらよろこばせることが出來るか、そんな智識はちつともないのだもの――
彼女の目に、生々した若々しい篤夫を中心にして、無數の女たちが、嬌態のかぎりをつくして媚びを捧げようと爭つて身を投げ出してゐる光景が映つた。いつか、どこかの活動寫眞で見た一場景のやうな、淺猿しい、しかし魅惑的な光景が……
ふぢ子は固く目をつぶつた。そしていとはしい想像圖を頭から拂ひ退けようとするやうに頭をふつた。
「僕はあの男に話して置いた筈だが――」
と、春彌が突然いひ出した。

ふぢ子は昏睡から呼びさまされたものゝやうに、ちよいと振向いた。
「君は何か聞きませんでしたか？　ふぢ子さん。」
薄闇の中で、春彌はぢつとこちらをみつめてゐた。ふぢ子はぼんやり答へた。
「何をでせう？」
彼女の頭からは、まだいまはしい幻影がすつかり消え切らなかつた。そしてまたかすかに身振ひをした。
「君は聞いたでせう――僕はあの男に頼んだことがあるのです。」
と、春彌は折角つけた紙卷を、指の間で揉みにじりながら話した。
ふぢ子は、はじめて思ひ出したやうに口元だけに苦笑をうかべた。
「あゝ、またピアノの稽古をはじめた方がいい――あのことなの？　あんなことならまたゆつくり御相談するわ。今、私の氣持はそんなことにかゝづらつてゐられませんのよ。いろ〳〵なことで一ぱいですから――」
「僕はどんなことで君の心が一ぱいだか、それはようく知つてゐる。」
春彌は、美くしい殘忍な從妹をみつめた。
「君は細田君をあんまり愛しすぎてゐるから――」

ふぢ子は、びつくりしたやうに眺め返して、すぐに憤りつぽく眉を揚た。
「あなたはまるで探偵みたいなことをいふのね。どうしてひとの心を忖度する權利があるの――ま、どんな風にお思ひだつてかまやしないけど、私、もうあなたとお話ししてゐるひまがないわ。私、失禮してよ。何だか寒くなつたわ。」
彼女は立ち上らうとした。
春彌はおづ〳〵手を伸べて、ふぢ子の滑らかな地のコオトに觸れた。
「何をなさるの？」
ツンとして、處女らしく、彼女は怒つた。
「まあ、待つて下さい。ふぢ子さん。僕は今夜君にきゝたいのだ。從妹としての君ではなく、女としての君に――僕のいつたことが氣に觸つたら勘忍し給へ。」
――從妹としての君ではなく、女としての君に――
ふぢ子は興味を感じたやうに、美に誇る少女特有の高ぶりで、濟ましてまた腰を下した。
「ききたいことつて、何でせう？」
春彌はどもつた、彼はどもりながら、さも重大な決心を囁やくやうに、ボツ〳〵はじめた。
「僕はすつかり決心してしまつてゐるのだ。僕はもし君が嗤ふべきものだときまつたら、もう一度外

國へ行かうと決心してゐるのだ。で、君も正直に聞かせて下さい。」
「何でも――」
と、ふぢ子は冷たく微笑した。
「僕が君に對してどんな感情を持つてゐるか？――君だつてそれは知つてゐるだらうね？　で、君はそれを嗤つてゐるだらうか？」
突飛に、春彌はいつた。ひどく無器用な氣が利かない態度で、彼は靴の爪先の方へ目を落した。そして、
「きつと、嗤ふだらうね？」
と、ひとりごとのやうにいひ添へた。
「私が嗤ふだらうつて？」
と、ふぢ子は蓮葉に叫んだ。彼女の心は篤夫に對する疑惑からやつといくらか遠ざかることが出來てゐた。
「何も嗤へるわけがないわ。あなたの感情なんか讀む術は知らないもの。」
「ほんたうに！　ああ、やつぱり君は僕なんぞは生きようが死なうがかまはないと思つてゐるのだ――少しでも同情があれば、その位なことは知つてゐてくれる筈だ。」

と、春彌はうなだれた。

「だつて、それは無理だわ。私、あなたのことは、音樂の出來る從兄妹同志としか考へてゐなかつたものね――もつとも、先達、さういへば篤夫さんが、冗談のやうなことをいつてゐたわ。あなたが私に戀してゐて、それでどうとか――と。でも、あんなこと、篤夫さんの作りばなしとしか思へやしなかつたわ。だつて、あんまり馬鹿らしいことなんですもの――」

「それなら細田君はやつぱし忠實に僕の氣持を傳へてくれたのだ。」

と、春彌は絶望的に呟いた。

「それなのに、君はそれを冗談だ、馬鹿らしいことだと嗤つてゐる――やつぱし君は僕の氣持を嘲るだけなのだ。」

「でも――」

と、ふぢ子は兩手で兩肩を十文字に抱へるやうにしてうなだれてしまつた相手を、いくらかいたはるやうにいふのだつた。

「そんなことが眞面目に考へられるとあなたは思ふの。あなたと私は從兄妹同志で、そしてそれ以外の何でもないのですもの――あなたはきつと此頃どうかしてゐるのよ。頭が疲れてゐなさるんだね。」

春彌はムクリと頭を揚げた。そして心から嘆息するやうにいつた。

「君はそんなに細田篤夫が好きなのかなあ。僕はせめて君が僕のものにならないでも、誰のものにもならないことを望んだのだ。萬一、君がだれかのものになる日が來るにしても、それが一日でも遲いことを――遠い未來であることを望んだのだ。僕からこの情熱が消え亡びてからにして貰ひたかつたのだ――」

「ほ、ほ、ほ。」

思はず、ふぢ子は笑つた。そして春彌がとがめるやうにみつめる目に出あふと、

「ごめんなさいね。笑つたりして。でも、そんな日を待たねばならないとしたら、私、すつかりお婆さんになつてしまふに違ひないわ。戀をするにふさはしい青春は、きつと大へん疾く竭きてしまふに相違ありませんもの。」

彼女は春彌の氣持に捲き込まれるにはあまりに若かつた。彼女は自分の青春と美とを、祝福するやうに、惜むやうに、歌ふがごとくしまひの言葉をいふのだつた。

春彌は呻いた――

「君のいふのは尤もだ。ぢやあ、僕は遠くへ行つてしまはう――」

相手が哀しく諦めようとつとめるのを見ると、ふぢ子はかすかな感傷と同情とを感じた。この人はこのやうな氣持で再び外國へ渡らうとして、どんなに寂しい海を、月を、都市のすがたを眺めること

だらう！　でも、おやめなさいといふわけには行かぬ。いゝえ、却てそれがいゝのかも知れぬ。この變質的な、不思議な心を抱いた畸人には――

「美くしい波や町が、あなたにあのいつもお話なさる大きな樂曲を書き上げさせるかも知れないわ。」

と、彼女は言つた。

春彌は空を見てゐた。高臺の崖から眺めると、青ざめた星は低い町家のつい上にも散らばつてゐた。

「不思議な話だが、僕には君といふものが僕の魂のやうに思はれるのだ。君と離れることは世界からベエトオベンの第九シムフオニイを失ふより寂しいのだ。多くの若い人達はかういふ時に死ぬのだらう――」

「もう歸りませう。」

と、ふぢ子は呟いた。

「えゝ、お送りしませう。」

春彌は細長い身を起こした。そしてもうふぢ子の方は見返へらずに、とぼ〳〵とあるき出した。明るい町の方へ導かれながら、ふぢ子の胸にはまた篤夫のことが浮かんで來た。戀しさと疑ひとに小さな心臟が引緊められた。

――どんなにあなたは薄情なんでせう！　と、彼女は胸の底で叫びつゞけてゐた。

愚智と無智

――ふぢ子をステーションのスチームの側に見捨て、たゞ一人櫻木町行の電車の人となつた篤夫は、ふと發車間際に飛び込んで來た一人の男に、顏を見られまいとするやうに目をそむけたが、この時刻にもかゝはらず割に空いてゐたので、すぐに見つけられてしまつた。淺黑い顏をかなりな醉に赭らませた男は、篤夫に目を止めるとツカ〳〵と歩み寄つた。

「おゝ、細田君、どこへお出かけだね？」

焦茶いろのダブ〳〵した長外套に、同じいろの帽子を冠つたその男は、篤夫がつとめてゐる雜誌社でめつきり羽振のいゝ山名といふ記者だつた。今のところはまだ調査部の主任として働いてゐるにすぎなかつたが、社内の評判では、例の多野なぞを追越して、早晩編輯主事の重職にありつくだらうといふことになつてゐた。平生は無口な、あまり差出がましいことはいない性だつたが、大酒家で、酒に醉へば社長もクソもないといふ態度も見せた――が古川氏はそれを愛してゐた。だが、篤夫は、こ

の先輩が時々見せるキラリ〳〵と鋭く光る目つきが氣にいらなかつた。これまで、彼は出來るだけこの男を避けてゐた。社内で彼に一種の恐怖に似た感じをあたへる存在は、この山名だけだといつてもいゝのだつた。

篤夫は、しかし、面と顏を合せてしまつて、いつも誰にでも見せる美くしい微笑で迎へた。

「えゝ、ちよいと大森の方まで――」

彼は身をソバめるやうにして、相手を自分の隣に坐らせた。

山名はもうフラ〳〵する位になつてゐたが、

「成る程、君は木村哲三の紹介で入社したんだつたね？　木村の遺族を慰問にでも行くのかね？」

――好都合な推量だつた。

「えゝ、時々伺はないと惡いと思ふものですから――」

「その心掛は結構だよ、吾々は生きてゐる中にさへ、相手に用がなくなると無沙汰になるものだ。しかし死んだ後まで一度でも世話になつた人へ盡くすといふのは、當代まづ珍らしいといはねばならん。」

山名はいかめしげに讃めたが、急に篤夫を眞つ直に見て、例の鋭い目で眺めて妙な微笑をうかべた。彼は聲を落して囁やいた。

「時に、木村の未亡人は馬鹿に美くしいといふぢやないか、ねえ？」

篤夫はこの人だけには、ひよつとすると顏が染まるかと不安であつた。しかし、さりげない容子をしおほせて、何か答へようとするのを、相手はかぶせた――

「は、は、そんな顏をしないでもいゝよ。何も未亡人が美人だからといつて、君の故人に對する愛情を邪推しようとするんぢやあないよ。は、は、は。」

「あなたのお宅は？」

と、篤夫は話頭を一轉しようとして訊ねた。

「僕かね？　僕はやつぱし大森だ。併し木村君とは方角がまるで違ふのさ。山手の方でね。一度遊びに來給へ。家は小さいが、庭に大きな池がある。それに百匹も鯉が放してあるんだよ。僕の唯一の財産だ。は、は、は。飢饉か内亂でも起こつたら、僕あその鯉を一日に一匹食つて、百日だけは生きつづける積りなんだよ。」

山名は無遠慮に笑つて、

「それはさうと、君におよろこびをいつて貰はうかな。僕は今まで社長に逢つてゐたんだ、そして編輯局主事に、明日いよ〳〵任命するからといふ内意をうけたんだがね。僕として素晴らしい成功といふべきものさ。多分月給だつて上るでせう。は、は、は。」

「それでは、いよ〳〵。」

と、篤夫は相手を眺めた。
「以前から多分さういふことになるだらうと、みんながいつてゐましたが、お目出たうございます。」
「有難う、およろこびを受ける資格はあるかも知れんね。しかし、果して幸福な結果を生むかどうかはわからんが——」
山名は口では快活にいつてゐても、さうしたことを心からよろこんで浮々してゐるのではないことは、篤夫にもわかつてゐた。彼は靜かな微笑を洩してつゞけた。
「僕はこれまで三ケ所だけ雜誌社を渡つてあるいたのだよ。そして、どこへ行つても入社して十月もたてば、大てい主事までには拔擢されたのさ。だが、そこまで行つて見るとすぐに廢めなきやならなくなるのだ。」
「なぜでせう？」
篤夫はいぶかしげにいつた。
「なぜだかね。」
山名は靜な微笑のまゝでいつて、かくしから紙卷の袋を取り出した。
「多分、ときゞ、僕が眞面目になるからだらう——惡い病氣だとも、いへばいへる。」
山名は細卷莨をふかし出した。そして默り込んだ。

篤夫は今まではこの男を出來るだけ避けてはゐたが、いよ〳〵主事といふ高い位置に坐つたときまればいろ〳〵な點で少しでも接近して置く方が便利だと考へた。彼は社長から信任を受けてゐる點では山名に劣つてゐようとは思はなかつたが、學識も經驗ももとより及ぶべくもない。世間的には、何といつても敵にまはして戰へる力があるはずがなかつた。もちろん、早晩自分は雜誌社の方とは緣が切れるかも知れない。社長が政治界に驥足をのばす時が來れば、自分も必ずもつと生々した世界に飛び出すつもりだ。しかし、それまでは——
——電車は大森に近づいて來た。ふと山名はいひ出した。
「僕にたつたひとつの惡い癖があつてネ、は、は、もつと惡い癖も實はかず〳〵あるのだが、この位の酒はまことに後口が惡くつていけないんだ。家は女房に死なれてから殺風景だし、ほんの半時間ばかり、驛の近所の西洋料理で腰掛たいと思ふのだが、どうだね？　ちよいとつき合つてくれませんか？」
篤夫は一刻も早く、あのたわやかなはつ子の白い腕の中にいそぐべき人なのだつた。そのために可憐なふぢ子をさへ見す〳〵ステーションに見捨て來るやうな慘酷をさへあへてしたのだ。いつもであれば、彼獨特の巧妙な口實で、何とでも山名の前をいひ拔けてこのまゝ別れもしたらう。しかし、今日は特別だつた。山名は明日編輯局主事に任命される人なのである——
「君はいそぐかね？」

と、いはれた時、それゆゑ彼は、すなほに答へたのである。

「えゝ、僕も別にいそぐわけでもないのです。お供しませう。」

――電車から降りると、夕闇の町を二人は明るいレストオランの飾燈を目ざしてあるいた。

二人は物臭さうな、何となくからだのダルさうな女給に導かれて、二階に通つた。いたづらに眞光にシヤンデリヤで照らされた部屋には、外にはお客のかげもなかつた。

「ウイスキイと水、それに何でもいい――」

と、山名は命じた。

ものぐささうな女給は、ウイスキイの瓶と水差、それにチーズのたぐひを運んで來た。そして、無愛想にテーブルに置いて階下へ去つた。

山名は立てつゞけに、グラスを二つ三つあけた。

「僕は女房がゐるころはこれほど酒好きではなかつた。人間はやつぱり自分だけのものではないんだね。どうしても何かの影響を受けないわけにはゆかない。」

そんなことをいつて、ふと、篤夫を眺めて、

「時に、君とかうして飲むのもはじめてだが、隨分若いねえ？　一體いくつだね？」

篤夫は答へた。

「ほう、二十三？　そりやあ若いなあ。しかし美くしいくせに、年よりも老けて見えるね。」

「きつと、かなり激しく苦勞をしたからでせう。」

と、篤夫はつつましげに答へた。

「飲まず喰はずの日もありましたから。」

「大きにそれもさうだらう。それに君は先天的に極端に才氣的だ。敏鋭だ。だからどことなく老成してゐる。」

山名は醉つてはゐても、鋭い視線にはいつまでも冷たさがあつた。彼は篤夫を眞っ直にみつめて、

「だが――いや、かういふことは僕がいふべきことではないかも知れない――しかし、いはゞ年長者の義務としていへばだね――それを君が憤らうと笑はうと勝手なのだが、僕にいはせると、君なんか、もつと若々しく、もつと自由であつてもいゝと思ふのだがね？」

篤夫は目をグラスに落とした。

「實をいふとね。」

と、山名はつゞけた。

「僕ははじめて君を見た時から、この青年はわれ〳〵とは緣のない人だと感じたのだ。なぜといつてあまりに才氣煥發だつたから――しかし、君には不思議な人徳がある。妙に人をひきつける。それで、

今日のやうな機會になると、こんなことまで僕にいはせるのだ――僕自身にすれば、僕だつて經驗派さ。つまり自分の見解を土臺にして生きて行く側さ。だが、いかにそれが危險なことだか、僕は隨分よくその例を見て來てゐる。自分の才氣をたのんで、欲望を追つて行けば、生活は歪むばかりだ。ちよいと見たゞけでは、いかにも自由な、快活な人生をあゆんでゐるやうに見えても、その實、その人の生活は穢され、墜ちるばかりだ。なぜといつて、才能とは何だ！　それは目前のことを好適に處理するだけではないか。もつと高いものが彼自身を指導しない限りは、世俗の才は醜くい我慾を強めるばかりなのだ。」

なぜ、突然、この男はこんなことをいひ出したのだらう？

篤夫は不思議な惡寒が背すぢを走り流れるのを感じたが、しかし、勇氣を鼓して相手を見返した。

「どうしてあなたは僕をそんな風に觀察なすつたのです？」

山名は自然な笑ひをうかべた。

「君があまりに融通無礙だからさ。社内で見てゐても、君はだれに向つても同じ笑顔を見せる。僕は君を最初に見た時、これはすばらしい三成だと思つたね。は、は、は。しかし、まあ、それはどうでもいゝ。生れつきはめい〳〵のことだ。たゞ、僕はこの機會に君にいひたいね――恐らく君は輕蔑するかも知れない――才能家は、念として高い理想を抱かねばならん。抱かないまでも、ある氣高いものが人生に存在し得るといふことを始終つとめて考慮に置かねばならん――その考へが、才能家を墮落から防ぐのだ。肉食獸が結局地球の生物を支配出來なかつた理由を考へるのだね。」

山名はまたグラスを干た。

「肉食獸は結局より高いものにまけた。それ故、低い欲望を自由に滿足させる力を持つた人間は禍なのだ。君の笑顔は獅子の牙かも知れん。しかし、それをあんまり露はしてはいけない。僕は人相見なのだよ。そして君に對して危險を感ぜねばならんのを惜むのだ。無遠慮な問だが、君は勉强してゐるかネ？」

篤夫は相手の言葉があまりに突然で從つてある痴かしさを示してゐるのを嗤はうとしたが、妙に笑へなかつた。

「ええ、出來るだけ勉强したのですが――」

「君のやうな才人は、ほかの奴等が一日ですることを十分でする――あとの二十三時間五十分を利用しないで、惡用すると君の生活は呪はれるよ。君は無智の才能を誇つては駄目だ。智識が深くなると自分が怖くなるだらう――」

――篤夫は木村哲三にそも〳〵邂逅した晩、銀座のカフエで、この山名の言葉とは全く反對な說法を聞いたことを思ひ出した。哲三は、たゞ、篤夫の先天的な美貌と才能とを讃めてゐた。そして、ひたすらにそれを發揮せよとすゝめた。今、山名はそれを抑へる方法を說いてゐる。

——だが、やつぱり木村さんは天才で、この山名といふ男は凡人だ。
と、彼は反感を以つて心に呟いた。
——僕は何もこの男に求めてはゐない。だのに、何の刺戟も持たない道徳を說いてゐる。そんなことは小學校の先生からさへ聞いてゐる。
篤夫は、自身、何ものをか求めて山名の前に迷つてゐることを忘れて、こんなことなら一刻も早くはつ子の許にいそいだ方が百倍も悧巧だつたと後悔した。
「智識は最後に人間に何おしへてるでせう？」
と、彼は嘲りを隱してたづねた。山名はのんびりと答へた。
「僕もよくは知らない。だが、多分、ひとを牲にするより、ひとのために牲になるのが幸福だといふことをおしへてくれるのだと思ふ——僕にもわからない。」
「では、智識と宗教とは同じものでせうか？」
「さうさね。」
と、山名はキラリと見た。
「君が言ひさうな言葉だ。それが君たちと僕とのちよいとした違ひなのだ。僕はあらゆるものごとを、そんな風に比較して、すぐに呑み込まうとは急がないのだ。」

突然、彼は微笑した。
「いや、あまり面白くないことをいひ出してすまなかつた。たゞ、先刻もいふとほり、僕は君に一種の魅力を感じるのだよ。君がもし才氣だけで押さうとするならそれもいゝだらう。だが、君が自分をもつと深めたいと考へるなら、なほいゝだらうといつたまでだ——さあ、もうひとつやり給へ。」
篤夫は表面山名の忠言を感謝した。そして、ふと、思ひついたやうに腕時計を眺めて、木村家と約束の時間が來たことをいつて、一足さきに外へ出た。
彼は小さな電車に乘りかへて、森ケ崎へと、いそぎながら心の中に呟きつゞけてゐた。
——どんなに多くの人間が、カビ臭い智識をたづねてゐる中に枯てしまつたのだ？　愚な奴が智識智識とえてはやし立てるが結局愚智といふ奴をつめこむに過ぎないのだ。ほんたうの生活者は、生き動いてゐる世界だけに傾倒するのだ。必要以外のものを求めるのに疲れて、この大事な青春を朽させてどうするのだ。雜誌社の雇ひ人が氣高いものへの惝恍を說くもすさまじい！
彼は山名を嘲けつて、紅い脣を引曲げて笑つた。
しかし、あの男がどうしてあんなことをいひ出したかと考へると無氣味な氣がした。
とはいへ、もう、はつ子がどんなにか待ちこがれてゐるであらう郊外の靜かな旅館の灯の窓がついそこに見えはじめてゐた。

篤夫はうすら冷たい海風がひえ〳〵と流れて來る小徑を、鑛泉旅館の灯を目あてに急いだ。電車に乘つてゐる間は、まだふぢ子に對する濟まなさが心のどこにか殘つてゐたが、こゝまで來てしまへばもう何の自責もなかつた。彼は今は、自分のあの靜かな離れで待ちこがれにゐるであらう、白い腕や紅い脣だけを目に浮べてゐた。

――どの道、あらゆる快樂は刹那刹那を醉はせてくれるだけなのだ。相手が誰であらうと、そんなことは別にこつちに取つては問題ぢやあない。今夜僕ははつ子のしんなりしたからだにひかされてゐようとも、明日まで責任を待つわけぢやないんだ。明日は明日、今日は今日さ。だから、ふぢ子にしても僕を恨むこともないわけさ。

篤夫が旅館に着いたころ、はつ子はもう待ち兼て、ゐたり立つたりしてゐたところに相違なかつた。彼女はざつと一風呂あびたあとに、ほんのりと化粧つて、少し紅すぎる位に臙脂をさしてゐた。

女中に導かれて離れに通ると、彼女はひと目も兼ねてゐられないやうに、入口に走り出して、篤夫の兩手を掴むやうにした。

「隨分待つたわ――何時間も――何時間も――」

「しかしそれは僕のせいぢやあないでせう。」

と、例の人の心を魅するやうな笑で彼も手を握り返した。

「ひどく急なのだもの――會社からうちへすぐに歸つたからいゝやうなものゝ、でなかつたら君の手紙を見られなかつたわけだ。」

「でも、あたし、信じてゐたのよ。あたしの思ひで、きつとあの手紙を早く御覽になるだらうと――何でも思つてゐることはきつと通るにちがひないのだから――」

「君は迷信家ですね。」

「えゝ、時々。」

篤夫は座につくと、食卓に兩肱を突いて、何かニヤ〳〵思ひ出し笑ひをしてゐた。

「何がオカしいのよ？　ひとりで笑つてゐらしつて？」

と、はつ子は女中が運んで來た茶を篤夫にすすめながら責めるやうに眺めた。

「だつて、今日は面白いことがあつたのだもの？」

「どんな？」
「それが、ちよいと話せないことなのさ。」
「ぢやあ無理には聞かなくつてよ。どうせあなたのことだから――」
「いゝえ、讃められようとも責められることぢやあないのです。しかし、それを君に話してしまつては、あんまり相手にわるいと思ふだけさ。」
「あたしが喜ぶことなら――あたしを喜ばすためなら、ひゝとの感情なんかかまはないと思つては下さらないの？」
はつ子は近藤との間が切れてから、ひどく自由な氣持になつてゐるらしかつた。自分があらゆる犠牲を拂つた以上、相手もどこまでもその氣持を買つてくれるに違ひないと考へてゐるのだつた。彼女ももう相當な年にはなつてゐたが、いたづらに媚びられてすごして來た女だけに、どこか戀愛觀に手落があるのだつた――つまり戀の初心者である點においては、ふぢ子に讓らなかつたといつてもよかつた。
「さうさ。」
と、さうした氣持を、篤夫は心の中で苦笑しながら、
「さうさ、君をよろこばせるためならどんな犠牲をはらつてもいゝわけだが――相手が淑女であつて

見れば――」
「まあ。」
と、はつ子は怖い目で睨んだ。
「あたしの前で、よくもそんな言葉がノメ〳〵と使へるのね。」
「しかし、默つてゐるよりいゝでせう、僕は出來るだけ君の前で祕密をいだきたくないもの――」
「出來るだけではいやよ。絶對にでなければ――で、一たい、今日どんなことがあつたといふの？」
「それは面白いこと――すつかり話したら君はきつと御褒美をくれずにはゐまいと思ふんだ。」
「話して頂戴。」
で、さも重大な祕密を語るものゝやうに、篤夫はふぢ子とのことを話した。ステーションの出あひだけはかくして置いた。
彼女から芝居に招待されてゐたのを劇場の前まで行つて、彼女が自動車から下りるのを遠く眺めたまゝこちらへ來て了つたといふやうな風に話した。
「で、さぞあの娘はおこつてゐることだと思ふのです。眞相を知つたら、君を殺したい程に思ふでせうよ。」
はつ子はすつかりよろこばされてゐるに相違なかつた。この方もさも重大な問題について語られて

ゐるのを聞いてゐるやうに、息をつめるやうにして男の目の中をぢつと見入つてゐた。
「でも、そんなに褒めて上げるわけにも行かないわ。なぜあのお嬢さんとそんなお約束なすつたの？あたし、今後許せないわ。」
「しかし、僕の身分を考へて下さい。」
と、篤夫は殊勝らしく答へた。
「僕はあの娘のお父さんのお蔭で、いはゞ、世の中へ引出して貰つたのです。だから頼まれゝば芝居のお供位は——」
「あたしは決して油斷しないわ。」
と、はつ子はキメつけるやうに眺めた。
「あなたは誰にも萬遍なくお世辭がよすぎるんですもの——だれだつてよろこばずにはゐられないもの——それにしても、もうあんまりお芝居へなんぞ御一緒にいらつしやるなよ。いつかのやうな目にあつて、今度こそ二人で燒け死なゝければならなくなるかも知れませんもの——もつとも、その方があの娘さんにはうれしいだらうけど——さぞや本望だらうけれど——」
「緣起でもない。」
と、篤夫に笑つて、

「どれ一風呂はいつて來るかな。」
——はつ子はどてらすがたになつた篤夫と酌みかはしながら、前の戀人の愚かしさに關して、さも嗤ふべきものゝやうに話し出すのだつた。まるで恰好な酒の肴でもあるやうに——篤夫は薄ら笑でそれを聞いた。
はつ子は近藤を、曾つて自分もその胸に生死を託したことがあるのを忘れてゐるやうに見えた。彼をあざけることによつて、篤夫をよろこばせ、同時に自分の感情や感覺の進化を自悅したがつてゐるやうに見えた。
——この女も知れたものさ。
と、篤夫は相手の胸のふくらみのあたりをみつめながら考へるのだつた。
——自分が僕にどんな位置にあるのかをさへはつきり知つてゐない癖に、もう有頂天になつてしまつてゐる。もし僕のあらゆる裏面を見透すことが出來たらどんな顏をするだらう——しかし女性が、こんな簡單な直覺力や推理力を持つてゐないところに、僕たちの歡樂の根があるのだ。
彼はもうふぢ子のことはすつかり頭から追ひ拂つた。いはんや近藤の問題なぞは、彼には酒の肴にもなりはしない。で、少しばかり盃を重ねると、小さくあくびをして見せた。閉めのこした襖のあはひからは、もうとうに女中が布いて行つた友禪模樣の夜具の裾が見えてゐた。

爭論

五日程して、溫かい日のさしこむ祕書室に、篤夫はたゞ一人社長から賴まれた親展書の下書きを作つてゐた。すると、ひどく突然、隣の編輯室の方で甲高な叫びがもつれて聞えはじめた。文句ははつきり聞き取れなかつたが、誰かゞ口論をしはじめたものに相違なかつた。

篤夫は耳をすました。そしてほゝゑ笑んだ。

それは多野の荒びた叫びに違ひなかつた。

——たうとうはじめやがつた。

と、篤夫は呟いた。

多野が長いこと望んでゐた編輯主事の位置を、山名に占られてしまつたために、非常に失望して、内々編輯室の内部に不穩な攪亂をこゝろみはじめてゐるのは、篤夫はすでに十分氣がついてゐた。しかし、何分彼と山名とでは性格も人間も智能も段が違つてゐるので、多少山名に反感を抱いてゐる人

達でも、今度の昇格については表から反對を唱へるわけには行かなかつた。それで、多野の、自腹の御馳走に一度や二度なつた位で、彼と志を同じうして、職を賭して山名排斥運動を起こさうといふ程の氣組を見せるものは一人もなかつた。

多野は全體の形勢が自分に不利だと見ると、自棄的な量見を起したらしかつた。今日は、今まで一度も缺勤したことのない彼のテーブルに主じの姿が見えなかつたのだつた。

——ふん、これは面白くなつたぞ。兎角天下に事が起こらないと退屈だ。

篤夫はペンをおくと、しづかに机の上をかたづけて、椅子を離れた。そして、ドアロにそつとたたずんで、細目に扉をひき開けた。

いつになく眞紅に食べ醉つてゐるのが多野だつた。そして、兩手をかくしに入れて、大股に踏んばつてゐる彼と面を突き合せるやうにして突立つてゐるのが、山名の股肱の一人の今井といふ青年だつた。

そのほかの人達はめい〳〵好奇的な目を輝かして、めい〳〵の机から二人の方を眺めてゐた。山名だけは苦笑しながら、原稿の筆をやすめずにゐた。が、彼とても、この爭ひに氣を取られてゐることは、時々鉛筆を逆さにしては、書き損じの文句を消し〳〵してゐるのでもわかつた。

「それは君は故參だ。君は達腕家だ。しかし、僕は君から仕事の上で容喙を受ける義務はないと思ふ

のだ。」
「ふん、ツベコベと口達者な先生だな。成る程、僕は何の權利も持つてはゐないさ。君は編輯主事に對してだけ責任を負へばいゝのだ。それはわかり切つてゐるがね。しかし、僕はこの社のためを、雜誌のためを思ふから忠告するまでなのだ。」
多野はフラ〳〵と足元が定まらないのを、强ひて踏み締めるやうにしながら、毒々しい、醉ひ濁つた目で相手を冷笑するやうに眺めてゐた。
「僕は思ふんだ――下等な、不確な記事は、この雜誌から一掃してしまはねばならんと――上役たちの目だけはオベツカでくらますことが出來ても、一般讀者の目はさうはいかんからなあ。」
「何だと？」
と、今井はいかつい肩を一そうそびやかした。
「僕が上役にオベツカを使ふ？」
「君がとはいはん。しかしそんな傾向の見えんでもない人もある。なぜといつてこの南支問題の解說なんか――」
と、多野はあごで今井の机の上に開かれてゐる今月號の雜誌をさし示すやうにして、
「こんな見當ちがひに充ちた記事が、うちの雜誌ほどの大雜誌にそのまゝ活字になるとすると、多少

幹部すぢのお覺えの如何で、どんなものを書いても役目がすむといふことになるやうにも見えるからなあ。」
今井はムラ〳〵と突き上つて來るいかりを强ひて押へるやうに、わざとらしい冷たい笑ひで顏中の筋肉を引ゆがめた。
「君はどうかしてゐるよ。君は醉つぱらつてゐるのだ。何か話があれば、醒めてからにしよう。」
「いゝえ、僕は醉はん。醉つてゐるにせよ判斷力を失ふやうな僕ぢやない。僕は正氣なんだ。」
「何だ？　ぢやあ君は正氣でそんなことをいふのか？　正氣で僕を輕蔑するのか？」
ぐいと今井はいかりに歪んだ顏を突き出すやうにした。
「仕事さへ滿足に出來ずに、オベツカだけでその日〳〵をゴマ化してゐるやうな奴を尊敬しろといはれたところで僕には不可能だ。」
突然、今井の右手が握り固められ、やがてそれが振り上げられたと思ふ瞬間、激しい一擊が、身をかはすひまもない多野の横顏に飛んだ。
多野は不意打を食つてタジ〳〵とよろめいたが、やつと立ち直ると、これも拳を固めて防ぐやうに突き出した。
「撲つたな！」

「撲つたとも！　もつと撲つてやる！」

今井は突きかゝつた。激しい混惑が編輯室のよどんだ空氣を攪き亂しはじめた。

しかし傍の人達はまだ立ち上つて仲裁にはいらうとするものはなかつた。單調な仕事に倦んだ人達は、すべて何等かの刺戟を待ち樂しまずにはゐられないのだつた。

調停者

挑みかゝつたものも、かゝられた方も、今は騎虎の勢ひである。ことに年かさの多野は、かなりに醉ひ痴れてゐる。お互に、拳と拳ではまだるこしくなつた風で、一方は椅子を斜に差し上げ、一方はそこの卓の上に置いてあつたニツケルの文鎭を取上げた。

事があまりに荒々しくなつたので、篤夫が割つてはいらうと編輯室に足を踏み入れようとした瞬間、上席の山名が、相變らずまだ脣元にかすかな微笑を洩らしたまゝ聲をかけた。

「おい、もう大ていにし給へ。多野君も大人げない――」

自分に明かに怨みをいだく男に、わざと快活に彼はいひかけた。

すると、多野は、呼びかけられて却て憤りを煽られたやうに、相手の青年のことは今はそつちのけに、獲物を摑んだまゝぐるりと山名の方を向いた。

「何だ！　僕が大人げない？」

「さうさ、君は大人げないよ。」
と、山名は靜かな微笑を消さずに答へた。
「山名さん、こんな奴、言葉でいつてきかせたつて解りはしない。」
と、椅子を振りかぶつた青年記者が、敵手に一擊を加へようとするのを、近間の人達がやつと押へつけた。
「さうさ、君は大人げないといはれても仕方がない。」
山名は寧ろしたしみさへ見せて、自分の席を離れ、敵意を持たぬことを表はさうとするやうに、兩手をズボンのかくしに突込んだまゝ、いきり立つ多野の方へ近づいた。
「どうして君は僕を誹謗する權利があるんだ。」
と、多野はもつれる舌で喚いた。
「まあ〳〵、いろ〳〵氣にさはることもあらうが、何もかも僕からあとで若い連中にいつてきかせるから勘忍してやり給へ。」
と、山名は頼むやうに、
「君のやうな熟練者から注意を受けたといつて抗辯するのは惡い――しかし――」
「注意なんかいふものぢやあない。いらざる差出口で人の仕事にそいつはケチをつけたのです。」

と、青年記者はまだ怒りに脣をふるはせたまゝ叫んだ。
「まあ、君は黙つてゐたまへ。」
と、山名は押へて、
「しかし、多野君、かういふ未熟な若い人達と、白晝こんな場所で腕力沙汰に及ぶなんぞは感心せんね。君は醉つてゐるのだよ。さあ、一緒に喫煙室へでも行かうぢやないか。そして靜かに話さう。」
「何をつべこべいつてゐるのだ。」
と、多野は相手が靜かに出れば出るほど、蔑すみを受けるやうに感じるらしく、こめかみのあたりを眞青にして食つてかゝるのだつた。
「青二才たちはその甘口に乘るだらう――僕は乘らん。なんだ！　貴樣なんぞを何で僕が尊敬するものか――」
「君は酒を飲まない時にはいい人だがなあ。」
と、山名はどこまでも相手を取つくろつてやるやうに、
「たまに飲むと人が變る。」
「バカなことをいへ。」
と、多野は大股に一歩すすんで、憎々しげに山名を睨んで、

「もちろん、僕はこんな青二才どもと文句をいひ合ふ了見はなかつたのだ。山名、貴様が憎いんだ！」
「君、人格にさはるぞ。」
と、山名は、さすがに微笑を消して、呟くやうにいつて脣を嚙んだ。
多野はまるで氣違ひのやうに執拗だつた。
「僕は貴様が憎いんだ。利己主義のばけ物めー　おべんちやらめ！」
「君は何か誤解してゐるらしいな。」
と、山名は再び自制心を取り返して、
「何か僕に不滿があるなら、二人だけで話さうぢやないか？　この部屋は編輯室だ。いつまでも高聲を出してゐては、みんなの仕事の邪魔になる。」
「何を今更君と話があるんだ！　もう僕は君の部下なんぞになつて、この社にゐのこるつもりはないんだ。畜生！」
寧ろ絶望的に、バリ〳〵と多野は奥齒を嚙み鳴らした。
「ふん、辭職するといふのかね？」
山名もはなしがこゝまで來てしまへば――衆人のまへでこんなことになつて見れば、却てテキパキと始末をつけてしまつた方が、あとの煩はしさがないと考へたのであらう――ズバズバといつてのけた。
「それなら居を書き給へ――僕の手から社長へ傳達するよ。」
「こんな豚小屋を出て行くのに、何が居も糞も！」
と、多野は叫んだが、突然、心底から怒りに燃えて、握つてゐた文鎭を、山名を目がけて投げつけようとした刹那だつた――形勢がまず〳〵切迫するのを感じて、ぼんやり多野のうしろに半圓を作るやうにして傍觀してゐる社員の群をかきわけて、つい側に立つてゐた篤夫は、矢庭に片手を揚げて、狼藉者の利腕を手がたなで打つた。文鎭はポロリと下に落ちた。
「誰だ！　畜生！」
と、荒くれて振向く多野に、篤夫のすかしなだめるやうな目が眞ともにそゝがれた。
「まあ〳〵。」
力强い、若々しい腕で、篤夫は多野を抱るやうにした。
「まあ〳〵、こつちへいらつしやい。ね、こつちへ。」
多野　もう渾身の力を用ゐつくしたものゝやうに、ぐつたりと篤夫の腕の中に倒れかゝりながら、それでも時々振もぎらうと身を藻掻いた。しかし、篤夫の腕力には及ぶはずはなかつた。
篤夫は目に微笑をふくめて、ちよいと山名の方へ會釋をして、さて、醉漢を輕々と引ずつたまま、

編輯室を出て行つた。
帽子掛の下まで來て、自分も外套を羽織り、相手にもうしろから深切さうに掛てやると、
「あんまり昂奮しては困りますね。そこまでお送りするから、ひとまづ歸つた方がいいです。」
多野は醉は大分さめかけてゐた。激昂はをさまらぬらしく、何やらブツ〳〵と呟いたが、それでも
篤夫に腕を取られて、階段を下りた。
篤夫は多野を電車通りの小さなカフエにつれ込んで、薄暗い片隅の卓に坐らせた。そして女給がも
たらしたコーヒを、乾き切つた犬のやうにガツ〳〵と呑み干す相手を、つめたい皮肉な目で眺めたが、
口だけはひどく柔しく——
「どうです？　どこもお怪我はありませんでしたか？」
多野は元氣な青年記者に、横面を張られた時の痛みを思ひ出したやうに、片頰に手をやつて、苦々
しげに苦笑した。
「ウム、別に——」
彼はもうすつかり、憤りは鎭まり、たゞ何ともいはれない激昂後の憂鬱に——喧嘩の後味の淺まし
さに心を嚙まれてゐる風に見えた。
「あなたも今日はいつもとはまるで違つてお見えになりましたね。」

と、篤夫は甘くいひなだめた。
「實際ひどく驚かされました。あゝいふことをなさる方とは思つてゐませんでしたから——」
「君たちは輕蔑するかも知れないね？　しかし僕としては仕方がないのだ。」
と、多野はモゾリとした口調で呟いた。
「いゝえ、山名さんの言葉が全部あやまりだとしても、あなたが醉ひすぎてゐたといふのは事實です
よ。醉つてゞもゐなければあゝいふことになるはずがないのです。いつも溫良な方が——」
多野はちよつと默つて、
「それはさうかも知れん。しかし、醉はざるを得なかつたのだ。」
突然、篤夫は、顏を突き出すやうにして、囁やくやうにたづねた。
「辭職なさるとか仰有いましたが、本氣なのですか？」
多野は肩をゆするやうにした。
「いふまでもありませんよ。」
「だが——」
と、篤夫は前と同じ姿勢で、
「だが、もう後の口でもきまつてゐるのですか？」

――一種の憂惧のやうなものが、彼の語韻にふくめられてゐた。

ハツとしたやうに多野はながめた。

多野はかなり苦しい生活を送つてゐた。この雑誌社の社員として、決して不遇といふ位置に置かれてゐない時でも、彼は隨分困難だつた。病身の妻と、五人の子供をかかへて、郊外に近い小さな借家を維持することに骨を折つてゐるのであつた。

多野の返事を待たずに、篤夫はつゞけるのだつた。

「僕なんか、それこそ何の經驗もない身で差出たことだとお叱りを受けるかも知れませんが、何だかあんまり思ひ切つたやり方のやうな氣がしますね。あなたばかりではなく、うちの社員なぞで、だれだつて急に職を離れて、平氣で生活出來るやうな暢氣なものはありませんよ。だから僕は、もう何か後口がきまつてゐるので、最後のケリをつけるために、思ひ切つたことをなすつたのだと思ふのですが――」

多野は追ひ詰られた痩犬のやうな目つきをして、その目をそらして吐息をした。

「僕はそんなことを考へるひまを持つてゐなかつたのですよ――昨夜、友達と痛飲して、今日ブラリ社へ出て來たので――」

彼の言葉には、暗い、女々しいひゞきがまつはりついてゐた。

――何といふ馬鹿ものなのだらう！

と、篤夫の目が笑つた。

「君は年甲斐もない男だと冷笑するでせう――然し、山名といふ奴は――」

「まあ、そんなことはやめませう。」

と、篤夫は急に遮つた。

「ねえ、そんなことはやめて、もう一度考へて見ようではありませんか？」

多野は呟いた――力なく、恥ぢに充たされて呟いた。

「考へて見るといつて――？――」

「何しろ、こんな沈滯した經濟狀態の時勢です。人手をさう方々で要してゐるとも思はれません――ですから、何も好んで長くゐたところを退くにも及ばないではありませんか――」

「しかし――」

「いゝえ。まだ最後の通牒が發せられたといふわけではないのです。」

と、篤夫は微笑して見せて、

「手腕家や氣骨家の間には、いつも多少の風雲は捲き起こされ勝ちだと思ひます。どんなに仲のいゝ友人でも、時々は腕力にも訴へますからね――山名さんだつて――いゝえ、まあ聞いてゐて下さい

――何もそんなに腹の薄い人でもありますまいし、あなたは立派な紳士なのです。男同志だから、笑つて手を握る氣になつても不自然ではないと思ひますが――また、かりに萬々一、あなたがどこまでも山名さんと同じ部屋にゐるのがいやだとすれば、その時にはその時で、あの社に止まつてゐても、やり方があるでせう。」

多野はブル〳〵と細かく震へる指で、竹のパイプで紙卷を吸ひつづけてゐた。彼はぎつと耳をすましたまま默り込んだ。

――この男の頭の中には、大久保のはづれあたりの、狹いみじめな借家と、蒼ざめた醜い妻と、ウロ〳〵した五人の子供たちの外何も寫つてゐやしない。

と、篤夫は憫笑した。

――身の程知らずな奴がどんなことになつたところで、ちつとも惻隱の情なんぞ起こりはしないが、まあ、どんな屑糸でも拾つて置けばいつか役に立つさ。

「僕はさう思ふのです――ことによつて直接僕の口から社長に話して見ようかと――差し出たことですが、僕がこんな無力な青年にすぎないのが却てこんな場合には便利だとも思はれますから――どうぞお氣にかけずに下さい。しかし、あんまり思ひ切りがよすぎるやうに考へられてならんのです。」

多野はモガ〳〵と口を歪めて、

「君のやうな年下の人に、そんな風にいつて貰ふと、僕は汗顏だが――しかし、實際、僕も繫累が多いから――」

「社長はあなたを信任してゐるに相違ないのです。」

「僕も外の人の前では、こんなことはいはない――しかし、君がそこまでいつてくれるからだが、あんなことがあつたと知つても、社長はまだ僕を容れてくれると思ひますかね？」

先程の荒鷲は、今や全く翼を傷つけられて、痛心と屈辱との底に喘いだ。

「もちろんだと思ひますよ。何も編輯部にばかり人が要るわけではなし――現に祕書課にも人手が足りないのですから――」

「僕としても、山名の側でなくていゝなら――」

「では、早速今夕にも社長に話して見ませう――」

「ウム、君は社長の信任者だから、君がいつてくれゝばどうにかなるかも知れません。」

と、多野は見得も張もなくいつた。

――十分ばかりして、打ひしやがれた多野と別れると、篤夫はすぐに雜誌社へ取つて返して、山名を喫煙室に呼び出した。

「やあ、御苦勞さま。」

と、山名は苦笑した。
篤夫は笑つて、
「やつと送り歸しましたが――そこでちよいと御相談があるのですがね？」
「ふん。」
と、山名はパイプの灰を叩いた。
篤夫はおもひやり深かげに――
「何しろ、御承知のとほり隨分たつきに追はれてゐるあの人です。今日の所は見逃して、あの人から衣食を奪ふことだけは許してやつていたゞきたいのですけど――」
「僕だつて、そんなことは好まんさ。」
――篤夫は山名が山名自身のためにも多野を放逐することを好んではゐないのを察知してゐた。榮轉早々、古い同僚に背かれたといふことが、社外にまでバツとすれば、上級者としてあまり顏がよくなるといふわけにもゆかないのだ――山名もまた、自分の身近かなところに不愉快な顏を見ずにすむなら、多野を社内に置くことを拒む筈がなかつた。
「そこで、あの人も大分後悔してゐるやうですから、祕書課なり、庶務課なりであの人をもう當分のあひだ見て上げるやうにしたいと思ふのです。」

篤夫の言葉はさも自分が幹部の一人でもあるらしくひゞいた。しかし今の場合、敏感な山名もそれをとがめ立てする顏いろは表はさなかつた。
「君から社長の方へ話し込むといふのかね？」
「えゝ。たゞ、社長があなたに意見を求めるでせうから、その時話を合はせてさへ下されば――」
「よし、承知した。」
――この事件は、結局篤夫一人を儲け役にしたにすぎなかつた。彼の心の底をいくらか讀んでゐるのは山名ぐらゐのもので、そのほかの人達は、擧つて若いに似氣ない氣性だと讃美した。心中には不平で、表面は無關心をよそほつたのは、多野となぐり合ひを演じた青年記者一人にすぎなかつた。

政治家の娘

いつしか、すつかり冬らしくなつて來た。篤夫には、公人としても私人としても匆忙な日がつゞいた。そしてそのいそがしさの中で、彼は自分を取卷く女たちに、だん〳〵退屈を感じた。はつ子はだん〳〵からみついて來て、行末の重荷を豫告してゐるし、ふぢ子の我儘な、照るか曇るかその時まかせのやうな機嫌を、十分に取り結ぶのもかなり骨が折れた。一ばん樂なのはその癖思ひ切つて近づき難いのは木村の未亡人だけだつた、彼は照子にはあふたびに不思議な誘惑を感じたが、それでゐて窮屈な埒のやうなものが二人の間にはさまれてゐるのを、強ひて乘り越すだけの勇氣は持てなかつた。思ひ切つた態度に出て、思ひがけない反撥を一度うけたら、そのためにこれまでの生活の率といふやうなものが、ガラリと變つてしまひはせぬかと危まれた。

——こんなことでは駄目だぞ。

と、彼は自分を笑つたあとで、しかし辯解した。

——だが、あの女は相當な女だ。かいなでにそこら中にころがつてゐる體でもなければ心でもない。ナポレオンだつて、最大な敵をば大事にしたものだ。軍師は輕はづみにはせぬものだ。

で、ひどく好きなお菓子やおもちやを、子供たちが最後の樂しみに取つて置くやうに、彼は照子にはなか〳〵近づかうとはしなかつた。然しその照子へ小さな金談を持ち込んだのは一歩だけ近づいて置くためだつた。

——ある日曜日、このごろいつの間にか三日目か五日目になり、やがて一週間目位になつたふぢ子への討問を果すために、午後から吹き出した風を襟を立てた黑外套に避けて出かけた。

ふぢ子は女ともだちと居間の電氣ストオブの側で紅茶を飲みながらカード遊びをしてゐた。

彼女は待ち兼たといふやうな、あこがれに輝やく瞳をあげて迎へた。そして札を捨てた。

「まあ、たうとういらしつたわね？　今日もどうかと思つてゐたんですけど——」

しほらしく、惱ましくさへ見える顏だつた。いつか彼女は彼に對して素直な、弱々しい娘になつてゐる方が相手を喜ばせることが出來ると知つたのだつた。

「おゝ、星子さんもゐらつしやいますね」

篤夫はふぢ子へ輕い會釋をすると、ゐあはせた令孃の方へお辭儀をした。

長田星子は綠いろのフロツク型の乘馬服のボタンをすつかりしめて赤靴のゲートルをつけてゐた。

新らしく手に入れたといつかいつてゐた御自慢の馬でやつて來てゐるに相違なかつた。大層細そりと、しかし活々しく見えた。

「ええ、お馬をお見せびらかしに――」

と、ふぢ子がかたはらから答へた。

「お父さまもこのごろはひどくおいそがしいでせう？」

と、篤夫は星子にいつた。

「有難う――何だかこのごろは一日顏を見ない日が多い位ですのよ。」

星子の父親は、古川氏にも先輩に當たつてゐたが、長く野に眠つてゐた政治家だつた。實業家出身で金がうんとある上に、なか〳〵野心家で、とうから機をねらつてゐたのだつた。それが、政治季節を前にひかへて、民主系の大同團結を企てゝ、新政黨組織の夢想を實現せしめようと奮起しつゝあつた。

篤夫は議會政治になぞはとうに興味を失つてゐたけれども、彼自身のよりよき生活を實現するためには、應變の手段をえらむに躊躇はしなかつた。で、古川氏が長田氏の方へ參じる以上、彼もまた雜誌社の仕事なぞは放擲して、もつと世間に直接な世界へ乘り出さうともくろんでゐるのである。

で、當然、今日の彼は、ふぢ子に對するよりも、その友だちの方へ愛想深からざるを得なかつた。

「僕も精養軒の晩餐會でお目にかゝりましたが、大層御健康のやうで結構です。」

「まあ、では、父におあひになりまして？」

と、星子は目をかゞやかした。たつた一人の兄が外交官としてロンドンの方へ行つてゐる間、自分だけで父母の愛を專有してゐる星子は、ひどく父親自慢であつた。

「ええ、兩三度――お父さまが社長をおたづねになるたびに、お目にだけはかゝつてをります。」

「父のことを、つまらない世間の噂を信じてつけねらつてゐる反動團體なんぞがあるんですつて――あたし、心配ですわ。」

と、星子は急に何か思ひ出したやうに瞳から光りを消して呟いた。

篤夫は微笑した。明るく、男らしく笑つた。

「大丈夫ですよ。周圍に澤山人がゐますし――だが、僕でもお側にゐれば、五人や七人の暴漢なんぞは物のかずでもないのですがねえ――」

「ほんたうに――」

と、星子はたのしげに笑つた。處女の心はたちまちどうにも動き易かつた。

「ほんたうに、あなたのやうな方が父の保護をして下すつたら、みんなが安心するのですけど――！」

「はあ、僕がね――そんなに僕が英雄に見えますかね？」

と、篤夫もたのしげだつた。

「でも、あなたはスポーツは何でもなさるし。」
「成る程ね――では、あなたからお父さまに御推薦下さい。僕がおつき添ひしてゐれば、どんな場合でもあなたが安心出來るといつて――」
篤夫はいかなる機會をものがさぬ青年だつた。
星子は、本氣になつて呟くのだつた。
「ほんたうだわ。あなたが側にゐて下されば――今まで引込んでゐた時の父とは違ふんですもの、母もあたしも隨分心配してゐるんですのよ。今でも多勢ついてゐてはくれるのですがしんみの人はゐないのですもの――いのち懸けでつくしてくれると云ふ安心出來る方はちつともゐないんですもの――」
さも、ませた物言ひで、この十九娘はうなづくのだつた。
――この會話の間に、ふぢ子はあり〳〵と憂鬱にとざされたやうに見えた。彼女は大人しくふりの長いお召の袖を膝に重ねて、うつむいて、ぢつとストオヴの炎に見入つてゐた。
彼女は屈辱さへも感じてゐるに相違なかつた。彼女と星子とはどんな場合にも打明け合ひ許し合ふ友人だつたが父親同志はそこまで平等な世界には栖んでゐなかつた。で二人の話を聞いてゐるうちにも、彼女は取越苦勞をはじめずにはゐられなかつた。もし星子が、この話を本氣にうけて、父親に申

しいでたならば、長田氏は愛嬢のいふことだから、すぐにも取り上げて、いふまゝに篤夫を自分の側に招きよせようとするであらう――そして、あの青年を自分の方へくれろとたのまれゝば彼女の父親はそれをこばめない位置にあるのだつた。
――その容子に篤夫はいつもの敏感さで氣がついてゐたかどうかは知らぬもし恒々ならばかうしてふさぎ込んだありさまを眺めれば、何とかいひなぐさめてくれるはずなのに、今日に限つて、彼はあまり彼女の方へは注意を拂はなかつた。
「大そう乘馬服がよくお似合ですね。」
と、突然ほれ〳〵と彼は星子にいひかけてゐた。
――あゝ、この方は、いつもみんなにあまりお世辭がよすぎるわ。
と、かたはらでふぢ子は自分に呟くのだつた。

ハンケチ

ふぢ子の小さな胸を暗く惱ましく鬱いだ嫉みについては、篤夫は彼女の呪はしげな伏目を見ないでもよく知り拔いてゐた。もしこれがもう二十日も前であれば、どのやうに熱心にどのやうに巧をつくして、御機嫌を取り直すべく力めたことであらう――しかし、今は形勢が一變してゐた。敏銳　戰術家の信條はまた彼の方針でもあつた。巧に計るものは刻々の情勢に順應して方略を定めねばならぬ――ことに奇兵を弄して勝ちを取らねばならぬ分際にある場合には――

篤夫は自分の境涯と位置とを一刻も忘れることが出來なかつた。彼はある場合には人情や禮儀や道德に氣兼をすることの出來る自分ではないことをよく知つてゐた。さうしたものにかかづらふことの出來る人間は、かなり惠まれた生活を持つものでなければならぬ。何等の背景も、學閥も、資產もない自分が、なまじ、さうした常識にわずらはされて事を行つたならば、それは明日の發展はおろか、現在かうしてゐるやうに、見るかげもない萎縮の醜態を見せてしまふ原因となるに違ひないといまし

めてゐるのであつた。

で、彼はいかなるふぢ子の嫉視にもかかはらず、カフエ碗に匙を入れてかきまぜながら、もう一度星子をほめることを忘れなかつた。彼は午後の晴た光りが一ぱいに漲つてゐる窓を背にして、紅革の肱椅子に坐つた星子を、さもまぶしさうに眺めながら、うつとりと繰返すのだつた。

「ほんとに、すんなりとしてゐらつしやるから、乘馬服がよくお似合です――で、馬はよほどお乘れになりますか？」

「いゝえ、駄目よ。」

と、星子は笑つた。

「やつと速歩があがつたばかりなのよ。今日はじめて門の外へ出て見たんですわ。うちの裏庭ばかりぢやあつまらないから――でも、ふぢ子さんのところとうちでは、たつた五町しか離れてゐないんですもの。赤んぼさんだつて乘り着けられてよ。でも、怖かつたわ。自動車とすれ違ふときなんかは――ねえ、ふぢ子さん、こちらへうかゞつたばかりには、びつしより汗をかいてゐたわねえ？」

ふぢ子は口では答へずに、申わけばかりにうなづいて見せた。

「ふぢ子さんもはじめたらいいでせう。」

と、篤夫はやつと彼女の方へ話しかけた。

「あなたは運動ずきだからすぐ上手になりますよ。」
「そして、あなたも――」
と、星子は篤夫との會話にいつまで立つても飽かなかつた。
「あなたもまだお習ひならないならおはじめなさいよ。三人で遠乘したらどんなに樂いでせう。」
篤夫は肩をすくめるやうにして、わざとらしく微笑を見せた。
「僕が？」
と、彼は吐息をして、
「僕がみなさんと一緒に、馬を習つて、馬を持つて、遠乘をした方がいゝとおつしやるのですか――ねえ、星子さん。」
と、彼はあからさまに、胸の底まで開けて見せるといつたやうに、親身に呼びかけて、
「僕は貧しさや孤獨をちつとも悲しみはしないのです。僕は貧しさや孤獨にどこまでも堪へて、一歩一歩明るい大きな世界に踏み出すことが本領だと思つてゐるのですが、こんな美しい晴た日に、あなたのやうな方から、今のやうな無心な言葉を伺ふと、何となく胸が引しめられるやうな氣がするのですよ。不思議な苦痛に襲はれるのですよ。僕は生れてから、富豪權門の令息たちを羨んだことはありませんが、今はじめて、妙なねたみが心に湧いたやうな氣がします。」

――星子は途方にくれたやうに、懇願するやうな目で篤夫をみつめながら、
「まあ――氣になさらないでネ――私ほんたうに無考へなことをいつてしまつたかも知れませんの――」
と、いひかけて、悲しげに目を伏せて、
「でも――私、たゞ樂いことや嬉しいことは、あなたと一緒にしたいと思つたものですから――」
篤夫は自分の言葉が、すぐに微妙な反應を見せたのに滿足した。
「いゝえ、それは僕だつてよく知つてゐます。たゞ、時々、かうして親くして頂いてゐながら、あなた方と僕との間に、何千里も廣いへだゝりがあることに氣がつくと憂鬱になるのです。それもあなた方が、あんまり美しくつてお柔しいからでせう――」
「そんなことがどうしてあるでせう――ねえ、ふぢ子さん。」
と、星子は熱心に、
「私は馬鹿な娘ですの――世の中のことは何ひとつ知つてはをりませんわ。でも、あなたのやうな方が、歎息なすつたり謙遜なすつたりする必要はちつともないといふことだけは知つてゐますわ。あなたの前にはへだたりなぞといふものは決してあるはずがありませんもの――それどころか、もうぢき、私達は遠くからあなたが高いところにゐらつしやるのを仰いで見るやうに、きつと、なりましてよ。

ねえ、さうなつても、あなたは私たちをおさげすみにはならないわねえ――」

娘たちに自分の崇拜する男たちに限つて、どんな困難をも一躍して乘り越す英雄のやうに信じるだらう――そして、彼女が彼を一時的に愛したゞけなら、彼がその飛躍に失敗して傷ついた時、ソツと吐息をして目をそむけて立ち去るだらうし、もつと愛してゐたら、その失敗をさへ氣高いものに感じて、倒れた軀を抱き起こして流血を美しい脣で拭ひ取るだらう――

篤夫は星子のロマンチシズムと、そして同時に、大人らしい賢げな言葉づかひを面白いものに思つた。

この娘は、ふぢ子にくらべるとずつとすばらしい。感情的で、そしてこの年でもう男を有頂天にならせる言葉を知つてゐる。

「星子さん、あなたの勵ましの言葉は一生忘れませんよ。」

と、彼はいつた。

ふぢ子はぢつとしてゐるに堪へかねて來たやうに、窓のところへ行つて外を見た。篤夫は彼女の白い頸筋が、少し短すぎ、肩がめつきり圓味を持ちすぎて來たことを發見した。全くこれまで氣がつかないことであつた。

――もう、この娘との交渉もだんだん疎くなつていゝころだ。いろ〳〵な缺點が目につき出して見

れば――それを、無理に忘れて見たところで、この娘にも僕にも幸福ではないのだ。

――星子ははじめてふぢ子があまり默り込みすぎてゐるのに氣がついたやうであつた。

「ふぢ子さん、あなた、どうなすつて？　何だかふさぎ込んじやつたのね！」

と、話しかけた。

「どう？　お庭へ出していたゞいて、久しぶりでテニスでもしませうか？」

「えゝ、でも何だか頭が痛いのよ。」

彼女は振返らずに答へた。

さういへば、彼女が篤夫を相手にラケツトを握らないのもゝう長いことだつた。あんなに無邪氣に球を打ち合ふことを好んだ彼女は、いつとなく二人であへば二人切りで部屋に閉ぢこもるやうになつた。

「さう、いけないわねえ。」

と、星子はいつてゐた――

「でも、少し運動すると頭痛なんか快つてしまつてよ。」

「あなた方がやりたければ、お二人でおやりなさいな。私、拜見してゐるわ。」

「さうですね、あんまり部屋にゐるのも却ていけないね。」

と、篤夫は星子の意向に添ふべくいつた。
「兎に角庭へ出て見ませうか。風がすつかり凪いで、いゝ夕方になりました。」
ふぢ子も、それでもともいへなかつた。彼女は無元氣に二人を裏庭に導いた。
星子と篤夫はコオトへ出た。ふぢ子は和服だし、頭が痛むしといつて、ベンチに坐つてゐた。
少し球を打ち合ふと、この初冬の午後でも、日當たりがいいので、若い人たちはすぐに汗ばむ程になつて來た。ネツトの側で顏を見合せて、星子は笑つた。
「まあ、細田さん、眞赤にお成りになつて——そして汗だらけだわ。」
「ハンケチを上衣に置いて來たから——」
「私のでよくつて——一度もつかはないのよ——」
星子は、心安立てから、淡青い緣繡ひをしたハンケチを篤夫に渡した。
篤夫は頭を下げて、ちよいと鼻に當てるやうにして、汗はふかずにそのまゝヅボンのかくしに入れた。
ほのかなヘリオトローブがあたりに匂つた。
——さうした二人を、見てゐるのかゐないのか、ベンチのふぢ子は足元へ來たフオツクステリヤの、可愛らしい頭を白い手で撫でてあやしてゐた。

——いよ〳〵、暮易い日が暮かかると、篤夫は二人の娘たちに別れを告げた。
「ええ——御馳走になつて行きたいのですが、どうしても行かなければならぬ先約があるものですから——大森までネ——木村のおくさんにおあひしなければならないのです。御主人がゐなくなつてから、いろ〳〵女手ではいかない仕事もあるものですから——」
そんな申譯をして、彼はふぢ子の部屋を出た。
ふぢ子だけが、階下まで見送つて來た。彼女は玄關に近いところまで來ると、今までの沈鬱を思ひ切つて乘り越して、すれ〳〵に肩を寄せて囁やいた。
「私、お話があるのよ。明晩たづねて下さいな。」
「ええ、まゐります。」
「きつとよ。」
「ええ。」
——外はたそがれの暮明を、ふた〻び冷たい風が吹きみだしはじめてゐた。篤夫は外套のかくしに兩手を突込んで停留場の方へいそいだ。

艶笑

——今夜、木村家を訪ねるといふことは、事實照子へ前以つて告げ知らせてあつた。で、篤夫はその家の玄關へ立つと、すぐに小間使によつて歡迎された。

「ようこそ。」

と、まだ十七になるかならないかで見るたびに赤い紐の見える腰のあたりが大人びて行く娘は、ポツと頰を染めるやうにしていつた。

「おくさまは昨日から風邪をお引あそばしてゐらつしやいますの。で、失禮ですけれどおやすみになつてゐるお部屋でよろしければとおつしやいますが——」

「ええ。結構です。」

小間使は白い足袋の裏を見せて先きに立つて、階下の一番奥の、洋館から突き出した離室の和室に篤夫を導くのだつた。

篤夫の來訪が、廊下に膝を突いた娘によつて告げられると、障子の中から例の甘たるさに充ちた聲が、いくらか咽喉を惡くしてゐると見えて少しかすれてきこえた。

「取りみだしてゐるのよ。でも、どうぞ——」

小間使は障子を開けて、篤夫を中にはいらせた。

裾の方へ、土佐派めかしい青綠と朱との大分くすんだ屏風をめぐらして、ふつくらした友禪模樣の夜具を折り返して、あづき色の勝つたお召じまのどてらを寢卷の上から羽織つた照子は、蒲團の上に坐つてゐた。枕元には雜誌や茶道具なぞがちらばつてゐたが、藥壜は見えなかつた。

「熱臭いかも知れないわ。勘忍して下さいね。」

と、彼女は、まるで白粉氣のない、しかし來客に氣づいて化粧皮で取あへず拭いたばかりのやうな、美くしい頰で笑みかたむけたが、キラ〳〵と不思議な輝きをたゝへてゐる眼の下あたりには、思ひなしか病人らしい環がうよ黑くはいつてゐた。

とはいへ、熱臭くはなかつた。あべこべに立てこめてある部屋の中は、不意にはいつた人を眩暈させるほどに甘い香料の匂ひがムウとしてゐた。

「風邪？」

「ええ。」

「お氣をつけなさらなければ――おやすみになつてゐて下さい。」

――篤夫はいつになく、小さくかしこまつて坐つてゐた。彼がつゝしんでゐるにはわけがあつた。このひとだけは、いざといふ準備に最後までなるべく近づかないでゐようと考へてゐた彼だつたが、最近、いろ〳〵な失費がカサんで、ちよいと收拾に困つたので、何ほどかのものを彼女に手紙で頼んだのだつた――もちろん大金ではない――それは、いはゞ瀬踏みだつた。人間の氣持は、いふまでもなく物質で換算出來るとはいへないだらう――しかし、ある場合には、物質的好意が感情の濃度を示すことにならぬとも限らぬのである――

「いゝえ、もう大丈夫よ。ほんの二三日つむりが痛んだだけなの――でも、あなたも隨分お見限りねえ。ちつともいらしつて下さらないぢやないの？」

「ええ――でも、あんまり伺ふのもと思つたものですから――」

照子は笑つた。

「こないだもネ、同じ年ごろの未亡人さんがたづねて來てくれたのよ。そして、若い未亡人さんは不仕合せだつて――みなさんが何か遠慮してゐると見えて、だん〳〵足が遠のいてしまふつて――しかし、あなたは別なはずだわ。あなただけは――」

篤夫はうつむくやうにして答へなかつた。

「御手紙拜見したわよ。用意して置いたわ。」

と、突然照子は氣輕にいひ出した。

「あんなに遠慮深くお書きにならないでもいゝことよ――何でもないことですもの――用意して置いたから、歸りに持つていらつしやい。」

篤夫は膝に手を置いて、きちんと禮をいつて、

「――僕もいろ〳〵困つたものですから――ほかにこんなお願ひをするところもありませんし――」

「もう、そのことは止めて頂戴。何だか話がややこしくなるから――」

と、照子はおさへて、

「そのかはり、私の方でもお願ひがあるのよ。肯いてくれて？」

篤夫は見上げた。

照子は細長い眉を、苦笑ひでひそめるやうにして、

「肯いてくれるわね。憎まれ役よ。」

――そして何かいひつがうとするところへ、小間使が茶をはこんで來たので、そのまま口をつぐむ。

それが去ると、篤夫はたづねた。

「お頼みとは？　どんなことでも――」

「實は、ね。」
と、照子は聲をひそめるやうにして、
「ちよいと、家の中で持てあましものが出來ちやつたのよ。」
「お宅の中で――」
「ええ。」
と、照子はまた苦笑して、
「御存知の阪田ねえ――あの男がこのごろすつかり妙になつてしまつたのですもの。」
と、彼女は話し出した。
阪田といふのは、木村がぐつと古くから世話をして、神田の方のある私立大學に入れて置いた書生だつた。あれが一種の木村ごのみといふのかも知れぬが、すこぶる男らしい、巖丈な恰幅で、さだめし快活な、明るい性分かと一目で思はせるやうな青年でゐながら、妙に物を伏目で見るやうな、ハキハキ口の利けない、無口で、どこか目にけだもの染みた光りのある、主人が亡くなつた當座なぞは、女々しい涙を人前でも恥ないやうなたちの人間だつた。
照子にいはせると、その青年が、このごろはあまり學校へも行かず、たえず部屋に引込んで、メソメソとしてゐるかと思ふと、もう大分遲い夜更けになつて、

「おくさん、どうぞ先生の大きなお寫眞をおがませて下さい。」
なぞと、そんなことをいつて、夫人の居間に涙だらけの顏ではいつて來て坐り込んでしまふやうなことがたびかさなつて來た。
「あたし、ほんたうに薄氣味がわるいのよ。前々から、何だか氣でもオカしいのぢやないかと、何度も木村にさういつたことがあるのですけど、あの人はあたしが好きなものは嫌ひだといふし、いやだといへばあれがいゝのだとダダをこねるのが癖なので、いや、あいつは見どころがあるなんてきかなかつたんです。でも、もう辛抱が出來なくなりましたの――で、まあ何とか口實をつけて、出て行つて貰ひたいのですけれど――」
そんな風に、彼女はいつた。
篤夫も苦笑で聽いてゐた。彼にはあのいかつい、みにくい青年の、ゴツ〳〵な胸の中にいつとなく湧き出した、穢らはしい妄念について、もはや十分にのみ込める氣がした。
――ちつとも怪しむに足りない現象なのだ。たゞ、阪田のやつは見苦しすぎるからだ。もう少し見場のいい顏でもしてゐれば、何も六かしいことはないのだが――
夫人の顏を、彼は皮肉に見返したが、しかし、自分でさへ、まだわざと遠ざかつてゐるこのひとを、そんな風な目で眺めてゐる青年があるのを聞くと、わがほとけを穢されたやうな氣がするのであつた。

ことさら相手が、阪田のやうな人間と來ては――

彼はイラ〳〵して。

「ちつとも遠慮はないぢやあありませんか。あの男をこの家から出すことは今はあなたの自由なのですもの。」

「ところが、あたし、こはいの。」

と、夫人は笑つて、肩をすくめた。

「それは氣違ひじみてゐるんですもの。」

篤夫はあからさまに笑ひ返して、

「みんなあなたがお美くしすぎるから――」

と、快活にたはむれた。

「で、非常にあの人には氣の毒な氣もします。」

「もう脅すのはよして頂戴。」

と、夫人は手を振るやうにして、

「あんな人はほんたうに何をしだすか知れませんわ。何氣なく夕方庭なんかあるいてゐると、えり筋がゾツとすることがあるから、振返つて見ると、あの人が遠くの窓から眞ツ青な顏をしてジツとみつ

めてゐたりするのですもの――氣味が惡くつて――」

篤夫には、阪田が妄念のとりことならなくてはゐられなかつたやうに、この突然孤獨と無聊との中に陷つた美女の胸にも、おのづと異性に對する病的な感覺が湧きはじめてゐることを推量した。彼には何もかもが自然に思はれた。そして往々、こんな場合に、世にもたぐひない女性が、世にも嗤ふべき下品な男の手に落ちることもあるのであつた。篤夫でさへも、さうしたことを想像すると淺ましくなつた。

「ようございます。何とか話をしませう。」

と、彼は請合つた。

「どうぞ。」

と、照子はホツトしたやうにいつた。そして、ちよいと間を置いて、

「それにしても、さうなつて見ると、もうひとつ困ることがあるのよ。この土地は何しろこんな淋しいところでせう。いくらだんだん家がたてこむやうでも、後の方なんぞは、まだあんな畑なのですもの――まるで男氣なしになると、今度は不用心で仕方がないと思ふわ。現在、この月にはいつてからも、近所の會社の方のところへ、二軒も强盜がはいつて、一軒なんか、かくしてゐらつしやるけど、おくさんがひどい目にあつて、自殺をしかけて大騒ぎがあつたのですもの――それで、あたしいろい

ろ考へたんですけど、もしねえ――」
と、いひかけて、ちよいと伏目をして、お召のどてらの膝で反らせた、白い指をみつめるやうにして、
「もしねえ、あなたの御都合が何とかついたら、當分だけでもよろしいから泊つてゐていたゞけまいかと――」
――これは、篤夫の全く豫期以外のことであつた。
――何と、すべてのことが駈足で進むのだらう！　自分の方から進み入らうとしない扉は、むかうから遂に開いて來た！
「ねえ、あんまりわがままだとは思ふのよ。あなたにもいろ〳〵御都合もあらうし――」
篤夫はすぐには答へなかつた。
「駄目でせうか？」
と、照子は押して來た。
篤夫はぢつと見た。
「それは、木村さんからもあなたからも、いふにいへぬ御恩になつてゐるのですから、どんなことでもいたしますが、何しろこんな我ままものですから――」

「我ままなら木村で馴れてゐてよ――どんな我ままでもおつしやい。」
と、照子は出來るだけ話を樂にしようとつとめるやうに笑つた。
「それまでおつしやるなら、すぐにも思召しに從ふやうにしませう。」
と、彼はうけ合つた。
「でも、御社へお通ひになるのに少し遠いわねえ。」
「そんなことは何でもありません。」
と、いつて、篤夫も笑つた。
「しかし、今度は僕が遠くからあなたの後姿を、ぢつと〳〵見つめてゐることになるかも知れませんよ。」
思ひ切つたたはむれだつた。しかし、彼は相手がそれをいかるはずがないのを知つてゐた。
案の定、照子は熱つぽい目に、限りない艶やかさをたゝへて笑返した。
「どうぞ――あなたならちつともこはかないわ、いくらでも見て頂戴。」
――彼女は、彼に今夜の中にも、阪田に宣告をあたへて貰ひたい、そしてあとが氣味が悪いから、ずつと泊り込んでゐて貰ひたいと望んだ。篤夫は今日ふぢ子と明日の訪問を約束したことを思ひ出した。そして、せめて明後日まで一切をのばしてくれるやうに頼んだ。そこで話はついた。

――更けて、篤夫は、星子から貰つたかをりの淡いハンケチに、照子夫人から受けた札束を包んで、心も輕く都會へと歸るのであつた。

――篤夫と照子とがそんな話をしてゐたころ、星子の家では、たまに娘の相手を命じられた父親が、娘からの付人として、篤夫を祕書に採用するやうにセガまれてゐた。星子にいはせれば篤夫はいかなる才能をもいかなる武勇をも一人で兼ね合せた傳說的青年で、大政治家の介添ひとして、この世に二人とないほどの人物だつたのである――で、たうとう、明夜、この邸で會見して見ようといふ口約束をムリ〳〵させたのであつた。

二人の娘

――翌日、雜誌社が大分いそがしいので、冬の日がもうとつぷり暮れ果てゝしまふころまで働いてゐた篤夫は、ふぢ子との約束があるので歸りみちに訪ねようと、そろ〳〵歸り支度をしてゐたが、そこへ電話がかゝつて來た。

電話は思ひがけなく、昨日古川家で逢つた星子からだつた。篤夫は、ほがらかな、美くしい聲を聞いた時、上衣の內がくしに入れてある、うす甘い香料のしみたハンケチを思ひ出した。

星子はいそ〳〵といつてゐた――

「――昨日お約束しましたわね。父と最近逢つて下さいましつて――で、父に話しましたのよ。さうすると、今晩なら都合がいいんですつて――今晩なら――ね、だからこれからすぐにいらしつてネ。もうお社が退けてゐたらホテルの方へ自動車で迎ひに上らうと考へてゐましたのよ。晩餐をあがりながらいらしつてネ。父も待つてゐますわ。」

篤夫はふぢ子との約束を忘れねばならなかつた。長田氏に愛嬢の取りなしで親密になれるといふことは彼の前途に大きな意義を持つべきものだつた。

咄嗟に思案をきめて、彼はこゝろよく答へた。

「それは恐れ入ります。すぐこれから伺ひます。お父さまによろしく申し上げて下さい。」

――篤夫は人ごみの電車の車掌臺に兩手を厚外套のかくしに突込みながらたゝずんで、そして心の中に二人の娘について思ひくらべてゐるのだつた。どつちも溫室で養はれた、上品な、豐な花だつた。寒い、荒々しい人生の風を受けぬだけに、和らかな、たわ〳〵とした花だつた。二人の美くしさのいづれを取るべきか、しかしそれに甲乙をつけようとするのは愚なことだつた。甲乙ないものとしたらより新らしいより珍しい、そして背景がより自分に便利な方をえらめばよい――

彼はもう雜誌社の仕事にはあまり希望をつながなかつた。雜誌記者としてどれほど働いたとて、その生活に對する進度は遲々たるものであるに相違なかつた。

――そも〳〵、僕が、文筆に志を抱くか。それとも古風な木鐸趣味で終始しようとする人間ならば兎に角、僕が求めるのはもつと現實的な欲望の世界なんだ。ひとつの職業にこだはる位なら、一人の女にこだはることが出來るわけだ。僕はまだ生活についても女についても、何の複雜な經驗もありはしない。展ける前途にどし〳〵踏み入る外はないではないか？

そのやうに考へて、彼は今夜ふぢ子に對する約束を放棄して、新らしい星子の方へ近づいてゆく自分の態度を合理化して見た。ふぢ子も、ふぢ子の父親の古川氏も捨たものではない――だが、長田氏は古川氏の親分であるとしたら、その方へつくのが便宜だ。いつも直系は傍系に勝る――現前するものを、現前して心をひくものをつかむんだ――木村哲三が彼の心に注ぎ込んだ、魅力ある觀念は、この恐れ氣のない青年の胸にいつまでも生き殘つてゐた。肉食獸は自分が他に食はれるまで他を食らふであらう！

星子の屋敷は、古めかしい、大きな黑い長屋立ての門を持つた、素晴らしく長い練塀が、どこまでもつゞいてゐるやうな、小大名の下屋敷でもあつたらうと思はれる構へだつた。その構へ中には、うしろの方にはこんもりした森さへ、冷たい星のまた〳〵く夕空に聳えてゐた。

いかめしげに鋲を打つた門扉はぴたりと閉されてゐた。篤夫は重たいくぐり戸を押してはいつた。突き當たりに昔風な大玄關を持つ、破風づくりの館――その右手奥には眞黑な本邸にあまりにそぐはぬ對照を示して、眞新らしい木造洋館が瀟洒に、しかしひどく明るい窓々を輝かして立つてゐた。大玄關の受付書生は武張つた小倉袴の膝を突いて、九州なまりで敎へた。

「お嬢さまの御用筋なら、洋館の方へおたづねなさい。」

洋館の入口のベルにこたへて出て來たのは愛想のいゝ中年の女中だつた。彼女はすぐに導き上げた。

「お嬢様お待ち遠しがつてゐらつしやいます――さあ、どうぞお通りあそばせ。」

階下の、かなり奥まつた、内輪の客間らしい一間には、フランス近代派の風景畫と貴女像とが、かなり大きな鈍金色の額ぶちの中にあざやかな色彩を見せ、宗達風の花鳥の大衝立のむかうには、大ピアノがかがやいてゐた。絨壇は落着いた濃赤色で、椅子はすべて金糸のはいつた白茶で張られてゐた。

――室内は、この洋館の外見よりぐつと古風な華麗さを見せてゐた。

「いらつしやい――でも、突然なのによくお出でが願へましたわね！」

黒く光る絹毛織の家庭着が大へん似合つて見える星子は、いつもよりぐつと大人びて、いかにもこの部屋の女あるじらしく迎へた。

「お掛なさいね、ゆつくりしてゐらつしやいね――もうぢき父を呼んでまゐりますわ。」

少しばかりありふれた話がつゞいたあとで、星子は伏目に仰ぐやうにした。

「それにしても――ふぢ子さんへお電話をしなくつてようございますかしら――あなたがおいでになつてゐるから、お遊びにいらつしやいつて？」

篤夫はわざと不思議さうにいつた。

「僕が伺つてゐるから？　いゝえ、それには及びますまい――夕方ですし――かへつてふぢ子さんが迷惑なさると、いけません。」

「でも――」

と、星子は篤夫を眺めた。

「あなたがいらつしてゐるのに――あなたと二人だけでお目にかゝつては、ふぢ子さんに悪いやうな氣がしますわ――あとで判つて、あたし、叱られるかも知れませんもの――」

「どうしてでせう？」

「でも――」

と、星子は目元で微笑した。

「でも、あたし達の仲間では、あなたはあの方と御結婚なさるだらうといふ噂さへしてゐるんですもの――」

「つまらないことを――」

と、篤夫はわざとらしく生眞面目な容子を作つて、

「そんなつまらないことは、あの方の御迷惑になります。僕たちが、どうして――望んだとて及ばないことですし、また望みもしません。」

彼は謙遜らしい言葉を、一種の誇りさへ見せたいかつさでいつた。

「まあ、では噂だけなんですの？　でも、結局は――」

「いゝえ、絶對に――」
篤夫は誓ふやうにいつた。なぜならその方が現在目の前にゐる美少女の歡心を買ふに都合よく思はれたから――
果して、星子の瞳はあり〳〵と新らしいきらめかしさで燃えるのだつた。
「ほ、ほ、まあそんなに否定なさらなくつてもいゝことよ。あとで申し開きの立たないことになるかも知れないもの――」
「それならいひませうね。」
と、篤夫はぢつと星子をみつめて、
「そんなことまで申し上げたくはないのだけれど、實は今夜、僕はあの方をたづねる約束をしてゐたのです――そして、今出かけようとするところへお電話だつたので、あちらへ違約をして伺つてゐるのですよ。もし、僕があなた方の考へるやうな狀態にあるとすれば――」
見る〳〵、ボウとほの紅い血が、星子の目の下を彩つた。彼女は極端によろこばされたに相違なかつた。そしてすぐには何とも答へなかつた。
篤夫も默つた。往々、言葉は多くせぬ方が有効なのである。その間に、星子の小さな胸は、いろいろにいぢらしい空想を夢むだらう――複雜で惱ましい夢を――

突然、コン、コンと、荒つぽいノツクがきこえた。
「あら、お父さまだわ！」
星子は呼びさまされたやうに、ドアの方へ走り寄つた。
長田氏はいつもの癖の、前かゞみな姿勢で、ズリ落ちた袴をひきずるやうにしながら現れた。テーブルへ近づくと、肥えた、短い咽喉の奥で、喘息持ちらしい息使がきこえた。髪は白く、疎く、髯も五分程に伸びてゐた。
立ち上つて、うや〳〵しく迎へようとする篤夫を、有名な政治家は手を觸つて制した。
「顏は古川君の社で見てゐるよ。名前も娘から聞いたよ。そのまゝでよろしい。」
娘がすゝめた椅子に、短いからだをドカリと据ゑて、
「さあ、掛給へ。で、娘からの話では君はすばらしい秀才で、しかも大した運動家なさうぢやな――ハ、ハ、ハ、娘子供にほめられる男は、大ていヤニつこいが、成程、君は體格もしつかりしとる。」
キラリ〳〵と、重たげにかぶさつてゐる厚ぼつたいまぶたの奥で光る目が篤夫にそそがれた。
「病氣で寢てゐる女房も、この娘も、君をわしの祕書に推薦するのぢやが――もちろん、わしも俊敏な青年を手近かにほしい――で、君は娘たちのいふ通り、わしの役に立つてくれようかの？」
セカ〳〵しく、政治家はいつた。

「有難うございます――もちろん。私としましてはこの上ない名譽ですがしかし、古川先生にお見出しを受けたからだでございますから――先生には一方ならぬ御恩がありますので――」

と、篤夫はつゝましく、しかしハツキリした調子で答へた。

「なる程、もつともぢや。」

「だつて、お父さま、あなたがそのお積りで、細田さんもゐらしつて下さるなら、あなたからおつしやれば古川さんの方はどうでも――」

と、星子は氣づかはしげに口をはさんだ。

父親は娘の方をいとしげに微笑して眺めた。

「だがの、男の出所進退は愼重でなければならんのぢや。ぢやが、わしは細田君が古川君に義理を立てる氣持が氣に入つた。ぢやあ、あつちの都合さへつけば、君はわしの方へ必ず來てくれるね？」

篤夫は頭を下げた。

「では、話はきまつた。何とかあつちの感情をソコネぬやうに、わしから話をしよう。」

政治家は立ち上つた。そして笑つた。

「忙がしい中で、娘は自分の事務所へわしを呼びつける――は、は、困つたわがまま女王ぢやよ。」

――星子は、父親を見送つたドアを閉めると、小娘のやうに兩手を打ち合した。

「ああ、よかつたわね、これできまつたわ――お母さまもよろこぶわ。病氣で今夜お目にかかれないのが殘念だけど！」

篤夫は感情をこめていつた。

「僕はお父さまに萬一危害があるやうなことがあれば、自分のからだで防ぎますよ。」

「ありがたうよ！　これであたしも安心したわ！」

――間もなく女中が來て、晩餐の用意が出來たと知らせたが、さまではと、篤夫は濟まして來たといひ拵へた。そして、もう程合だと考へたので辭し去らうとすると、星子は熱心に引き止めた。

「いゝえ、あたしもいたゞきたくないのよ。さき程甘いものを澤山いたゞいたから一ぱいだわ――ね、おいく、あとで、おなかがすいたら何か貰ふわ。いゝのよ――」

近ごろ脾弱くなつて、大てい寢床にゐるといふ母親の目がないままに、星子はかなり我儘にふるまつてゐるに相違なかつた。

二人は熱いコーヒを飲みながら、ストオヴの側で、とりとめもない話に耽つた。星子も亦、他の幸福な妙齡の女性と同じやうに、篤夫の過去の困難な歷史にひどく興味を持つのだつた。篤夫は相手の感動を倍にするために、事實より誇張した物語りを話した。

忽ち、星子は篤夫がもうずつと昔からの親友のやうな氣がして來た。そして、しかも、知り合つて

からの日が淺いだけに、親さの上に珍しさが添はつてゐた。親密と好奇との錯綜の狀態はおしなべてこれを同性に求めることは難い――それは異性の間にだけ經驗される感情で、戀愛とたゞ一線を劃する境だつた。

「――ですから、僕には全く不思議なのです。今年の冬、路上に凍ゑたり飢たりせずに、こんな華麗なお部屋で、あなたのやうな御身分の令嬢とお話してゐられるといふことは――」

「まあ、そんな――」

と、星子は、ふぢ子やはつ子がしたやうに、彼女も亦うつとりと涙ぐみさへしてゐた。

うら若い娘の恍惚は、しかし、間もなく小間使の言葉で破られた。

ごく年の行かない小女は告げたのである。

「只今、古川のお嬢さまからのお電話で、お嬢樣はゐらつしやるかとおつしやいますので、御在宅だと申しますと、では、すぐ伺ふからといふお話でございますが――」

サツと、星子は顏いろをかへた。彼女は篤夫を眺めて、當惑したやうな目を小間使に移して、

「この方がゐらつしやるとはいはなかつたでせうね――まさか。」

「いえ、細田さまとおつしやるお方がおたづねになつてゐやしないかとおたづねでしたので――」

と、まだまるで邪氣なげな小女は答へた。

「まあ、餘計なことを――」

と、星子はおこりつぽく呟いたが、さすがに露骨に感情にあらはさずに、

「いゝことよ。では、まだ電話が切らずにあつたら、どうぞお遊びにいらつしやいましと申上げて頂戴。」

小女は去つた。

篤夫も困却をかくすことが出來なかつた。彼も星子と目を見合したが、すぐにいつもの冷靜さを取り返した。

「しかし、僕がこちらへ伺つてゐるのをよくあの人は當てましたね。」

と、寧ろ、皮肉に呟いた。

星子は呪はしげに、苦く、辛く微笑した。

「ですから先刻もいつたんですわ――あの方、あなたをしんから思つてゐらつしやるのよ――だからあなたのことは何でも見通しなんですわ。」

そして、ぢつとみつめて、

「あたし、何だか怖いわ。」

「何がです？」

「だつて二人ツ切りでかうしてゐるところをごらんになつたら――」
「いゝぢやありませんか。何度もいふやうに、僕はあの人に感情的に何の責任もないのです――」
彼はあからめもせずいつた。そして心に呟いた――
――よかつた。あの娘だけには、僕は一生懸命自重してゐたのだ――僕はあの娘を傷つけたといふ攻撃だけはどこからも受けずに濟むのだ。
彼は最も危險な夕方、彼女と逢曳きの約束をしながら、はつ子の方へ行つてしまつたことを、今になつて祝福するのだつた。
「あの人は僕を責めることは出來ません。況してあなたを――」
「さうでせうか？」
星子は突然、嫉妬を感じたやうに、小さな炎を瞳にちらした。
「いゝわ、あの方、どんな顏をしてあなたを見るか、あたしだまつて見てゐてよ。」
「どうぞ。」
篤夫はすべてが手ッ取早く進轉して行くのを望んだ。そして、かうなつて見れば一刻も早くふぢ子に逢つてしまひたかつた。
二人は目を見合せなかつた――それといふのも、星子がわざとローランサンの畫集に見入つてしまつたので、彼も强ひて話しかけずにあり合せた雜誌のペエヂをかへしはじめた。
しかし五六分すると、ドアの外で何やら話聲がきこえて、女中が扉を開けた。
「古川のお嬢さまがおいで遊ばしました。」
「どうぞ。」
星子はすうと眞直に立つた。篤夫は窓の方へ行つて佇んだ。
はいつて來たふぢ子は、これが昨日まであのやうに華やかに、あのやうに娘らしく、あのやうに生生しかつたその人かと疑はれるばかりに窶れ靑ざめてゐた。髮に艶氣がなく、目の下に薄黑い影があらはれて、脣は乾いてゐた。しかし双の目は大きく輝いてゐた。着更へをする心のゆとりもなかつたらしく、普段着のお召に、對の羽織を引かけたままだつた。
「よくいらしつたわね。寒かつたでしよ？」
星子の脣には、いたはるやうな微笑が浮んだ。篤夫は、しかし、その微笑に誇りかなものを感じた。
「突然、お邪魔しましたわ。すみません。」
ふぢ子は掠れたこゑで星子に挨拶した。そして殆ど女友達をば見ずに、その大きな目を篤夫にまともに向けた。

「でも、あたし、篤夫さんにお訊きしたいことがあつたものですから――」
「こちらの御主人のお呼び寄せで只今伺つてお話を承はつたところです。」
と、篤夫はいつもと變らぬ調子で答へた。
「まあ、お掛なさいね――ストオヴの側がいゝわ。」
と、星子が口をはさんだ。
「ええありがと。」
ふぢ子は大人らしく腰をかがめただけで掛なかつた。彼女はまだ篤夫を見開いた目でみつめつづけてゐた。
「篤夫さん、あたし、昨日お約束を願つたと思ひましたが――お忘れになつて？」
篤夫は微笑した。
「だから今もお話してゐたのですよ。御主人の御用が重大だつたので、あなたの方を違約しなければならなくなつたものですが、理由を御存知ないからさぞ腹を立てゝおゐでだらうと――」
「星子さまのお父さまの御用がどんな重大なものだか。それはあたしには判りませんの――でも、あなたは今、かうして星子さんと一しよにお話してゐらつしやるぢやないこと？　あたしにちよいと電話を下さるひま位――いいえ、そんなことはかまはないわ――たゞ、あたしはこれだけのことをあなたにいひたいと思つてお邪魔したのよ――あたしはあなたからどんなに馬鹿にされても、あたしとしては少しも恥かしくはないといふことを――あなたにどんなに馬鹿にされても、屈辱を感じてはゐないといふことを――」
初々しく、しかし怜悧で勝氣な娘が、何もかもを了解してしまつてゐることを篤夫は知つた。彼は辯解することをやめて、冷たく床を眺めてゐた。
「あたし、あなたにどんな取扱をうけても、口惜しいとは思はないわ。そんな風に思はないで下さい。」
ふぢ子は叫ぶやうにいつて、くるりと篤夫に背を向けたが、急に振の長い袂を顏に押當てた。
「どうなすつたの？　ふぢ子さん――あたしには、ちつともわけが判らないわ。」
星子はふぢ子の肩にさはりながら、篤夫の方を目をしはめるやうにしてちよいと見て、
「父からいはれて電話で篤夫さんをお呼びしたのはあたしなのよ。ね、そんなにおこらないで頂戴。何だか、あたしが惡いことをしたやうだわ。」
篤夫はたつたこなひだまで、まるで無邪氣な娘たちのやうに見えてゐた、この二人の若い女性が、驚くべき成女らしさを發揮しはじめたのに好奇心を感じた。しかし、二人の方はかへりみずに、床に目を落しつづけてゐた。

「さあ、ふぢ子さん、お掛なさいね。氣を靜めて頂戴。」
ふぢ子は、張り詰た氣がゆるんだやうにクタ〳〵と椅子に坐つて、テーブルに顏を伏せた。
篤夫はいつた。
「ふぢ子さんは何か全然誤解なすつてゐるやうです——しかし、今夜こゝでいひわけをしても仕方がないでせう——星子さん、失禮しました。僕がゐない方がいゝやうです。いづれお二方にお詫に伺ふことにして失禮します。」
星子は止めなかつた。
「さう？」
と、彼女はふぢ子の肩に手をかけたまゝ、篤夫を眺めて呟いて、意味ありげにうなづいて見せて、
「それでは、ふぢ子さんにはあたしからよくお話するわ。また、みんなで仲よくゆつくり逢ひませうね。」
彼女はテーブルの脚につけたベルを鳴らした。そしてドアを開けた女中に篤夫を見送らせた。
篤夫は冷たい夜氣の中へ出て、大きく息をした。彼を大きな世の波は運び去りつゝあつた。どこへ行くのか、何を目的にするのか自分にもわからなかつたが、萬事、目前に好都合ならそれでいゝ氣がした。

——ふぢ子は氣がさな娘だ。父親へは何もいはないであらう——古川さんは、何も氣づかずに、惜みながら僕を手放す外はあるまい——どちらも傷つかずだ——しかし、ふぢ子も可憐な女であつた。
彼は大股に歩いた。風はなかつたが夜寒は星の光りと一緒にチカ〳〵と肌を刺すのであつた。